

目 次

1	第 25 回 三遠南信サミット 2017 in 遠州 プログラム	1
2	全体会 主催者挨拶・来賓祝辞	4
3	全体会 パネルディスカッション	10
4	「道」分科会 要旨	22
5	「技・人」分科会 要旨	36
6	「風土」分科会 要旨	54
7	「山・住」分科会 要旨	70
8	報告会 要旨	84
9	交流会	90
10	三遠南信地域住民セッション（同日開催） 要旨	92

1 第25回 三遠南信サミット2017 in 遠州 プログラム

- 期 日 平成 29 年 10 月 30 日（月）
- 会 場 オークラアクトシティホテル浜松（浜松市中区板屋町 111-2）
アクトシティ浜松コンgresセンター（浜松市中区板屋町 111-1）
ホテルクラウンパレス浜松（浜松市中区板屋町 110-17）
- 主 催 三遠南信地域連携ビジョン推進会議（SENA）
- 共 催 三遠南信地域経済開発協議会
- 後 援 農林水産省、経済産業省、国土交通省
- 参加者 600 名

■ 日 程

1 全体会（13:40～15:10）〔会場：オークラアクトシティホテル浜松 平安〕

○挨拶

・主催者挨拶

三遠南信地域連携ビジョン推進会議会長 浜松市長 鈴木 康友

・来賓祝辞

国土交通省中部地方整備局長	塚原 浩一 氏
農林水産省関東農政局次長	米田 博次 氏
経済産業省関東経済産業局地域経済部長	三浦 裕幸 氏
静岡県副知事	吉林 章仁 氏

○シンポジウム

・テーマ：「三遠南信地域の将来像」

・進行役：静岡文化芸術大学 副学長 池上 重弘 氏

（第2次三遠南信地域連携ビジョン策定委員会委員長）

・パネリスト：

浜松商工会議所会頭／SENA 副会長 大須賀 正孝 氏

NPO法人地域づくりサポートネット代表理事／三遠南信住民ネットワーク協議会代表世話人 山内 秀彦 氏

愛知大学 教授 三遠南信地域連携研究センター長 戸田 敏行 氏

阿南町長（愛知・長野県境域開発協議会） 勝野 一成 氏

浜松市長／SENA 会長 鈴木 康友

2 分科会（15:30～17:00）

- ・テーマ：「新ビジョンの基本方針～プロジェクト」

○「道」分科会〔会場：オークラアクトシティホテル浜松 チェルシーⅠ〕

コーディネーター：浜松市長 鈴木 康友

○「技・人」分科会〔会場：オークラアクトシティホテル浜松 チェルシーⅡ〕

コーディネーター：静岡文化芸術大学 副学長 池上 重弘 氏

○「風土」分科会〔会場：アクトシティ浜松コンgresセンター 41 会議室〕

コーディネーター：法政大学 教授 高柳 俊男 氏

○「山・住」分科会〔会場：アクトシティ浜松コンgresセンター 43・44 会議室〕

コーディネーター：豊橋技術科学大学 理事・副学長 大貝 彰 氏

3 報告会（17:30～18:00）〔会場：オークラアクトシティホテル浜松 平安Ⅲ〕

- ・各分科会の報告 : 各分科会コーディネーター
- ・サミット宣言 : 浜松市長 鈴木 康友
- ・次回開催地域代表挨拶 : 豊橋市長 佐原 光一

4 交流会（18:15～19:45）〔会場：ホテルクラウンパレス浜松 芙蓉の間〕

5 その他

- ・三遠南信地域住民セッション（10:00～12:15）
- ・三遠南信地域経済開発協議会（10:30～12:30）
- ・新ビジョンに関する拡大委員会（13:00～13:30）

2 全体会 主催者挨拶・来賓祝辞

◆主催者挨拶



■三遠南信地域連携ビジョン推進会議

会長 浜松市長 鈴木 康友

本日は、第25回三遠南信サミット2017in遠州に、関係省庁、地方公共団体、経済団体、住民団体、大学など三遠南信地域に関係する多くの皆様に、御参加を賜りまして誠にありがとうございます。

前回のサミットから、新たに加盟団体が増えました。長野県の伊那市、辰野町、箕輪町、南箕輪村の4市町村、また伊那商工会議所と伊那市商工会の皆様にも御参加いただくことで、39市町村、51の商工会議所・商工会、3県と、全てで93の構成員となりました。こうして、さらに仲間が増えたことを大変うれしく思っております。

今回、25回目でございますが、平成5年に浜松からスタートしたこのサミットも、9巡目になりました。25回ですから、四半世紀にわたり、こうした連携を積み重ねてきたこととなります。また、平成20年度には、具体的な連携を推進していくために三遠南信地域連携ビジョンを策定し、三遠南信自動車道の整備、リニア中央新幹線の事業、防災の連携、産業における連携、様々な成果を積み重ねてまいりました。そして10年がたった今、新たなビジョンの策定に向けて準備中でございます。第2次三遠南

信地域連携ビジョン策定委員会が、8月からその議論を進めており、本日、この新ビジョン策定に向けた様々な御意見をいただくことになっております。皆様からいただいた御意見をもとに、さらにバージョンアップした新ビジョンの策定を進めてまいりたいと思っております。

さて、この10年を振り返ってみると、随分といろいろな社会的な変化がございました。日本全体が人口減少時代に突入するという衝撃的な増田レポートを皮切りに、地方に大きな影響が出るということで、国を挙げた地方創生の取り組みが始まりました。地方創生は、それぞれの地域、あるいは自治体が、地域の特徴、資源を生かして、知恵を出し、汗もかいて地域を活性化していく取り組みでございますが、それに加えて、一つ一つの自治体、地域だけではなく、今後は広域で様々な取り組みをしていくことが大変重要になってまいりまして、国もそうした取り組みを大いに後押ししています。私どもははるか前から県境を越えた連携を進めており、以前から注目されていましたが、現在でも非常に特徴的な連携だと注目を浴びているところでございます。ぜひ、これからの地方創生の時代に向け、日本の先駆けとなる県境を越えたこの連携を推進していきたいと思っております。その大もとになるのが新ビジョンであると思っておりますので、本日はキックオフとして、素晴らしい会になりますことを大いに期待したいと思います。

結びに当たりまして、それぞれの参加者の皆様の一層の御理解と御支援、御協力をお願い申し上げまして、御挨拶とさせていただきます。

本日は、誠にありがとうございます。

◆来賓祝辞



■国土交通省中部地方整備局長

塚原 浩一 氏

本日は、この三遠南信サミットが、大変盛大に開催されることを心よりお喜び申し上げます。三遠南信サミットにお呼びいただくのは2回目なのですが、各地域の首長を始めとして、産官学民を含めた各界のリーダーの方々が一堂に会するという事で、大変素晴らしい催しだと改めて思っております。

三遠南信地域は、昔から塩の道、秋葉街道、あるいは天竜川を介して、上中下流、沿岸域まで含めて、様々な形で幅広い連携・交流があったところだと思います。人、物だけではなく、歴史、文化、経済など、様々な交流があったと思います。そういったものをベースにして、現代でも県域を越えたこの地域が一体となって様々な形で地域振興のための連携を図るということは、国全体を見渡してみても、先進的で画期的な取り組みであると私どもも思っております。さらに、これが四半世紀という非常に長きにわたって、大変活発に活動されていて、様々な成果を挙げているということは、大変素晴らしいと思います。いわば、伝統的な交流を、社会情勢の変化を踏まえて現代的に再構築している取り組みだと思います。特にこの地域は、自然環境、産業、歴史的・文化的な資産など、各地域で保有する様々な強みを最大限に生かしていくこと

が、この地域の連携の意義だと思っております。また、その中で、2027年のリニア中央新幹線の開業も見据えて、様々な新しい取り組みが進んでいることだろうと思います。これまでの皆さんの御努力に敬意を表するとともに、この三遠南信地域の取り組みがさらに深化していくことを期待させていただきたいと思っております。

私ども中部地方整備局は、天竜川、豊川などの河川の管理、この地域全体の防災対策、何より三遠南信自動車道の事業を担わせていただいているということで、まさにこの三遠南信地域の取り組みの非常に大きな部分を担わせていただいております、非常に責任が重大だと改めて思っているところでございます。

三遠南信自動車道につきましては、何とか皆さんの御期待に応えられるように一生懸命事業を進めているところであり、今年度は飯橋道路の（仮称）龍江インターチェンジから（仮称）飯田東インターチェンジまでの3.4キロメートルが開通いたします。また、来年度には、佐久間・三遠道路の（仮称）佐久間インターチェンジから（仮称）東栄インターチェンジまでの6.9キロメートルが開通の見込みとなっております。そのほかにも、天龍峡大橋や青崩峠のトンネルの工事、佐久間と水窪の間のこれから事業化していく区間の環境アセスメントの手続など、一生懸命進めている状況でございますし、現道改良区間につきましては、長野県、浜松市に一生懸命頑張っているということで、着々と成果を挙げさせていただいております。

また、天竜川、豊川の治水対策につきましても、ダム事業、河川事業、砂防事業など、着実に進めているところです。我々の取り組みが、この三遠南信地域の取り組みに大きく貢献できることを念頭に置いて、一生懸命頑張っているところでございます

ので、御出席の皆さんには、私どもの取り組みにつきまして、引き続き御支援、御協力をいただければありがたいと思います。

本日は、このサミットの成功を祈念いたしまして、また、この三遠南信地域のますますの御発展を祈念いたしまして、御挨拶にかえさせていただきます。本日は、誠にありがとうございます。



■農林水産省関東農政局次長 米田 博次 氏

本日は、三遠南信サミットにお招きいただきまして、本当にありがとうございます。主催者の三遠南信地域連携ビジョン推進会議関係者の皆様方、このサミットが盛大に開催されますことを、心よりお祝い申し上げます。また、御臨席の皆様方におかれましては、平素より農林水産行政の推進に格別の御配慮を賜っております。本当にありがとうございます。今回で25回目と伺っていますこのサミットで、県境を越えた地域の皆様一堂に会し、文化、歴史、産業振興等の取り組みを継続していらっしゃることに對して敬意を表する次第です。

さて、農林水産省におきましては、「農林水産業・地域の活力創造プラン」に基づきまして、農地中間管理機構の活用による農地の集積・集約、農業委員会の改革、米政策改革、農林水産物の輸出等、様々な改革に取り組んでまいりました。昨年11月に、「農業競争力強化プログラム」を取りまとめまして、農業者の努力だけでは解決でき

ない構造的な問題を解決して、農業者の方々が自由に経営できる環境を整備するために、例えば生産資材価格の引き下げや、流通・加工構造の改革、土地改良制度の見直し、収入保険制度の導入などの取り組みを進めているところでございます。

我が国では、今、人口減少社会への対応も課題となっていますが、世界に目を転じてみますと、人口は増加の一途をたどっており、世界の農産物市場は今後とも非常に拡大する可能性があると考えております。この三遠南信地域は、国内有数の農業産出額を誇る産地を抱えており、また連携して商談会を開催するなど、輸出にも積極的に取り組んでおられると伺っておりまして、非常に心強く思っております。

私どもとしましては、ユネスコの無形文化遺産への和食の登録、2020年の東京でのオリンピック・パラリンピックの開催などを好機と捉えて、関係機関と連携し、訪日観光客の受け入れを促進してまいりたいと思っております。農山漁村への滞在型旅行である農泊等を通じて、この三遠南信地域の自然豊かな素晴らしい景観や日本ならではの生活形態など地域の魅力を発信し、「人、もの、情報」が活発に行き来する取り組みを進めてまいりたいと考えているところです。

ここ浜松市を見ても、三方原台地は近隣に天竜川、あるいは浜名湖といった豊富な水資源があるにもかかわらず、高台まで水を供給する手段がなく、以前は慢性的な水不足に悩まされてきましたが、土地改良事業により台地にまで農業用水が供給され、現在ではガーベラやミカン、馬鈴薯、お茶等の一大産地となっており、その多くは日本全国においても高いシェアを占めております。また、浜松市はウナギを始めとした水産物、あるいは天竜区を中心とした杉などの木材の生産地域でもあります。これら

のブランド力を生かした地域活性化に大変期待するところでして、今後とも地域の農林水産業の振興を全力で後押ししたいと考えております。

今回のサミットのテーマは、「250万流域都市圏の自立への喚起～新ビジョン策定に向けて～」だと伺っております。このビジョンの実現に向けて、関係する皆様方が意見を交えるということでございまして、このサミットが有意義なものとなり、三遠南信地域のさらなる発展につながることを心より祈念いたしまして、御挨拶とさせていただきます。本日は、本当におめでとうございます。



■経済産業省関東経済産業局

地域経済部長 三浦 裕幸 氏

本来であれば局長の後藤が出席して一言御挨拶申し上げるべきところでございますが、どうしても抜けられない公務がございまして、本日は私が代理で参った次第でございます。

まず、こうして場内をずっと見渡しますと、たくさんの方々がこの場に集まっていたっており、まさにこの地域のポテンシャルの高さ、25年間取り組んでこられた成果を示すものと存じます。改めて関係者の方々の御尽力に敬意を表しますとともに、ますますの御発展を願ってやまないわけでございます。

さて、我が国は少子高齢化や人口減少な

どの課題を抱えております。これらは、一部の人たちが一朝一夕で取り組んで解決できるものではなく、私どものこの社会のあり方、生活スタイルそのものを根本的に見直して変革を促していかなければ解決できない課題です。この課題解決に向けて、政府の中では様々なビジョンを策定し、一つの省庁にとどまらず、全ての省庁が一丸となって取り組んでいくことになっておりますし、経済界の方々、地方自治体の方々も、IoTやAIといったテクノロジーを使って、この課題を何とか乗り越えるためにはどうしたらいいかということを日々考えながら取り組んでいらっしゃるものと存じます。

その中で、この三遠南信地域では、次のフェーズに入る新ビジョンの策定に取り組んでいらっしゃるのと伺っており、大変素晴らしいことと存じます。10年後、20年後、この地域をどのような姿にしていくのか、ぜひ未来に向けた夢のあるビジョンを皆様方でつくり上げて、それを実行して未来を切り開いていくことを御期待申し上げます。

私ども経済産業省の関連するところでは、今年7月に地域未来投資促進法が施行されました。これは、自治体や企業の方々が連携して未来につながる投資を行う場合に、減税措置や財政面、人材面での支援を行うものです。微力ではございますが、私どももこの地域の未来に向けて、何か御一緒にできることがあればと考えてございます。

結びになりますが、本日お集まりの皆様方のますますの御発展と、このサミットが大きく成長することを祈念いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。本日は、誠におめでとうございます。



■静岡県副知事 吉林 章仁 氏

本日は、第25回三遠南信サミット2017in遠州が、このように多くの皆様にお集まりいただきまして開催されますことを、心からお喜び申し上げます。また、日頃から県政の推進につきましては、皆様方には大変お世話になっており、この場をお借りして厚く御礼を申し上げる次第でございます。

私は、浜松市天竜区出身でありますことから、三遠南信地域は昔から親しみが大変強い地域であり、歴史的にも文化的にも、あるいは交通的にも、大変結びつきが強いことを小さいときから実感をしているところでございます。

平成24年4月に新東名高速道路の静岡県内区間162キロメートルが一気に開通し、その後、平成28年2月に浜松いなさジャンクションと豊田東ジャンクション間が開通いたしましたので、愛知県と静岡県が、東名高速道路と新東名高速道路の2本の高規格幹線道路でつながり、大変ポテンシャルの高い地域になりました。

静岡県といたしましては、新東名高速道路が開通しましたことを捉えまして、「『内陸のフロンティア』を拓く取組」を始めております。新東名高速道路を背骨に例え、東日本大震災で被害の大きかった沿岸部を防災上どのようにネットワークで支援するか、中山間地域をどのように生かすかということで、内陸・高台部のイノベーションと、沿岸・都市部のリノベーション、

多層的な地域連携軸の形成、この三つを中心に内陸フロンティアを推進してまいりました。おかげさまで、県内35市町の全てでプロジェクトを立ち上げていただきまして、現在84の事業が展開されております。例えば、広域物流拠点、農業・観光の関連施設、職住近接の地域づくりなどが84の区域で進められております。具体化されたものもございますし、現在進行形のものもございますけれども、これを県全体で推進してまいりたいと考えております。さらに、今後は長野県、愛知県、神奈川県と連携いたしまして、近県、隣県にもネットワークを組んでいきたいと考えております。三遠南信地域の連携につきましては、その中での核としても期待をしているところでございます。

また当地域において、県ではフォトンバレープロジェクトを随分前から進めております。東三河地域とは光分野でも、農業分野でも非常に強い結びつきがあり、産業関係の連携でもポテンシャルの高い地域でございます。

それから、今年NHKの大河ドラマで放送されております井伊直虎は浜松市の出身でございますが、番組を見ますと、三遠南信地域にも舞台が広がってきていると感じております。そういった意味でも、今、非常に良い時期が来ているのではないかと考えております。新しいビジョンを策定されるということでございますので、これまでの蓄積と環境の変化を踏まえた新しいビジョンができ上がることを、県としてもぜひ応援したいと思っております。

また、長野県の太田副知事とは私が経済産業部長を務めていた頃から親交がございます。それから昨年、愛知県の東三河担当の石原副知事が静岡県庁においでいただき、私も今年5月に東三河総合庁舎を訪問いたしました。知事同士は当然でございますが、

副知事同士も顔の見える関係でございますので、このプロジェクトがうまくいくように御支援申し上げたいと考えております。

結びに当たりまして、本日のサミットが新しいビジョンの展開に大いに役立つことを期待申し上げまして、お祝いの挨拶いたします。本日は、誠におめでとうございます。

3 全体会パネルディスカッション テーマ「三遠南信地域の将来像」

登壇者一覧

(敬称略)

役割	所属	氏名
コーディネーター	静岡文化芸術大学副学長／ 第2次三遠南信地域連携ビジョン策定委員長	池上 重弘
パネリスト	浜松商工会議所会頭／SENA 副会長	大須賀 正孝
パネリスト	地域づくりサポートネット代表理事／ 三遠南信住民ネットワーク協議会代表世話人	山内 秀彦
パネリスト	愛知大学教授 三遠南信地域連携研究センター長	戸田 敏行
パネリスト	阿南町長／愛知・長野県境域開発協議会員	勝野 一成
パネリスト	浜松市長／SENA 会長	鈴木 康友



司会

平成20年3月に策定されました三遠南信地域連携ビジョンが10年という期間の満了を迎え、次のビジョンを策定することとなりました。そこで、本日は新ビジョンに向けて、市民団体や産学官の代表者をお迎えして、「三遠南信地域の将来像」をテーマとしたパネルディスカッションを行います。パネルディスカッションのコーディネーターは、静岡文化芸術大学の副学長であり、第2次三遠南信地域連携ビジョンの策定委員長でもあります、池上重弘

様にお願いいたします。

それでは、御議論をいただく前に、SENA 事務局長の久米より、今回のサミットのテーマともなっております新ビジョンの策定に関する説明をさせていただきます。

SENA 久米事務局長

本年度から開始しました第2次三遠南信地域連携ビジョン策定の状況について、御報告申し上げます。

まず、策定方針でございますが、基本的な考え方は、現行ビジョンを基本とし、地域の状況の変化を踏まえた新ビジョンへと更新してまいります。計画期間はおおむね10年、範囲は、39市町村としております。スケジュールとして、平成30年度の三遠南信サミットで最終報告の予定でございます。

次に、策定体制ですが、第2次三遠南信地域連携ビジョン策定委員会を設

置し、検討を進め、SENA 拡大委員会、そして、本日のサミットにおいて、さらに議論を深めていただく予定でございます。

続いて、三遠南信地域のポテンシャルです。三遠南信地域の人口は都道府県と比較した順位で14位相当、事業所数は15位相当、特筆すべきは、農業生産額の7位相当、製造品出荷額の6位相当です。このほか、年間商品販売額も、17位相当となっています。

続いて、人口推計です。平成27年の国勢調査の結果、この地域の人口は247万人を数えております。これが、10年後の平成39年度においては231万人となり、約15万人の人口が減少する想定でございます。

続いて、人口推計の年齢層割合ですが、高齢者人口は増加傾向にあり、一方で生産年齢人口、年少人口においては減少の一途をたどっております。こうした背景の中、ビジョンを策定するというところでございます。

続いて、新ビジョンの目的でございますが、こうした環境の変化を踏まえ、現行のビジョンの五つの目的を次のように修正しております。一点目は、交通基盤整備の進展に伴う交流・連携活動の深化。二点目は、産業構造の転換期を先取りする産業創造力の強化。三点目は、三遠南信地域特有の地域資源の活用による交流人口の拡大。四点目は、流域住民が共生する県境を越えた広域生活圏の形成。五点目は、三遠南信地域の持続的発展を支える人づくり。これらの新たな目的を設定し、新ビジョンの策定を進めてまいります。

新ビジョンのテーマも見直しを行い、「三遠南信流域都市圏の創生」とし、サブタイトルを、「日本の県境連携先進モデル」としております。三遠南信地域は、天竜川、豊川流域を基軸とし、道や鉄道を通じ人々が行き交い、交流することで、都市の発展とともに、歴史を積み重ね、一体的な流域都市圏を形成してまいりました。圏域住民が持続的発展と自立を目指し、この地域を創生するという考えのもと、テーマを「三遠南信流域都市圏の創生」としました。また、この地域で実践されている産学官の連携や地域間交流の取り組みの成果が、やがて日本の県境連携を牽引し、我が国の地方創生に貢献することを目指してまいります。

次に、新ビジョンが目指す地域像です。こちらは、一点目を現行ビジョンから修正しております。国土形成計画においては、リニア中央新幹線の開業により、東京、名古屋、大阪の3大都市圏が一つにつながり、スーパーメガリージョンを形成すると見込まれており、世界を先導する巨大経済圏の形成の中で、本地域は広域連携都市圏の形成を目指すものでございます。

最後に、新ビジョンの基本方針の案でございます。こちら、5分野を修正し、新たに「人」の分野を創設してまいります。人の分野は、地域の持続的発展に向けた人材集積地の形成を進めるものでございます。このほか、現行ビジョンで別々でした「山」「住」を一つとして、安全安心な広域生活圏の形成を進めてまいります。本日の分科会では、この基本方針や重点事業につ

いて御意見を頂戴したいと考えております。

新ビジョン策定状況についての報告は、以上でございます。



コーディネーター

静岡文化芸術大学 池上副学長

静岡文化芸術大学で副学長を務めております、池上と申します。私はインドネシアの文化人類学研究、そして最近ではこの地域で増えている外国人と共に地域をどうつくっていくかという多文化共生が専門ではありますが、今回、地元の課題ということで、新ビジョン策定委員会の委員長とこのパネルディスカッションのコーディネーターを務めております。

このパネルディスカッションに先駆けて二点確認したいと思います。

一つは、この三遠南信地域の枠組みが、県境を越えた広域連携の中でも老舗であるということです。25年の歴史があるだけに、いろいろな先駆的な達成もある一方、様々な課題もほかの地域に先駆けて感じており、それを今回議論したいと思っております。

二つ目は、現行ビジョンの策定から10年が経ち、その節目に当たるということです。道路ができて、リニア中央

新幹線が開通する目途も立ってきました。一方で、2008年のリーマンショックがあつて、この地域も大きな打撃を受けました。さらに、2011年の東日本大震災で、私たちは日本という国が非常に大きな災害に見舞われる国なのだと、また、それを契機に人々のきずなについても、改めて感じました。こうした変化の中で、この先10年間を見通して、三遠南信地域の連携がどのようなものになっていくか、あるいはなっていくべきかについて、本日は5名の方に御意見を伺っていきたいと思っております。

はじめに、SENA 会長でもある、地元浜松市の鈴木康友市長に、新ビジョンへ向けての御意見を伺いたいと思います。お願いします。



浜松市 鈴木市長

この三遠南信地域の連携は、大変歴史のある連携でございます。直虎を見ていただけると一目瞭然ですが、歴史的に大変結びつきの強い地域だということがよく分かります。井伊直親は今川氏に追われて、新城市にある鳳来寺を経由して、飯田市の隣の高森町に逃げました。飯田市にも井伊家の末裔が

いらっしやいますし、家康公は三河から来て遠州に根をおろし、この地一帯を拠点として天下取りの布石を打ったわけです。

歴史的にも大変つながりの深いこの地域は、明治になって県の境目が切られ、それぞれ県が分かれました。かつては、国、県、市町村という縦の系列の中で、国や県からふんだんに補助金が交付され、市町村は国や県の言うことを聞いていれば市町村経営ができたという時代でした。しかし、これからは、それぞれの地域が自ら頑張るさい、国もそういう地域を支援します、という地方創生の時代で、実は大変厳しい時代でございます。10年前、県境を越えたこの地域の連携は、非常に奇異に思われ、何となく特殊な地域という感じでしたが、最近はあまり特殊な地域という感じはしません。この地域以外でも、県境を越えた広域連携が始まっておりますし、この10年の間に大きく時代が様変わりして、逆に言えば、具体的な連携事業を進化させていかなければいけない時代となりました。県境を越えた取り組みの中で、これまでも具体的には防災や産業政策など、いろいろな取り組みをしてきましたものを、これからもっと具体化し、推進していく、実装していく段階に入ってきたのではないかと考えております。

各自治体でそれぞれ連携の体制についての意見は違うと思いますが、共通しているのは、連携事業が必要であるということだと思います。具体的なプロジェクトを進めていってほしいという声も聞きます。新ビジョンは、そう

した具体的なプロジェクトの大もととならなければいけないと考えております。新ビジョンのもとに、具体的な連携事業がどんどん進んでいけば、まさに地方創生時代における県境を越えた連携の先進モデルとして、一層この三遠南信地域の連携が光輝いていくのではないかと思います。

コーディネーター

皆さんもNHKの大河ドラマ「おんな城主 直虎」を御覧になっておられるかと思いますが、あの時代、山を越え、谷を越え、この地域がつながっていたことをよく理解することができました。

また、明治以降に県境がつくられましたが、今、また新たな地方創生の時代の中で、実体的な連携が必要であり、そのために、現在策定中の新ビジョンでは、より具体的なプロジェクトを進めていく方向性を示すといいのではないかと御指摘をいただきました。

それでは、次に、浜松商工会議所の大須賀会頭から、経済界から見たこの地域の未来について、お話を伺いたいと思います。



浜松商工会議所 大須賀会頭

まず、三遠南信自動車道を早期に開通させることが、非常に重要だと思っています。私も前回のサミットで飯田へ行く際に、浜松を午前6時に出発し、午前10時半開始の会議に何とか間に合いました。隣り合った地域にもかかわらず、東京へ行くよりも飯田へ行く方が、時間がかかり、こんなことがあっていいのかといつも思います。気賀にある「おんな城主 直虎」大河ドラマ館への来訪者数も、現在は60万人を超えて80万人を目指すと言っていますが、三遠南信自動車道が開通していたら100万人や120万人もなっていたでしょう。我々のトラックの業界も、東京へは残業なしで行けますが、飯田へ行くのは残業になります。いろいろな分野への波及効果を考えると、三遠南信自動車道や浜松三ヶ日・豊橋道路などの整備は絶対に必要だと思うのです。

もう一つは、人の問題です。浜松商工会議所で調査をしたところ、70%の企業が人手不足だと回答しました。また中小零細企業で廃業してしまうものが30%くらいあり、そのうち後継者がいないために廃業してしまう企業が66%でした。人材不足はこれほど深刻だということです。去年60歳になった人がおよそ150万人いる一方で、去年成人した人はおよそ120万人、去年産まれた人が100万人を切りました。計算していくと、今から20年後には就業者が半分になることになります。私は、このことについて国も県も市も、もう少し真剣に考えないといけないと思います。対応として、「外国人労働者を

受け入れよう」と言うと、治安が悪くなるという理由をいわれますが、衣食住が確保できれば悪いことをする人はいないと考えています。だから私はこの地域で外国人労働者の受け入れをやってみてはどうかと申し上げてきました。もし企業に人手が要らなくなったときには、市町村で衣食住をきちんと確保し、その費用は企業が支払えば困ることは何もない。人口が減れば、経済規模が縮小し、今しっかり対策を打ち出さなければ日本は沈没してしまいます。この地域でルールをきちんと整備して、テスト的に1回行なってみるべきだというのが私の考えです。

コーディネーター

かなりラディカルな発言もありましたが、サミットらしいと感じているところです。

二つ論点があったかと思います。一つは、交通ネットワークの整備がこの地域においては大切で、経済や観光の発展に大きなインパクトを持つはずだということで、物流の最前線で仕事をされている大須賀会頭らしい御指摘をいただきました。

二つ目の論点は、人の問題でした。調査によれば、多くの企業で人手不足や後継者の問題を抱えていること、その具体的な解決案の一つとして、この三遠南信地域で外国人労働者を受け入れてみてはどうだろうかということでした。受け入れにかかわる費用を受益者である企業が負担するとのお話を商工会議所の代表としていただきましたので、私も非常に期待を持って聞きま

した。

それでは、次に、愛知大学の戸田教授に、この地域の交通のこと、人材のことはもちろんですが、面としてのこの地域のことについて、資料をもとにお話をいただきたいと思います。



愛知大学 三遠南信地域連携研究センター 戸田センター長

10年前と比べて、リニア中央新幹線のルートが明快になり、また新東名高速道路も開通し、東西方向のラインが非常に強くなりました。リニア中央新幹線沿いと東海道新幹線沿いをどう進展させていくかという調査で、リニア中央新幹線と東海道新幹線を相互に結び合わせたいとの意向が出ています。そうすると、東海道新幹線の活用方法や、新幹線駅周辺の土地利用も変わってくると思います。

県境域の連携は全国に広がっております。明治になったときに藩を分断されたようなところは、特に徳川系や反政府系の藩、つまり朝敵藩が多く、大体妙なところに県庁所在地があります。こういった地域は全国にたくさんあります。愛知大学三遠南信地域連携研究センターは、文部科学省共同利用・共

同研究拠点事業における「越境地域政策研究拠点」に認定されております。三遠南信地域は県境を越える地域づくりのモデルですので、この地域の連携は、全国に波及していく可能性があるということです。

次に、人材育成のことについてお話をしたいと思います。SENA 関連団体の活動は、民間でも行政でも、文化的なものもあれば、スポーツに類するものもありと多様です。SENA 自体は何を主事業にしていたのかというと、人材育成関連のものでした。「人材育成円卓会議」という場で、市町村長、経済界の代表の皆さんで人材育成について議論され、その会議を通じてまとめたものの一つに、大学生と地域企業の交流促進事業がありました。東三河地域の学生が田原市にあるトヨタの工場を知らないなど、学生が地元の企業を知らないことがあります。そのため、地域にある企業の情報を知らせることが重要だとされました。三遠南信地域には、18の大学があります。学生数を全て足すと、大体2万3,000人ですから、毎年5,000人強の学生が、卒業、入学しているのです。そのうち、三遠南信地域内の出身者が占める割合は約4割で、約6割が地域外の出身者です。また卒業後の地域内への就職数は、統計で見ると約3割で、約7割の卒業生は地域外に出ています。地域外出身の学生たちへどのような情報を発信するのか、あるいは地域内出身の学生をどのように地域に結びつけるのか、これも一つの課題ではないかと思います。

また、学生はアルバイトに非常に生

活の重点を置いている傾向があります。アルバイトは社会への入り口でもあるのですが、インターンバイトなど、アルバイトをよりデザインすることが一つのやり方ではないかとも提案をされております。

最後にこれからライフスタイルは、学生、就職、引退という3ステージ型から、多ステージ型に変化していくだろうといわれています。企業も変わると同時に、長くなる人生をどのようにしていくか考えなければなりません。2015年と2040年を比較すると、労働力人口は30万人減の約100万人、3割くらい減の見込みです。しかし、働く年限を仮に79歳まで延ばすと労働力は146万人となります。これは、計算上の数字ではありますが、65歳以上が65～75万人となり、労働力人口に近くなります。この世代に生きがいとなる働き方をいかに用意するかが重要です。このようなライフスタイルになると、学生時代だけでなく、生涯いろいろな学びをすることになりますので、学ぶ年代も、分野も広がり、そこに大学が担うべき役割があると考えます。今の話は構造ですが、考えていく一つの課題ではないかと思っています。

コーディネーター

東京、名古屋、大阪を一つの都市圏ととらえるスーパーメガリージョンの中で、この三遠南信地域がどういった位置づけなのかがよくわかりました。

また、県境をまたぐ広域連携の中で全国を見たときに、この地域に非常にたくさん丸がついていることも、改め

て認識できました。

また、この地域には18大学に学生が2万3,000人いるとのことでした。一つ一つは大きな大学ではないのですが、まとめるとなかなかの規模だと思います。三遠南信地域外からこの地域に学生を呼び込み、また、この地域で学んだ学生になるべくこの地域で就職してもらうという地域に対するロイヤリティを高める働きかけが必要であり、その中でも、学生に地域の企業を知ってもらう交流の促進、あるいはインターンバイトの御提案をいただきました。

さらに大学はこれまでのように18歳をメーンターゲットとするだけではなく、リカレント教育や生涯学習などを視野に入れ、一旦卒業した人もまた大学で学び直す21世紀的な方向へのかじ取りも大事であると御指摘をいただきました。

それでは、次に、阿南町の勝野町長から県境に接する町から見える三遠南信地域の取り組みの可能性、そして課題についてお話をお願いします。



阿南町 勝野町長

私からは、私どもの町を縦断し、遠州街道といわれている飯田市と豊橋市

を結ぶ重要な国道151号の話をいたします。本日の三遠南信地域連携ビジョンの話も、我々が取り組んでいる愛知・長野県境域開発協議会も、道が全てを解決していくという考えを持っております。道路は非常に大事で、文化、経済の源でもあります。我々の地域にとっては命の源です。阿南町は愛知県と接し、隣村の天龍村は静岡県に接し、峠越えの厳しいところに位置しています。道路事情も非常に厳しく、同じ長野県の飯田市周辺の高校へ行くにも、自宅から通学することは不可能で下宿しなければならない時代もあり、非常に苦勞をしてまいりました。今では通学や、楽に買い物も行ける中で、道路のありがたみを本当につくづく感じてきました。

先人が道路整備の重要性を感じて、県境に接した町村で協議会をつくり、道路の改良促進の運動を始めて40年が経過いたしました。国道151号も整備が進んでまいりましたが、平成23年に愛知県豊根村にある太和金(たわがね)トンネルで大きな落盤事故がありました。当初、大した影響はないだろうと感じていたわけですが、交通に支障が出て、特に阿南町を中心に長野県の町村では、約5割近くの観光来客数の落ち込みがありました。その際に、愛知・長野県境域開発協議会が両県へお願いをし、非常にスピーディーな対応をいただいたわけです。それぞれの町村は県境を挟んでいるものの、昔からの交流があるおかげで顔が見えて、気心が知れた相手同士であったおかげで、バイパス工事、トンネルの新設工事が

急ピッチで実現したわけです。また、三遠南信自動車道の鳳来峡インターチェンジや、いなさジャンクション等ができてくる中で、国道151号を通して我々の地域へやってくる来客数が、35%と大きく伸びたわけです。阿南町にある道の駅では、かなりの来客数で駐車場が足りないこともあります。さらに今、阿南町にある医療施設や県立病院に愛知県側からやってくる患者数は月に80名を超えており、医師も連携して動けるようになりました。

これらを実現した道路、また両県を巻き込みながら大きな成果をもたらしてきたこの愛知・長野県境域開発協議会は非常に重要なものだと思っています。様々な施策の展開を図っていく上で、道路なくして住民の生活は守れないのだろうと常々感じています。三遠南信地域連携ビジョンの中に愛知・長野県境域開発協議会の取り組みを加えていただき、さらに三遠南信サミットでも、非常に大きな効果がある道路を中心に議論をするべきではないかと、私は常々感じているわけです。この三遠南信地域における地域基盤のネットワークの成果や情報について、愛知・長野県境域開発協議会の中でも、密に連携をとりながら前へ進めていきたいと思っています。

コーディネーター

県境の山間地域で、道路がまさに命の源だと御発言をいただきました。通学や買い物が、道路が開通することによっていかに便利になったかという具体例を伺いました。また、医療、福祉面でも、

県境を越えた人の行き来が非常に広まってきたということで、この三遠南信地域連携ビジョンは道路を中心に考えるべきだと具体的な御指摘をいただきました。

それでは、パネリストの最後に、地域づくりサポートネットの山内代表理事からお話をいただきます。



地域づくりサポートネット 山内代表理事

私は、本年度、三遠南信住民ネットワーク協議会という組織の代表世話人を務めさせていただいており、住民団体の代表として、本日午前中に行った、住民団体が集まり意見交換を行う住民セッションでのお話をさせていただきます。今年のテーマである新ビジョンの策定に際し、特に中山間地域について考えると、中山間地域に暮らす人だけではなく、その地域から出ていった出身者、親戚縁者、さらには今、盛んに来ている学生や若者、あるいは地域おこし協力隊、支援団体や地縁団体、そういった新しい風や波をいかにこの地域に定着させるか、あるいはその仕組みをどうやって構築していくのか、情報発信をどのように行っていくのが難しい問題であり、それぞれの地域

の住民だけでは解決できないので、三遠南信地域の全体的な取り組みの中でやっていきたいと話が出ておりました。

それでは、私からの提案をさせていただきます。三遠南信地域は、現行ビジョンが策定されてからの10年、あるいは、これまでの25回のサミットでは、どうしても地域内での議論をしておりました。先ほど愛知大学の戸田先生から、東西を結ぶスーパーメガリージョンのお話がありましたが、南北の連携も考えてもいいのではないかと考えています。日本海と太平洋を結ぶと、三遠南信地域の塩の道がその一部にあたります。そこに自転車旅、サイクルツーリズムの視点を入れてみたらどうかというのが一つ目の提案です。具体的には、太平洋と日本海の350キロメートルを結ぶ、超ロングルートの構築です。起伏の富んだところですが、自然と歴史、日本の原風景が非常に満ちあふれたところを堪能できる日本を代表するルートになる可能性があります。

北海道や東北など、全国各地で300キロメートル超えのロングルートが続々とできており、海外からたくさんの観光客を引き込むための活動も増えております。サイクリストの聖地といわれ、サイクリングで有名なしまなみ海道は全長約70キロメートルです。最近では、四国お遍路の道をつないだり、中国横断道の整備に合わせて宍道湖のある日本海へサイクリングルートをつないだり、広域的な動きが出ております。これをこの地域で考えてみますと、

三遠南信自動車道の整備効果の向上策として、自転車为核心とする連携が考えられるのではないのでしょうか。三遠南信地域内だけではなく、中部横断自動車道も南北に伸びて、高規格道路ができた後の時間短縮効果で、各地の塩の道を訪ね歩くサイクルツーリズムによる人の呼び込み、さらには海外からのインバウンドにもつなげられます。

本年5月に自転車活用推進法が施行され、官民合わせて自転車の活用に向け、積極的に取り組んでいます。静岡県は2020年の東京オリンピック・パラリンピックの自転車競技の開催地でもあり、静岡県知事がサイクリストの聖地を目指すとのことでサイクルツーリズムに取り組んでおります。こういった状況で、太平洋と日本海を結ぶ南北のサイクリングルートを設定できないかと考えています。

イタリアでは、最近、自転車の活用が過疎地域の対策としても効果があるという話がありました。さらに、長野県では、信州サイクルクロスという日本海から太平洋へつながる構想が提唱されている状況からすれば、日本海と太平洋をサイクリングルートで結ぶ構想を民間、あるいは官民連携の中で進めていくことは、あながち不可能な話ではないと思います。

また、南北に走る鉄道、例えば JR 飯田線や天竜浜名湖鉄道天竜浜名湖線も有効活用し、さらにリニア中央新幹線が開通すると、飯田が一つのハブ機能を果たし、当然自転車でも、輸行が盛んになってきます。大汗をかいて全部走るのではなく、自転車と鉄道を組

み合わせて楽しみながら走るサイクルツーリズムがこれから日本でも普及することが見込まれています。

さらに、遠州地域、東三河地域はものづくりの盛んな地域です。最近、電動アシスト自転車の1回のフル充電による走行距離が100キロメートルを超えました。性能のいい自転車、デザイン性が優れた自転車がどんどん増えてきています。電動アシスト自転車で走れるとなれば、比較的高齢の方も坂道を平気で走ることができ、走行距離も長くなります。そうすれば、のんびりとしたサイクルツーリズムが楽しめるし、鉄道を織り交ぜることで異なる風景を楽しむことができると思います。

これまでも自転車による交流は行われていました。遠州ではロード・オブ・ザ・ソルトという活動や、県の事業で実際に走りながらつくった塩の道サイクリングロードマップや、浜松市にある自転車店では、本年で33回目を迎えた新潟県糸魚川市まで行く「サバイバルサイクリング」というイベントを毎年やっている実績もあります。本日の住民セッションでは、そういった活動をサイクリングが盛んな渥美半島の伊良湖までつなげてほしいとの話もありました。そうすれば、三遠南信地域が非常に楽しい圏域になり、さらに道や鉄道を活用しながら取り組んでいくと、交流人口の拡大策の一つとなり得るのかなと思います。国や長野県へも働きかけて、諏訪湖との交流など、少しずつですが、実際にやり始めています。

コーディネーター

三遠南信地域のトライアングルの外縁をどう延ばしていくか、また延ばしていくことによって、三遠南信地域への人の流れをどう引き込むかというお話をいただきました。先ほど、この会が始まる前に山内代表理事もサイクリストのお一人だということを伺い、非常に説得力のある御提案だと改めて感じました。

この地域は、山あり、谷あり、温泉もあり、美味しい食べ物もあり、地域の人々の生活に触れることもできて非常に魅力的ですし、また、鉄道や電動アシスト自転車を利用すれば、比較的年齢の高い人たちも、サイクルツーリズムを楽しむことができるという、夢の広がるお話をいただきました。

それでは、最後に、皆さんの御意見を踏まえて、SENA 会長の立場で、浜松市の鈴木市長にコメントをお願いしたいと思います。

SENA 会長 浜松市 鈴木市長

皆さんからいろいろな御意見をいただきました。共通しているのは、県の境目は意味がないのではないかという点だと思います。明治22年、市制町村制ができた当時の市町村数は1万6,000弱に対し、現在は大体1,700強ですから、およそ10分の1になっています。

一方で、府県は、統合と分離を繰り返し、明治21年に香川県が徳島県から分離独立をして47になって以後130年以上、変わっていません。また、戦前は、官選知事が国から派遣されていました。つまり、府県があることが、い

かに中央集権的な統治に非常に便利だったかということなのです。ただ、現在は、そういうものが意味をなさなくなってきた時代だと思います。行政境を越えた取り組みを、より一層具体化させて推進していくことが必要だろうと改めて思いました。新ビジョンの中では、そうしたことを盛り込みながら、実体のある連携を推進していきたいと思っています。

この後の分科会でも、皆さんから様々な御意見を頂戴できると思いますので、そうした御意見を参考にしながら、有意義な新ビジョンを策定していきたいと思っております。

コーディネーター

それでは最後に私からごく簡単に、まとめにかえてコメントを申し上げます。

阿南町の勝野町長のお話からも、また、浜松商工会議所の大須賀会頭のお話からも、道路の開通が、経済、観光に対する大きなインパクトを持つことが強調され、この地域は何と言っても道路が革新的な重要性を持つことは、皆さん御了解いただけるかと思います。

一方で、最後の山内さんのお話からは、道路ができて、高速で広域に動く時代に下道をどう考えるかという、新しい視点をいただきました。そこにゆっくりと人が動くことで、よそから来た人と人がつながっていくことができます。

また、戸田教授がおっしゃったように、この地域の大学にやってきた三遠

南信地域外の出身者、あるいは三遠南信地域に残って大学に進学した人たちが、地域の企業と顔の見える関係になり、この地域のよさを再発見して、この地域で生きていくために、人と人とのつながりをもっと具体化していくことも必要ではないかと思いました。

鈴木市長からは、この地域の歴史的な結びつきは明治の時期に分断されたけれども、21世紀の新たなビジョンの中で、昔からあったその結びつきを深めていこうと決意表明をいただきました。

大変短い時間でしたが、5名のパネリストの方から、それぞれの観点からの貴重な御意見を賜うことができました。皆さん、どうもありがとうございました。

4 「道」分科会 「新ビジョンの基本方針～プロジェクト」

出席者一覧

(敬称略)

役割	所属団体	役職名	氏名
コーディネーター	浜松市	市長	鈴木 康友
発言者	浜松市議会	議長	渥美 誠
発言者	豊橋市議会	議長	坂柳 泰光
発言者	飯田市議会	議長	清水 勇
発言者	田原市	市長	山下 政良
発言者	阿南町	町長	勝野 一成
発言者	豊橋商工会議所	会頭	神野 吾郎
発言者	天竜商工会	会長	大村 邦男
発言者	湖西市商工会	会長	佐原 正晃
発言者	飯田商工会議所	会頭	柴田 忠昭
発言者	駒ヶ根商工会議所	会頭	山浦 速夫
発言者	NPO 法人 地域づくりサポートネット	代表理事	山内 秀彦
発言者	愛知大学 三遠南信地域連携研究センター	センター長	戸田 敏行



コーディネーター

浜松市 鈴木市長

今年のサミットは先ほどからお話がありますように、第2次三遠南信地域連携ビジョンの策定に向けた議論がテーマとなっております。

したがいまして、本日は、まずは新ビジョンの「道」分野の基本方針・推進方針（案）について事務局から説明をした後、意見交換を行ってまいります。

それではまず、事務局から説明をお願いします。

事務局

全体会のパネルディスカッションでは、新ビジョン全体の策定状況について SENA 事務局から報告がありました。この分科会では、新ビジョンの基本方針「道」の案について御説明いたします。お手元の資料集13ページを御覧ください。

現行ビジョン策定時から、三遠南信自動

車道の一部開通やリニア中央新幹線の長野県駅設置が決まるなど、交通基盤の整備が進んでいます。これを踏まえ、新ビジョンの「道」の基本方針は「中部圏の中核的都市圏となる地域基盤の形成」とし、圏域内外の人・もの・情報の交流を一層進めることで、中部圏の中核的都市圏となる地域基盤の形成を目指します。この基本方針を推進するため、推進方針1「人との交流促進」と、推進方針2「情報の交流促進」を置きました。

推進方針1「人との交流促進」では、さらに主要施策①「地域基盤となる広域ネットワークの整備」、主要施策②「広域ネットワークの効率的な利用促進」を置き、地域内の基盤整備を図りつつ、整備が進む広域ネットワークの利用による圏域内外の人との交流促進を図ります。推進方針2「情報の交流促進」では、主要施策①「県境を越える情報共有化の推進」、主要施策②「情報通信技術の高度化に伴う情報基盤の整備」を置き、地域を越えた情報の交流促進を図ります。

分科会では、この「道」分野の基本方針・推進方針（案）について、各分野で御活躍されている方の視点から忌憚のない御意見を、できるだけ多く賜りたいと存じます。

なお、新ビジョンの基本方針や推進方針、主要施策は皆様の御意見も踏まえ、今後も検討を進めてまいります。本日の分科会での議論をもって決定するものではございませんので、あらかじめ御承知おきください。

また、新ビジョンの策定は、SENA 構成員や策定委員会の委員、オブザーバーに御意見をいただきながら策定を進めております。資料集とは別に御用意した A3の資料は、これら皆様からいただいた御意見についてまとめたものですので、議論の参考にしてください。

コーディネーター

それでは、意見交換に移ります。

まずは、今、説明のありました推進方針1と2について、皆様から御意見をお伺いしまして、最後に「道」全体についての御意見を伺う形で進めてまいりたいと思います。

順に御指名していきたいと思いますが、まずは勝野町長から、推進方針1について御発言をお願いします。

阿南町 勝野町長

主要施策①はまさにいいポイントだと私は思っております。我々の町を縦貫している数少ない国道幹線は生命線として、それが不通となりますと命取りになります。国道151号、国道152号、国道153号は飯田市方面へも恵那市方面へも続いております。そして三遠南信自動車道も、非常に大きな効果が出ております。関連して、浜松三ヶ日・豊橋道路についてですが、阿南町と豊橋市は非常に昔から縁が深く、これがなくてはものを考えられない状況であります。そういった意味から、非常にいいポイントで考えていただいていると思います。想定される事業をまとめて進めていただければ思っております。

コーディネーター

続いて、飯田市議会の清水議長からお願いいたします。

飯田市議会 清水議長

私ども飯田市議会は、本年6月に常任委員会である総務委員会で、岩手県遠野市を視察させていただきました。この遠野市は、御存じの皆様もおられると思いますが、津波による甚大な被害を受けた釜石市方面をはじめ、岩手県沿岸の自治体への後方支援の拠点として活動していた内陸部の都市であります。その際、課題になったのは道路

でございます。震災当時、釜石自動車道は、東北自動車道と接続する花巻ジャンクションから遠野市までの区間が開通していたため、遠野市までは支援物資を集められましたが、そこから沿岸部の自治体への物資搬送に長時間を要しました。3月の震災後、私の関連している会派の活動のため、その年の7月と1年後に遠野市から釜石市までの道を通りましたが、片側1車線の狭い道路でした。現在、その道路を復興支援道路と位置づけ、遠野市から釜石市に向けて急ピッチで工事が進められておりまして、2018年度に釜石自動車道が全線開通の見通しとなっている状況であります。

この事例を三遠南信地域に当てはめたときに、まさに三遠南信自動車道が、その役割を担うという思いがいたしました。今後予想される南海トラフ地震により、太平洋沿岸の自治体が被害を受けた際、また、内陸部の自治体が昨今の大規模豪雨による風水害で被災した際、太平洋沿岸部と内陸部を結ぶ命の道、また支援の道となると思っています。三遠南信自動車道は非常時にも機能するインフラとして、この地域にとって重要であることを改めて認識する必要があると思っています。

災害は無いに越したことはありませんが、有事の際の自治体間の水平連携のために、顔の見える日常的な三遠南信地域の交流とともに、推進方針1として挙げた「人・ものの交流促進」のために、非常時を意識した交流機会を設定していくことも重要なことだと思っています。

コーディネーター

引き続き、田原の山下市長から御意見を申し上げます。

田原市 山下市長

道が大変大切なものという当たり前のことなのですが、私の思いを含めて発言をさせていただきたいと思います。工業製品、農産物の物流、観光など、人・ものの移動には道路、鉄道、港湾、空港など交通ネットワークの充実が必要不可欠なものでございます。その上で圏域の将来を見据えますと、三遠南信自動車道や JR 飯田線に代表される南北軸と東名高速道路、新東名高速道路、JR 東海道新幹線、リニア中央新幹線などからなる東西軸を有効に活用し、また物流量、移動量にあわせ発展的に圏域軸を多角化して考える必要があると思います。特に東西軸は、東京や名古屋、大阪をつなぐ軸上にありまして、交通量、物流量も多く、この圏域にとっても、国土全体にとっても大変重要な役割を担っていると考えております。

現在、整備が進んでおります国道23号バイパス、豊橋・浜松環状道路や中央自動車道についても、交通量、それから物流量にに応じてしっかり充実していくことによって、この地域に人・もの・金を落とす効果が期待できると思っています。

また、南北軸については、三遠南信自動車道の早期開通を目指すことは当然ですが、国道151号と国道152号を充実させることで圏域の産業、観光、生活を一層充実させていくとともに、東西軸を一層有効に活かしていくものだと考えております。

最後に、この圏域のさらなる発展を考えれば、南北軸の南端を渥美半島で終点とするべきではなく、紀伊半島、四国、九州へとつなげることを考える必要もあります。昔から、伊勢神宮への参拝ルートといたしましては、高度成長期においては鳥羽・伊良湖間はフェリーを初めとして水中翼船などもございまして、多様な海の道が存在し、観光客などに親しまれておりました。現在

の東西軸による関西方面へのアクセスだけでなく、紀伊半島から四国方面へのアクセスは国土全体から見ても必要なことであり、三遠伊勢連絡道といった夢のある構想について、考慮すべきであると考えております。つけ加えるならば、中部経済連合会の中部圏交通ネットワークビジョンでも、提案が挙がっております知多半島と渥美半島を結ぶ三河湾口道路についても、財界がイメージする中部圏の未来予想図としては大変興味深いものであり、私も応援をしてまいりたいと思っております。

コーディネーター

続いて、湖西市商工会の佐原会長、お願いいたします。

湖西市商工会 佐原会長

私は、この三遠南信サミットが果たす事業に20年参加させていただいているわけですが、以前から浜松三ヶ日・豊橋道路に「湖西」の名称がなくてもいいのかと思っており、毎年のように分科会の場で「湖西」を入れるように言ってきました。この前、予算化のときには「湖西」の名前が入ってくるのではないかと聞きました。湖西を評価してくれる方によると、世界トップのバッテリーメーカーのEV エナジーは立派な会社で、立ち上げ時には500億円ぐらいの売り上げだったのが、現在は5,000億円ぐらいの売り上げがあるそうです。湖西市全体で1兆7,000億円なので、EV エナジーの存在を尊重し、「湖西」の名称をどこかで使ってもらえると、湖西の皆さんはやる気になると思います。

コーディネーター

ただいま4人の皆様から、御意見をいただきました。

それでは、推進方針1「人とのものの交流

促進」については、一区切りとさせていただきたいと思います。

これまでの御意見につきまして、それでは愛知大学の戸田教授に一言コメントをお願いいたします。

愛知大学三遠南信地域連携研究センター 戸田センター長

三遠南信自動車道が、三遠南信地域ビジョンの一番の原点として始まりました。そういう意味で、それをどう伸ばしていくのかということが非常にポイントだと改めて感じました。

そして、その延長としての伊勢湾口道路の話、これがやや曖昧なまま残っていると感じます。これは、もともと国土軸であり、伊勢湾環状という捉え方もされておりましたので、この地域の構造としての整理が、もう一度必要かなと感じました。

地域内では三遠南信自動車道と国道151号の関係をどうするのかについてですが、ダブルリンクと捉えられております。大きなリンクと、小さなリンク、その捉え方が必要だと改めて感じました。

それから浜松三ヶ日・豊橋道路ですが、「湖西」の名前はもう入らないでしょうか。名前としては浜松三ヶ日・豊橋道路ですが、湖西には産業的背景があるという御意見がございました。

また、三遠南信自動車道は南北をつなぎますので、飯田市議会の清水議長からは防災の道として道路をどう捉えるか、という重要な御指摘を得たと思います。



コーディネーター

それでは、次に推進方針2に移りたいと思います。推進方針2「情報の交流促進」について、御意見を頂戴したいと思います。このテーマにつきましては、4人の方から御意見をいただきます。

まずは、浜松市議会の渥美議長からお願いいたします。

浜松市議会 渥美議長

先ほど、全体会で静岡県吉田副知事が天竜区出身だと言われました。実は、私も天竜区に住んでいます。

以前、特に浜松市天竜区あたりは主要な幹線道路以外は天竜川を利用した水運が盛んでして、水運の終点から目的地に向かうため、塩の道ができた経緯があるのではないかと思います。交通手段としての道路があるわけですが、情報面からみますと、交通網に似た情報ネットワークがあると思っています。情報ネットワークを活用し、域内・域外で交流を促進し、また、情報を共有することによって、観光や産業、福祉、教育など様々な分野がつながり、ひいては地域の発展につながっていきます。したがって、情報基盤を整備する必要があるのではないかと思います。県内においても光ファイバーが未整備の区域が2、3%あり、その大半が天竜区です。浜松市中心部から光ファイバーをつなげるとなると距離があるため、三遠南信自動車道の開通によって飯

田市方面からつなげていただければ、これも一つの効果だと思っています。

また、三遠南信地域の域外への発信のためにも、情報通信基盤整備を一層促進していくことが必要ではないかと思います。

交流の促進や情報の共有によって、人やものの流れが生まれると思います。道やリニア中央新幹線、JR 飯田線も大いに活用するとともに、情報基盤整備を促進することが非常に必要ではないかと思います。

コーディネーター

続いて、駒ヶ根商工会議所の山浦会頭、お願いいたします。

駒ヶ根商工会議所 山浦会頭

かつては JR 飯田線を使って多くの南信の人たちが三遠地域に働きに出ており、心理的にも大変近い存在でありました。古くは秋葉街道、三州街道を使って文化の交流点として栄えた地域でもございます。現在は、南信地域の住民にとって三遠地域は近くて遠い存在となっております。三遠南信自動車道の開通により、再び南信から多くの住民が三遠地域に向かうことになると思います。開通と同時にスタートダッシュができるように、今から圏域全体で情報の共有を進めていく必要があります。特に南信地域としては、三遠地域における産業・観光に期待をしており、これらの情報をいただきながら、三遠地域へは圏域外の人々にはわからない詳細な地域の観光情報等を提供することが大切です。長野県では、山岳観光圏を目指しており、我が駒ヶ根市も山岳観光都市をキャッチフレーズに取り組んでいるところです。

また、東海沖地震や南海トラフ地震などの大規模災害の際、各地域がどのような役割分担をするのか明確にし、その情報を圏域内で共有する必要があると思います。

コーディネーター

続いて、天竜商工会の大村会長、お願いします。

天竜商工会 大村会長

三遠南信自動車道は国道473号など一部現道を活用することになっており、開通に向けてあと一息、道路整備の一層の推進をお願いしたいと思います。

また、浜北区と天竜区の境、浜松浜北インターチェンジの間近に浜北滑空場という国の認定を受けた飛行場があり、グライダーや軽飛行機が離発着できます。空港や港湾なども含め広い面で見たときに、そこも三遠南信地域として使えるのではないかと思います。

コーディネーター

続いて、先ほどもパネリストとして御登壇いただきましたNP0 法人地域づくりサポートネットの山内代表理事からお願いをいたします。

NP0 法人地域づくりサポートネット 山内代表理事

道の駅についてお話をさせていただきたいと思います。

私ども NP0 法人地域づくりサポートネットは、中部ブロックの道の駅連絡会の事務局もやっているものですから、そのお話をさせていただきます。道の駅に期待されている機能として、情報発信とその拠点という機能があります。新しく整備されました道の駅「もつくる新城」は、奥三河の情報を広域的に発信しています。また、ハブ機能を有するため、国土交通省が ETC を使った実証実験に取り組んでいます。すぐ近くの国道257号沿いに位置する道の駅「鳳来三河三石」は、愛知県で2番目に指定されたのですが、老朽化が進んでおり、新東名

高速道路、さらには三遠南信自動車道の開通により立ち寄り客が3割ぐらい減っており、今、直虎の関係で一生懸命、ゆかりの地として頑張っていますが、来年以降どうしようかと頭を抱えています。ある程度稼がないとリニューアルもなかなか進みません。その先の国道151号沿いにある道の駅「豊根グリーンポート宮嶋」は、リニューアルして利用客も増えており、このように道の駅でも格差があることがわかります。老朽化が目立っている道の駅が多く、浜松市内の道の駅なども、そういった悲鳴も聞こえてはいるのですが、今後、三遠南信自動車道が整備されていくと、その沿線の道の駅の立ち寄り客数は減ってくるということが今までの例でございます。鳥取自動車道でも、無料の高速道路の開通により、利用客数が3割減少しました。

そういったところを盛り立てていくためには一つの道の駅では難しい。では、連携体制の整備を道の駅が買って出るかということ、それぞれの道の駅の運営で手いっぱい状況です。どこかそれをつなげてくれるところがあるならば、協力したい道の駅は非常に多いです。木曽路や美濃、伊豆では道の駅のネットワークが形成されています。県境を越えたところをどうやって、誰がつなげるのか、コストをどうやって負担するのか、道の駅の連携を支えるということについて、重点プロジェクトに位置付けてほしいと思います。

コーディネーター

4人の皆様から、御意見をいただきました。

推進方針2「情報の交流促進」につきましては、一旦ここで区切りとさせていただきます。

それでは、また愛知大学の戸田教授に一言コメントをお願いいたします。

愛知大学三遠南信地域連携研究センター 戸田センター長

二、三点気になりました。防災について何回か御指摘がありましたが、災害のとき、どの道がどう活きるのかということを三遠南信自動車道のみならず、アプローチ道路も含めて全域できちんと決めていくことが必要ではないかと思います。SENA でも、そういう調査がなされています。緊急時に道路をどうつないだらよいのか、一本一本つないでいくということをやっています。こうした情報は、各自治体は持っているが、一步自治体を出ると全然わからない。そういう意味では、SENA の役割は随分大きいと改めて思いました。

それから、道路と鉄道、あるいは自転車があります。当然、ここにはバスも入ってきますし、それから過疎地であればタクシーも入ってきます。一個一個ばらばらになっていると、それをつなぐ人、また、その人を支えるセクションが必要になります。

それから、道の駅は随分歴史があって、道の駅自体、日本から海外に出て行っているプロジェクトです。地域の資源を道路という動きに乗せる大きな可能性を持つプロジェクトですが、かなり数もできてきた状況で、競合になっているところもあります。そこで一つは、道の駅全体のストーリーが要るのだろーと思います。私も調査してみましたが、道の駅にやって来るお客さんは、その道の駅のオリジナル商品が欲しいのであって、どこにでもあるものを欲してはいません。でもオリジナルのもの一つの道の駅では、なかなかマーケットは成り立たない。ですから、これを組み合わせて、特性をその中で作り出していくのがよいでしょう。それから、「もっくる新城」の調査事例ですが、道の駅にやって来る人は、必ずしも地域情報を得ようと思って来ているわけではありません。買い物やトイレに寄

ったついでに情報センターで地域情報を得ています。地域情報を得ると、次の行動につながります。道の駅が「つなぐ」という公共的な役割を持っていくと、様々なネットワークができるのではないのでしょうか。新ビジョンのプロジェクトの一つとして道の駅とサービスエリア・パーキングエリアをつないでみるのはどうでしょう。高速道路自体も、オープンになっていくなかで、サービスエリア・パーキングエリアで売る商品も地域のもを売る、サービスエリア・パーキングエリアを目的にして人が来ることになる。これもつなぐという意味合いと観光としての商品性があるのではないかと感じました。

コーディネーター

最後に、基本方針全体について4名の方に御意見をいただきます。

まず初めに豊橋商工会議所の神野会頭、お願いします。

豊橋商工会議所 神野会頭

皆さん、いろいろお話をされておりますので全体としての話ですが、25年前にスタートしたこの三遠南信サミットも、25年たちますといろいろ変わってきます。一つ大きく変わっているのは、日本においては成熟化が進んでいるということ、情報技術がすごく変わってきているということです。それからグローバルというものが、多分25年前は北米や欧州が先進地で、アジアは生産拠点ぐらいの話だったと思います。しかしながら、今は中国をはじめアジアの方が下手をしたら進んでいるかもしれないように、所得なども全体として変わりました。こういった中で、新ビジョンを考えると、かなり戦略的に、今までの延長ではなく、今あるいいものを最大に生かし、未来を戦略的に、ビジョンからさらにグラ

ンドデザインぐらいのことにしないと、なかなか追いつかないのではないかと思います。

それから、つながるということに加えてもう一つ大事なものは、ずっとお話に出ていました、集積です。たまにつながるだけでは、本当に仲よくはなれません。あるときは集積が必要で、人がつながることと、ものが動くこと、それから情報が動くこと、それらを共有することが人の営みとしては一番大事だと思います。

戦略的で、またつながるということから言うと、今の高規格道路から主要幹線道路、それから城内道路の戦略的な細かなつなぎ、それから戸田さんがおっしゃったような、バスを走らせるということ、それから自転車などのつなぎを全体のグラウンドデザインにしていくことが必要かなと思います。

もう一つの最大の問題は推進方針2に出ていますが、情報メディアの点で、本日より議論が出ていないのですが、愛知県、静岡県、長野県のマスメディアがみんなばらばらだということです。もし可能性があるとするなら、中日新聞東海本社に東三河と遠州と南信州を管轄にしてもらい、浜松市の都田にある工場から地域内全てに配達ができればと思います。これは戦略的に中日新聞はやっていたかと思いますが、飯田の方に聞くと、長野県内では信濃毎日新聞が一番だけれども、飯田下伊那地域では中日新聞も有力だということらしいです。プロ野球でも、浜松と同様に、どちらかというと中日ドラゴンズのファンが多いということです。東三河では、名古屋の記事を見ているより、浜松の記事を見ているほうが楽しいかもしれません。

あとは、ラジオやケーブルテレビなどのローカルなメディアをどのようにつなぐかということだと思うのですが、それがだんだん生活圏などいろいろなことにつながっ

ていくのではないかと思います。

コーディネーター

続いて、飯田商工会議所の柴田会頭、お願いいたします。

飯田商工会議所 柴田会頭

三遠南信自動車道の全線早期開通が、いかに三遠南信サミットの成果を上げるために大切かということの結論に向けて意見発表をさせていただきます。

南信州地域は、三遠南信自動車道とリニア中央新幹線の二大交通プロジェクトが、今同時に進められています。リニア中央新幹線は10年後の2027年に開通しますが、それを見据えまして三遠南信自動車道の整備はもとより、リニア中央新幹線の長野県駅に接続する国道153号、中央自動車道の座光寺パーキングエリアに設置予定のスマートインターチェンジ、さらには中央自動車道とリニア中央新幹線の長野県駅を結ぶ座光寺上郷道路といったリニア中央新幹線に関連する道路の整備計画が着々と進められています。

また、中山間地域の重要な移動手段である JR 飯田線も、リニア中央新幹線の長野県駅へのアクセス機能や広域観光資源として期待されておりまして、その利用促進についても積極的な取り組みを進めているところです。当地域は、スーパーメガリージョンの形成におきまして、国のナレッジ・リンク構想の一翼を担い、産業振興の機能集約を目指す「知の拠点」構想も動き始めております。産・学・官・金の連携による人材育成や研究開発も進められておりまして、人材の確保・定着が図られ、航空宇宙産業を初め、健康、医療、食品などの次世代を見据えた産業の創出が期待されています。

先ほどから、お話が出ておりますが、リ

ニア中央新幹線は「人と情報」を運び、三遠南信自動車道は「もの」を運ぶ動脈となります。その相乗効果は、計り知れないものがあると思っております。このような大交流時代に向け、地域の特徴や強みを生かした産業づくりとともに、地域の産業競争力を高める戦略的な企業誘致や地域連携による産業振興も必要であると考えております。しかし、先ほどのパネルディスカッションでも出ておりましたが、深刻な人材不足に加えて経営者の高齢化、後継者不足などにより、これまで地域経済を支えてきた中小企業が事業の継続、承継などが難しい現実に直面をしております。このような中で、活力あふれる地域経済の発展のために地域内の連携強化、それから地域外からの企業、人材、技術等の導入が必要であり、地方創生を後押しする安全・安心で住みよい環境を整えるためにも、これらを支える地域基盤である道路、鉄道、情報通信等の整備が国土強靱化、アセットマネジメントの観点からも必要であると思っております。

結論ですが、そのためにも悲願である三遠南信自動車道の早期全線開通は、中央自動車道と東名高速道路、新東名高速道路、また、リニア中央新幹線と JR 東海道新幹線を結ぶ切れ目のない広域交通ネットワークを形成する重要な南北軸として、大きな役割を担うものと思っております。加えて、生活道路としても利便性の高い交通インフラであるため、地域基盤となります広域ネットワークの整備は必要であると考えています。

先ほど神野会頭の話についてですが、長野県の新聞は、第一が信濃毎日新聞で、南信州地域は中日新聞の販売部数が多い状況があります。

コーディネーター

続いて、豊橋市議会の坂柳議長から御意

見を頂戴したいと思います。

豊橋市議会 坂柳議長

東三河地域を代表いたしまして、議会の立場で、基本方針全体について意見を述べさせていただきますと思います。

先ほどからお話がありましたように、10年後、資料集13ページのとおりのものでできれば、三遠南信地域はすばらしい発展を遂げていくのではないかなと思っております。そんな中、東三河でいけば豊橋市と豊川市、蒲郡市、そして田原市の4市が関連した23年連続自動車輸入額が国内ナンバーワンの三河港がございます。重要港湾以上の港は三河港含め125か所あるわけですが、27年度の港湾別貿易額を見ると、1位から名古屋港、東京港、横浜港、神戸港、大阪港、千葉港と続き、7位に三河港がランクインしています。大変ポテンシャルの高い港でございますが、港から高速インターチェンジのアクセス道路が脆弱で、豊川インターチェンジまではおよそ19キロメートルあります。ほかのところを見ると、1キロメートルから3キロメートルぐらいが平均かと思っておりますので、港が有する自動車産業の高いポテンシャルをまだ活かしきれていないと思っております。

あと、東三河地域の奥三河地域は医師が不足している状況であり、重篤患者は豊橋市、豊川市、また浜松市などにある高次医療施設に搬送されております。そのため、救急搬送のための道路が必要ではないかなと思っております。

あと観光面におきましても、新東名高速道路が開通し、東三河地域には長篠設楽原パーキングエリアができて、特に新城圏域が大変活発に、人ともものが動いていると思っております。情報の交流促進について、地域づくりサポートネットの山内さんの話にありましたように、道の駅をしっか

り活かすこと、そして戸田さんのお話にありましたように、パーキングエリア、サービスエリアが三遠南信地域情報を発信する交流拠点になることが大事です。また、今、豊橋エリアの国道23号においても道の駅の構想がございますが、防災機能も備え、道の駅の充実を図っていけばいいのではないかと考えております。

リニア中央新幹線が今から10年後には名古屋まで開通する見込みで、道も、そして鉄道においても東西はしっかりしますが、飯田から遠州、そして東三河を結ぶ南北の、JR 飯田線を含む鉄道、道路が必要ではないかと思えます。

以上のことから、産業の振興を支える力の道、人々の安全・安心を支える命の道、そして地域の交流を支えるきずなの道として三遠南信自動車道と浜松三ヶ日・豊橋道路の早期実現、そしてそれに付随する様々な縦貫道や環状道路が整備されることが重要であると考えております。

コーディネーター

それでは最後に、戸田先生よろしくお願ひします。

愛知大学三遠南信地域連携研究センター 戸田センター長

先ほど山内さんからサイクリングのことで大変魅力的な提案をいただきましたが、私から軽トラ市のことを少し申し上げたいと思います。

今回のビジョンの中でも、この軽トラ市のネットワーク化が言われております。全国で開催される軽トラ市の数ですが、150ぐらいになり、特にこのエリアは集積が大きいです。商店街の衰退や買い物弱者の増加などに対し、移動する商店街として、軽トラ市がまちづくりの一端を担う可能性があるのではないかと考えております。

車体利用の状況についてです。一般的な商店的なものもありますし、それから農産品を売るものもあり、そういう意味では道の駅と非常によく似ています。それからデザイン志向の軽トラ、あるいは最近サービス型のエステやネイルなどを行うものなど、様々な形のものが稼働的なまちとして登場しています。

次に、一回当たりの来外者と年間回数を示しています。これを見ていただくといろいろなタイプがあります。このエリアでは、新城市が全国三大軽トラ市として老舗なのですが、一回大体2,000人ぐらいの方が来られて人が集まります。昨日磐田で行われた軽トラ市は全国の大会でもあり3万人が集まりました。通常は1万人ですから、通常なかなか考えられない人数が集まり、閉まっている店がそのときは開店するという効果もあります。もっと小規模なものもあり、小規模多頻度型は人口の少ないエリアには向いていると思います。全体として、まち自体が動いて出ていくというものです。

市外からの来場者と出店者の比率ですが、市外から出店されるという点が非常におもしろいところで、これはほかのまちの軽トラの人たちが集まってきて、いろいろな集まりができるということです。これを調査してみると、大体移動時間が60分ぐらい以内の範囲で出店者が集まる傾向です。新城で開かれている軽トラ市には浜松からの出店者がたくさん来られていて、多分最大売り上げを上げているのはウナギ屋さんだと思いますが、複数店が来ています。

全国軽トラ市の地域創生宣言がつくられています。「全国軽トラ市でまちづくり団体連絡協議会」が設立されており、略して軽団連と言いますが、全国組織として地域創生を主張していくことが重要ではないかということです。この軽トラ市相互が連絡できるのは、その集積が非常に大きいこの

三遠南信地域ではないかと思います。問題になるのは、宣言の三点目にある道路使用で、なかなか使わせてくれないという課題があります。問題解決のためには、全国組織や県境を越えて活動していくことが重要ではないかと思います。

全国軽トラ市には、スズキ株式会社の鈴木修会長が必ずお越しになります。スズキは東京モーターショーにも軽トラ市向けの軽トラを出展しています。このエリアの軽トラ市とはただ商品を守る市だけではなくて、自動車の開発と一緒にあって、その技術も盛り込むことができるわけです。

これは新城の調査結果ですが、軽トラ市だけやっている出店者は25%で、あとの75%は、他のイベントに行ったり、個別の移動販売をしたり、いろいろなことをやっています。見方を変えれば、移動販売が集まる場が軽トラ市です。また、軽トラ市と道の駅も連携していますし、サービスエリア・パーキングエリアに軽トラ市を出すこともやっています。これがずっとつながっていくと、非常に稼働的だと思います。人口は減少していきますから、何かを大きくつくることは難しくても、動かして対応できることは結構あることだと思います。

また、この軽トラは防災機能があって、何かあって地域がダメージを受けたとき一緒にあって動いて、まちをつくることもできると思います。今回のビジョンの中で、軽トラ市がプロジェクトになっていくと大変おもしろいと感じています。

コーディネーター

以上で、4人の方からの発表を終わらせていただきたいと思います。

まだお時間がありますので、御意見があれば伺いしたいと思います。

NPO 法人地域づくりサポートネット

山内代表理事

サイクリングの話をしていただきます。

自転車活用推進法が今年できたという話の中で、県と浜松市が協力しながら、浜名湖でブルーの矢羽根の路面表示を今年から始めます。豊橋市なども一部で、既にやり始めているところがあります。塩の道のサイクリングロードなども全てが道を広くできませんが、ドライバーに対する注意喚起にもなるし、走れるところをルート化し、一定間隔で標示していくことを考えられないでしょうか。あと浜名湖でやっているように受け入れ体制を整備してはどうでしょうか。何か困ったときの立ち寄り場所、バイシクルピットとして浜松、湖西では65カ所が登録されていますが、道の駅やその沿線の観光施設を登録するなど、そういうものを、三遠南信に広げていけたらと思っています。

コーディネーター

ほかに御意見のある方はいらっしゃいますか。

浜松市議会 渥美議長

スーパーメガリージョン構想という大きな構想の中で、この三遠南信地域の中核的な都市圏を目指すということで、縦軸もしっかりやりましょうという話があります。浜松市の製造品出荷額がリーマンショックのときに3兆円あったものが、3割減の2兆円になりました。今、三遠南信地域全体の製造品出荷額が14兆円でございますので、この高度情報通信網を使いながらいろいろな地域、自治体が遠隔的な操作も含め、そこにいなくても、あるいはそこでもしっかりやっていけるためには、先ほど申し上げました光ファイバー等の整備は必要です。また、道路整備のストック効果として、製

造品出荷額のような明確な数値目標を示していけると、ビジョンの目的が非常にわかりやすくなるのではないかと思います。新ビジョン策定委員会の中で御検討いただきたいと思います。

コーディネーター

豊橋商工会議所の神野会頭、どうぞ。

豊橋商工会議所 神野会頭

昔調べたことがあるのですが、アメリカのミネソタ州にはツイン・シティと言われている、ミネアポリスとセントポールという二つのまちがあります。ミネアポリスは比較的近代的な都市で、セントポールは古典的なビクトリア調の都市で、ちょうど浜松と豊橋ぐらいのエリアです。1960年以前は、お互いライバルで、お互い野球チームがあって死闘をしていました。静岡県でサッカーで言うと、清水と磐田のような感じでした。1960年ぐらいからツイン・シティにしようと、ミネアポリス・セントポール都市圏という構想をやり始め、その後、25年ぐらい前だと思いますが、モール・オブ・アメリカという世界最大の商業アミューズメント施設をつくりました。その地域は冬になるとマイナス20度ぐらいになるものですから、両都市から、そこに家族連れがみんな来て一日過ごす、志都呂にあるイオンモールのもっと巨大なものです。今は、大リーグもフットボールもバスケットもホッケーも全部、このツイン・シティで共有しています。

それから、もう一つ大事なことは、ニューヨークやカリフォルニアと違って治安が安定しており、最も生活圏として環境がよく、経済力もある地域圏であり、アメリカの中でも非常に人気があります。社会インフラがベースですが、地域の発展をスポーツや文化、生活などいろんなことをプログ

ラミングすることにより、1960年から50年たって今のようなツイン・シティになっています。

コーディネーター

田原市の山下市長、どうぞ。

田原市 山下市長

渥美半島全域が田原市でして、渥美半島を回ると約100キロメートルです。自転車で回するには一番よく、一部太平洋岸に自転車道がありますが、北側にはありません。先ほど話がありましたブルーの路面標示をし、渥美半島を周遊できる自転車道づくりを進めたいと考えています。今、13年目になる「ぐる輪サイクリング」というイベントを毎年やっております。サイクリングをやる方が多いので、これを三遠南信地域につなげ、自転車道を整備していきたいと思っています。

コーディネーター

湖西市商工会の佐原会長、どうぞ。

湖西市商工会 佐原会長

湖西市の位置は豊橋と浜松のちょうど真ん中にあります。人口は6万人の都市ですが、工業は豊橋の倍ぐらいの売り上げがあり、浜松にも追いつきそうな状況です。二十数年前に浜松三ヶ日・豊橋道路という名称になりましたが、三河港、清水港を利用する場合は、国道1号を使うわけで、工業実績のある湖西の名前がないのはどうかと思っています。工業の実績は素晴らしいものがあると、これだけは言わせていただきます。

豊橋商工会議所 神野会頭

浜松三ヶ日・豊橋道路は、私は今年も陳情に何回も行きましたが、湖西市は全部陳

情に参加しています。国土交通省では完全に認識をされていますので、最初の期成同盟会をつくるときに、出発点と到達点のことから湖西の名称が入らなかったのですが、もちろん湖西がほとんどの場所を通るわけで、それは市長もよく知っていますので大丈夫だと思います。

それから、先ほどのツイン・シティの話ですが、二つのまちと182の都市でやっています。二つの都市の話ではなく、そのほかに182の都市があって、それぞれの都市が、全体の中で役割を持っているのです。それがすごく大事で、全体としては380万人ぐらいのエリアです。

コーディネーター

私からも一点、論点を御提案させていただきます。これからの車はどうなると思いますか。燃料電池、ハイブリッド、電気といろいろありますが、どうやら電気自動車にシフトしつつあります。電気自動車が普及していくためには充電インフラが必要です。電気自動車のこれからの普及とあわせて、道の駅やサービスエリア・パーキングエリア、ロードサイドの集客施設に戦略的に充電インフラを設置していくことが非常に大事になってきます。三遠南信地域でも、電気自動車が安心して走ることができる充電インフラの整備をしていくことを、ほかの地域に先んじてやっていくことも必要ではないかと問題提起だけさせていただきたいと思います。

それでは、意見交換を終了したいと思います。

新ビジョンの策定に当たりましては、本日いただきました様々な御意見を参考にさせていただきまして、しっかり策定作業を進めてまいりたいと思います。

皆様の御協力で充実した意見交換ができたと思います。ありがとうございました。

以上をもちまして、道分科会を閉会いたします。

5 「技・人」分科会「新ビジョンの基本方針～プロジェクト」

出席者一覧

(敬称略)

役割	所属団体	役職名	氏名
コーディネーター	公立大学法人 静岡文化芸術大学	副学長	池上 重弘
発言者	豊川市	市長	山脇 実
発言者	湖西市	市長	影山 剛士
発言者	駒ヶ根市	市長	杉本 幸治
発言者	箕輪町	町長	白鳥 政徳
発言者	阿智村	村長	熊谷 秀樹
発言者	豊川商工会議所	会頭	小野 喜明
発言者	浜松商工会議所	会頭	大須賀 正孝
発言者	NPO 法人三遠南信アミ	副理事長	中野 眞
発言者	和合むら		吉田 弓



コーディネーター

静岡文化芸術大学 池上副学長

先ほどのパネルディスカッションに続きまして、こちらの「技・人分科会」もコーディネーターを務めてまいります静岡文化芸術大学の池上と申します。参加者の皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

今年のサミットにおいて、第2次三遠南信地域連携ビジョンの策定が非常に大きなテーマとなっております。先ほどから、申

し上げているとおり、10年前に策定された三遠南信地域連携ビジョンを今回改定するタイミングになっております。

まず、本日の分科会での意見交換のポイントを事務局から説明していただいた後、皆様との意見交換に入ってまいります。

では、事務局よりこの分科会の意見交換のポイントの説明をお願いします。

事務局

先ほど全体会、パネルディスカッションで新ビジョン全体の策定状況について、SENA 事務局から説明がありました。この分科会では、新ビジョンのうち、「技」と「人」について、基本方針、推進方針の案について、御説明いたします。

まず、技の基本方針について、資料集の14ページを御覧ください。

近年、IoT や人口知能、シェアリングエ

コノミーなどの第4次産業革命と呼ばれる技術革新が起きています。現行ビジョン策定後、次世代輸送用機器や、航空宇宙産業など、新産業の成長に取り組んできたこの地域でも、既存産業の継承とともに技術革新を取り込むことが必要です。新ビジョン、技の基本方針は、「革新を取り込む産業創造圏の形成」とし、既存産業の活力増進を図りつつ、産業構造の転換期を先取りすることで産業想像力を強化し、改革を取り込む産業創造圏の形成を目指します。この基本方針の推進のために、推進方針1「既存産業の活力増進」と推進方針2「産業想像力の強化」としました。

推進方針1「既存産業の活力増進」では、さらに主要政策①「人材、労働力の確保、育成」主要政策②「広域的な産業連携活動の推進」とし、それらを通じて地域内既存産業の継承と活力の増進を図ります。

推進方針2「産業想像力の強化」では、主要政策①「企業誘致と特徴ある産業クラスターの形成」、主要政策②「技術革新に対応した新産業の創出」、主要政策③「起用化支援とソーシャルビジネスの育成」とし、それらを通じて産業想像力の強化を図ります。

次に「人」の基本方針について、資料の15ページを御覧ください。

人口減少社会の中で、これまで本地域を支えてきたものづくり産業や農林水産業、健康医療分野での労働力や地域コミュニティの担い手不足が顕著になってきています。新ビジョン人の基本方針は、「地域の持続的発展に向けた人材集積地の形成」とし、次代を担う人材の育成や確保、多様な文化が共生する社会の形成を通じて、地域の持続的発展に向けた人材集積地の形成を目指します。この基本方針の推進のために、推進方針1を「次代を担う人材の育成確保」とし、推進方針2を「多文化共生社会の形

成」としました。

推進方針1「次代を担う人材の育成確保」では、さらに主要政策①「学生や労働者のスキルアップを目指した人材育成」、主要政策②「三遠南信地域に関する知識・情報の共有」、主要政策③「産業技術や文化財継承のための人材確保」とし、それらを通じて様々な分野での地域内の人材の育成確保を図ります。

推進方針2「多文化共生社会の形成」では、主要政策①「だれもが輝く地域づくり」、主要政策②「だれもが働ける雇用機会の創出」とし、それらを通じて多様な文化、価値観を持つ人々が輝いて生活できる多文化共生社会の形成を図ります。

また、資料集とは別に御用意した A3の資料を御覧ください。

新ビジョンの策定においては、SENA 構成員や策定委員会の委員、オブザーバーに御意見をいただきながら策定を進めております。この資料は、皆様からいただいた御意見についてまとめたものですので、参考にいただければと思います。なお、技は3ページ、人は4ページです。

さて、この新ビジョンの基本方針や推進方針、主要政策はこうした御意見をいただきながら、さらに検討を進めてまいります。

本日は、技、人分野の基本方針などについて、分科会での議論をお願いしたいと存じます。なお、基本方針などについて、本日決定するものではございませんので、各分野でご活躍されている方の視点から忌憚のない御意見をできるだけ多く賜りたいと存じます。

コーディネーター

今、私たちのこの分科会では、技と人という二つのテーマを扱うことを確認し、そのそれぞれのトピック、推進方針について事務局より説明をいただいたところです。

この分科会では二つのテーマがありますので、限られた時間ではありますけれども、議論を進めていくことができればと思っております。先ほど事務局から最後にも言及がありましたが、この分科会で何か一つの結論を出すことは目的としておりません。多様な考え方について皆様から何かコメントをいただくことができればと思っております。

では、まずは「技」、そして「人」と区切って進めてまいります。最初に「技」について御意見を賜りたいと存じます。またそれに伴う推進方針などもあれば、合わせて御意見をいただければと存じております。それでは、小野会頭からお願いします。

豊川商工会議所 小野会頭

まず、新ビジョン全体について、私が思ったことを言わせていただきます。

現行ビジョンの策定から大変歴史のある、意味のある10年だったと思います。ただし、この先10年、また同じ形でやるということはどうなのかと思うところがあります。我々の役目が先進的な広域県境モデルであるならば、現在の行政の枠を超えた新しい行政枠を形成し、立法化するというぐらい、新しいことをやってほしいと思います。もしそうしなければ、また同じ10年間を繰り返すのではないかと、非常に心配するところです。

次に「技」についてですが、新ビジョンには航空産業や、自動車産業などいろいろ盛り込まれていますが、重点的に取り上げる産業を一つだけに絞り込んだらどうかと思います。これは、3地域の状況を踏まえて、玉虫色みtainな内容になったのだと思うのですが、そういった配慮をせず、航空産業なのか、光産業なのか、医療機器なのか、SENA で引っ張る分野を一つに決めることにより、それぞれの地域の既存産業が

そこに引っ張られていく、もしくは、関係のない異業種がその産業に入っていくイメージをつくらなければ、「それぞれいろいろな業種がありますので、その産業基盤をそれぞれつくってください」では、三遠南信地域連携の意味がないではないかと思うのです。

例えば、東三河地域には航空産業がほとんどありませんが、南信州地域にあるのであれば、他地域がそこへどうやって入り込むかを、もしくは SENA がリーダーシップをとっていくことを考えていくべきではないでしょうか。SENA 以外にも、県や国という枠組みがあるわけですから、SENA の特色を出していくには、一つの分野を決めて取り組んだらどうかということが一つです。

それから、人材の問題ですが、住みよい地域でありながら若い人たちがこの地域から出ていくことが前提であると認識しながら、その人たちに帰ってきてもらい、定着してもらうためには、ほかの地域に比べて優位な金銭的なインセンティブをつくり、結婚、子育てする方を引っ張ってこることが必要だと思います。

他にも考えていることはいろいろありますが、産業構造は非常に変化をしており、三遠南信地域で人材をつくり、確保することを目標にするだけでは、地域内の企業は多分生き残れません。既存の業種の変化し、国際化や国際競争の中で企業が切磋琢磨していくわけですので、それは三遠南信地域の持つパワーの引き出せるところとはちょっと違うところにあります。つまり、三遠南信地域が生かすためにやれることを考え、そのリーダーシップをとり、全国の中で県境のモデル地域になるという自負をぜひ持っていていただいたらどうかと、持っていていきたいと思っております。

コーディネーター

あと10年、今のような形をまた繰り返しても新たな展開はないのではないかと、かなり激烈なコメントから始まりました。新しい行政の形をとれないだろうか。それは、全国のモデルになるような新たな広域連携の形にならないだろうかという点が1点。

それから、一つだけ産業を絞り込み、そこに選択と集中で三遠南信地域のリソース、知恵を投入するなど SENA らしい特色を出さなければ、現状のままでは総花的な列举、羅列に終わってしまうのではないかということ。

さらに、この地域から人が出ていくことを当たり前と見た上で、いかに戻ってもらうか、そのためのインセンティブをどうつくっていくかとの御提案をいただきました。

それでは次に、箕輪町の白鳥町長からお願いいたします。

箕輪町 白鳥町長

私は、箕輪町の町長でございますが、伊那市から北にある伊北という地域の4市町村が今回新たに加入をさせていただきました。伊那市の人口が大体7万人くらい、私たち北部の3町村で6万人、トータルで13万人くらいです。

私たちの町は、浜名湖に近い、舘山寺のある浜松市西区庄内地区と50年、60年も交流を続けているものですから、非常に興味、関心をもっていたのですが、三遠南信自動車道が見えてきたこと、リニア中央新幹線の工事が始まった状況で、三遠南信サミットに参加をさせていただきました。

今、小野会頭からもお話があったのですが、民間は、もともと行政の枠を超えて動いているわけで、私も行政が遅れているという点は同感ですが、なかなか厳しい部分もあるかというものが率直な感想です。

伊那市北部は製造品出荷額ベースで

5,000億くらい、先ほどの資料集では三遠南信地域全体の製造品出荷額が14兆円と数字が出ていますので、3、4%にしかすぎませんが、中小企業の技術力や専門性の高い集積地ですので、三遠南信地域の連携、東三河地域や遠州地域との連携に期待するところは、非常に大きいと思っています。人口減少の流れの中で、特に女性の転出が非常に多くなっており、働く場として産業を、しかも女性に選ばれる場をつくっていかねばならないと思っています。

私たちの町で、私たちの世代では大体7割くらいの者は地域に残りました。今、地域に残る者は大体4割を切りました。人の移動はやむを得ない部分もありますけれども、とどまるための施策を実行するためには、地域連携はどうしても必要です。

「人」分野にも関係がありますが、地方では、お金だけでなく、実は人材も足りないのです。私は、自分たちの地域を自分たちだけでつくる時代はもう終わっていると思っており、外の知恵を取り込むためのネットワークがつかれないと、まちの創造はできないと思っていますので、こういった機会を通じて、違った発想や力を勉強させていただければ非常にありがたいと思います。

私の場合、浜松には年に2回、3回交流の関係で来ています。遠州地域まで来るのに3時間はかかっていますが、三遠南信自動車道が開通することによって、2時間くらいまで短くなるかもしれません。そうなれば、文化の交流が自然にできてくと思いますので、上伊那の北部、長野県では真ん中にまでいってしまうのですけれども、全方位外交がとれ、名古屋からも、東京からも、浜松、豊橋からも非常に優位な場所になると確信しています。

コーディネーター

人口減少を考えたとき、女性が転出し

てしまう、特に生産年齢の女性の転出が非常に大きな問題であるということ、その問題を解決するためには女性の働ける場が安定的につくらなければいけないこと、そのための地域連携を考えたいということ、そして、まちづくりのために、外の知恵、あるいはネットワークを築いていきたいとのお話をいただきました。

最後にお話があったように、今後非常に戦略的な場所になっていく箕輪町の町長が、オープンマインドな御発言をされたことに、私は非常に勇気を得ました。ぜひ、そういうネットワークが今後も広がっていけばいいと思っております。

それでは次に、静岡県で湖西市の影山市長から御意見をいただきます。

湖西市 影山市長

三遠南信サミットは、前回に続いて2回目の参加となります。

湖西市は、静岡県の一歩西、人口80万人の浜松市と人口38万人の愛知県豊橋市の大都市には含まれた、人口約6万人と、決して大きな町ではありません。湖西市は、トヨタグループの創始者である豊田佐吉翁の出身地であり、本日ちょうどお昼のNHKニュースでも取り上げていただきましたが、本日が豊田佐吉翁の命日にあたりました。本日午前中、トヨタの豊田章一郎名誉会長ご夫妻、章男社長ご夫妻、そしてスズキの鈴木修会長にもお越しをいただき、豊田佐吉翁の顕彰祭を執り行いました。そういった自動車産業を中心にしたものづくりのまちでございます。これまでのお話にあったとおり、三遠南信地域の、例えば湖西市の工場にも、信州から部品の提供をいただくなど様々な連携をいただいています。三遠南信自動車道はもちろん、そこから南の国道23号まで通じる浜松三ヶ日・豊橋道路の実現に向けて調査費を計上いただきました

が、そういったネットワーク形成をぜひ望んでいるところです。湖西市としても、「技」の推進方針2の中にある産業競争力の強化、特に新産業の創出を重点的に取り組みたいと思っており、その取り組みを簡単に御紹介させていただきます。

湖西市では、本年11月22日、23日の二日間にわたり、湖西ネオテクノフェアビジネスマッチングを開催の予定です。これは本年5回目になりますが、湖西市の企業35社と湖西市以外の企業46社の合計81社の参加を予定しており、これは湖西市や遠州地域だけではなく、三河地域や南信州地域からも出展をいただく予定になっております。車、いわゆる輸送用機器や産業機器、医療、環境機器が中心となっており、こういった産業は一つの市町村にある工場や企業でできることは限られておりますので、航空機産業や伝統の自動車産業のマッチングを進めていけたらと考えております。

さらに、湖西市では、浜名湖西岸の土地地区画整理事業として50ヘクタールの区画整理に着手をしております。本日の佐吉翁の顕彰祭にもお話が出ておりましたが、ガソリンエンジンからハイブリッド、電気自動車、EVへの転換が迫られている自動車産業にあっても、高度化、そして集約が迫られており、こういった工業団地を造成し、さらに工場を集約していくことによる高機能化、付加価値を図っていくことが必要になっております。湖西市としてもそういったところに工業用地を確保して、自動車産業、さらには航空機等々、新産業の創出を図っていきたいと思っておりますし、立地的にもこの三遠南信地域の東西南北とも今後道路等でつながっていきますので、人材を含め連携を図っていけたらと思っております。

コーディネーター

人口規模では6万人という大きさの町ですが、新産業創出に向けて湖西ネオテクノフェアビジネスマッチングを毎年開催し、80社以上の参加があるとのことでした。

また、50ヘクタールの工業用地を今つくっているところであるとのことをお話を伺いました。

それでは、続いて NPO 法人三遠南信アミ、中野副理事長からお話をいただきたいと思います。

NPO 法人三遠南信アミ 中野副理事長

三遠南信地域が大好きで、ここに暮らして頑張っている人達のネットワークでございます。このサミットに25年前からかわらせていただいております。オブザーバーということで、我々NPO なものですから地域に暮らし、本当に頑張っている人たちの集まりなのですが、産業あるいは仕事の観点で考えてみています。

これから先の10年ですけれども、10年先を考えるとときに大切な視点だと思ったのは、人生100年の時代だということです。寿命が100年の時代ということは、本年生まれた赤ちゃんが最晩年を迎える100年後、あるいは100年の間もこの三遠南信地域に暮らして、働いて幸せだと思うようなまちづくり、地域づくりの視点からこの10年を捉えるのも大切かと思います。100年後の未来をわかるということはできませんが、考える上でその視点が大事かと思います。

実をいうと、新しい技術、産業、IoT、AI その他の産業がどう進展していくかは、正直言って、これは想像がつかないのではないのでしょうか。もちろん、企業の立場からすればそこに取り組むのは当然ですが、地域に暮らす我々にとって大切なのは、100年後もきっと大切に残したいというのは、天竜川の流域を核にして、三遠南信

地域の自然や風景といったものを100年後も残ってほしいし、残すべきだと思います。

それから、人と人がつながるコミュニティ、共同体が大切かと思います。

それから、もう一つが暮らしのもとをつくる産業という点でいうならば、三遠南信地域の力のもとでもある農林水産業が新しい技術や仕組みを生かしつつ、この地域で持続し、発展する仕組みづくりが大切だと思います。

本日午前中開催された住民セッションでは、新しい流れ、新しい風を本当に感じました。住民セッションに参加する者も高齢化しており、僕も25年前このサミットに来たときは30代だったのですが、孫がいる年代にまでなっています。しかし、本日の住民セッションには、学生さんがたくさん来ていただきました。新しい風が生まれてきていると、もう一つのテーマの「人」にも思いをはせた時間でした。

コーディネーター

25年前から継続的にかかわっておられたとのことでした。私、不勉強にして大変失礼な質問をさせていただきますが、このアミとは、どういう意味なのでしょうか。

NPO 法人三遠南信アミ 中野副理事長

フランス語で仲間、友達という意味のアミです。

コーディネーター

この地域でも人生100年時代、100年後にも皆さんが幸せで暮らしていけるようにと、持続可能な、サステナブルなという言葉が、おそらくお考えの根底にあるのだろうと思って伺っておりました。自然や風景、コミュニティといったこと、昨日のNHK の大河ドラマ「おんな城主 直虎」の回がまさにそうでしたが、長篠の戦いに向

けて、木をいっぱい切って、戦いには勝ったのだけれど、どうも鉄砲水が出そうだと
なり、みんなで松を植えましょうとの話を
していました。サステイナブルにやってい
かないと地球そのものがもたないという価
値観は皆さんも共有しておられると思い
ます。

農林水産業が暮らしのもとであること
と、またそこに付加価値をつけていくこ
とは、大事な事かと思って聞いておりま
した。さらに、新しい世代がこういった地
域の問題について考え始めているという、
希望のともしびとなるお話もいただきました。

私も、学生たちが非常にリアルなつな
がりや、リアルな地域の課題に向き合う
ようになってきていることを強く、強く感
じております。またそれが学生にとって非
常に貴重な学びの機会にもなっており、
本学でも学生たちが北遠地域にいろい
ろな分野で入っています。本日さきほどの
パネルディスカッションを行った4階の
フロアに、私どもの大学のチームが入
っている様子をまとめたパネルがありま
すので、ぜひ御覧いただければなと宣
伝をさせていただきます

ここまでのお話を受けて、大須賀会頭、
いかがでしょうか。

浜松商工会議所 大須賀会頭

これから電気自動車が優位になり、
エンジンを積んだ自動車は必要がなくな
ります。そうなれば、今ある自動車産
業が必要なくなり、その産業に従事し
ている人たちが次に何をやっていくか
ということを今から変えていかなけれ
ばなりません。変化に10年かかると
いわれていますが、私は5年でそう
なると思いますから、皆で次の分野
を考えていかなければならないと、
私は思います。

コーディネーター

電気を使った自動車の展開は、もう
大きな流れで、ヨーロッパなどは特
にそれが進んでいるわけですから、
これは変わりようがないですね。

影山市長、若手の市長として、今後
のビジョンについて思っていることが
ございましたらどうぞ。

湖西市 影山市長

大須賀会頭がおっしゃるとおりで、
先ほどのお話にもあったとおり、湖
西市も自動車産業は多いのですが、
伝統的なガソリンエンジンを主体と
した部品メーカーがある一方で、
プリウスのバッテリーをつくって
いる会社もあり、混在している中で、
比重は新しいEV化に向けた部品を
作る企業に移ってきていることは、
間違いのないと思います。もちろ
ん自動車だけではなく、航空産業
や医療など様々な産業も必要だ
と思っております。行政としても
そういった変化に対し、手をこま
ねしているだけでなく、産業の
変化を先取りした形で、企業の
立地や誘致など、常に行政として
どんな施策が効果的かを考えなが
ら取り組んでいるつもりですし、
やっていかなければいけない
と思っています。

コーディネーター

杉本市長、どうぞ。

駒ヶ根市 杉本市長

最近、いろいろな人と相談する中
で、新しい産業を興そうというとき
に、日本全体を見たときに、製造
業の関係はいろいろなものをつ
くって海外に輸出していますよ
ね。一方で、今、国内で足りない
産業というと、農業関係の食料
自給率を見ると残念ながらまだ、
30%ぐらいしかない状況です。
各地で農地の荒廃地がどんどん
増えていっ

てしまい、国土の保全もできなくなります。やはり農業に関してこれまでも食の安全などいわれているので、ぜひこれからはこの三遠南信全体で、この地域の人たちが食べるものはみんなここでつくろうよと、特に路地型だけではなくて、施設型にし、なおかつそれを第3次産業でチーズにしたりとか、肉にしたりとかをここの地域でやって食の安全を図っていくことができれば、現実的に三遠南信の皆さんがすぐに動き出せます。海、山があるし、起伏もあるので食品の種類は豊富だし、いろいろな交流ができたり、なおかつこの地域の新しい産業を興せたり、そういうことになると、都会にいたのが疲れてしまった若い方たちが、地域に帰って来て農業をしながら暮らしたりとか、二地域居住をしたいという意味では、この地域のポテンシャル、十分あるので、そういったことをこれからの三遠南信で現実的に連携をしていく一つのモデルにしたらいいいと感じております。

コーディネーター

この地域は、海に面したところから標高の高い山まであって、非常に植生も豊かであるということは、そこでできるものも多種多様にあるということですね。それから、製造業の蓄積もあって、そこに第3次産業をかませ、第6次産業として、付加価値を高めていくと、こういったことですね。

駒ヶ根市 杉本市長

農業をやっている人たちは、技術的な面でなかなか足りないところがあるので、工業の皆さんに生産性を高めるための新しい機械をつくってもらうとか、第3次産業の皆さんに商域を開いてもらうとか、お互いが連携していけば本当にいいと思います。農業の皆さんって、どこに売ったらいいの

か、どう機械化したらいいいかわかりません。しかし、工業や商業の皆さんがかかわればすごく魅力的なものになると思うので、すべての皆が連携するという意味でもいいプロジェクトができるかなと思っています。

コーディネーター

大須賀会頭、どうぞ。

浜松商工会議所 大須賀会頭

農業は経営者が高齢化しており、跡取りがいまいません。跡取りがない理由は、お嫁さんが来ないからです。農業はどうしても家族の手伝いがないとできないルールみたいです。お嫁さんが来ないから、若い人が跡をつがず、減ってしまっている。だから農家がどんどん疲弊して、今、平均年齢が73歳ぐらいになっているのですが、そういう面も一緒になって考えていかないといけません。

コーディネーター

杉本市長、どうぞ。

駒ヶ根市 杉本市長

長野県には、レタスの生産地として有名な川上村があります。その村は、若い人たちがみんな来て一緒に農業をやります。今では若い人がお嫁に来ることが多いので、やはり稼げる農業にする、魅力的なものにするということが重要だと思います。そして、企業の皆さんに、こういう農作物をつくったら食品関係の企業が10年間は必ずあなたのつくったものを買ってくれるから、その代わり、こういうものをつくってください、こういう機械化したらいいいです、と技術的に指導をしていただくと、うまくいくと思うのです。そういう関係をつくって、農業の皆さんも安定的に買ってもらうところがあれば、若い人たちも魅力をもっ

てくれるのではないかと考えています。

コーディネーター

今、非常に重要なヒントを得たと私は感じています。結局、旧来型の20世紀型の農業のイメージだと女性が混入してこない形だけれども、そこにビジネスとしてのビジョンがあって、さらに自分たちの食べるものは自分たちでつくって、顔の見える関係で、食と生活がつながっているとなってくると、そこに女性たちが働き場を見出すわけですよ。工場を誘致してくるだけではなく、むしろ農業で生き生きと働くモデルを地方でつくって、さらに都会から人が入ってくれば、都会のマーケットで売るにはどうすればいいかとの視点も入ってきます。農業をもう1回見直すことが「技」と「人」を考える際の一つの重要なポイントなのかなと、ヒントが浮かび上がりました。



コーディネーター

それでは、「人」についても、御発言をいただきます。まずは豊川市の山脇市長からお願いします。

豊川市 山脇市長

全体会のパネルディスカッションで、浜松商工会議所の大須賀会頭の外国人の特区をつくって受け入れるという話は、本当に素晴らしい話だと思っており、東三河でも何とかできるのではないかと考えたところでした。

さて「人」についてですが、やはり人づくりが一番重要だと思っております。豊川市には高校駅伝の全国大会に15回出場している名門の愛知県立豊川工業高校があります。ぜひ皆さんに知っていただきたいと思うのは、この高校では、駅伝を通して人づくりに取り組んでおり、例えば挨拶がしっかりできるとか、大会に前の道路を掃除するなど、すばらしい人づくりができています。豊川工業高校の卒業生は、非常に高い就職率をほこっております。大企業からも多くの募集がある状況であり、スポーツを通じた高校での人づくりとして成果を上げていると感じております。私も「スポーツの盛んなまちづくりを」と言っているものですから、スポーツを通して人づくりができればと考えています。

また、先ほど湖西市長から、湖西市で開催されているネオテクノフェアのお話がありましたが、豊川市では、豊川信用金庫が本年で13回を迎えるビジネス交流会を開催しています。本年は202の企業、行政、そして学校など多くの方が参加しております。その中で、高校生がいろいろなビジネスのアイデアを出して、それを皆さんに披露する場があります。この取組もこの私どもの地域のいろいろな発展に大変寄与しているので、これからもぜひ力を入れていきたいと思っています。

コーディネーター

駅伝の豊川工業高校の話から、スポーツを通じた人づくりと、その重要性をお話いただきました。また、豊川信用金庫のビジネス交流会で、高校生もアイデアを出して披露し、若い世代と地域の企業さんが出会う場をつくることは非常に大事なことです。どうしても、高校生は消費者の立場で、企業といえはいわゆるナショナルカンパニーのイメージしかないものですから、

地域のいろいろな企業さん、とりわけ B to B、ビジネスとビジネスの取引が中心になる企業は高校生には全然わからないので、そういった企業と出会う機会があることはとても大事だと思って聞いておりました。

それでは次に、浜松商工会議所の大須賀会頭、よろしくお願いいたします。

浜松商工会議所 大須賀会頭

今後人口が減っていく中で、今、人は「働く金の卵」と言われています。そういう中で、優秀な人を採用するとの話を聞きますけど、私はそうではなくて、採用した人を優秀に育てることが企業の責務だと思っています。どんなに良い大学を出ても、自信を無くしたら駄目になってしまいます。自信を持たせてやれば皆優秀になります。だから、自信を持たせるためにどうするのかが問題であり、私は、社員を優秀に育てることができる企業が勝ち組になると考えています。何か問題が起きた時に、「お前こんなことも出来ないのか。」と、頭ごなしにしかりつけると委縮してしまいますが、少しのことでも良くやったと本人を認めてあげると、だんだん自信を付けていきます。常にやったことを認めて「もうちょっと努力すると、もっとこうなるよ」と助言を与えれば成長します。これからの企業は、人が不足する中で、社員を育てられなければ、どんな良い人材を採用しても何にもならないし、自信を持たせれば誰でも優秀な人材に育つのだと、私は思います。

コーディネーター

大須賀会頭なりの人材育成の秘訣を御披露いただいたわけですが、先ほどのパネルディスカッションでは、人手不足の企業が多いと、さらには廃業せざるを得ないような企業も多い状況をアンケート調査等で明らかにした上で、例えば外国人特区のよ

うなものをこの三遠南信地域で試みてはどうかと御提案をいただきました。また、それは先ほどの山脇市長からもおもしろいとお話をいただいたわけですが、大須賀会頭のイメージする外国人特区でやってくる外国人は、今の枠組みでいうと技能実習生のような若い単身者なのか、あるいはブラジル人、ペルー人のように家族でやってくる人たちなのか、そのイメージはいかがですか。

浜松商工会議所 大須賀会頭

私は、どちらでも構わないと思います。ただし、技能研修生は、今は3年で帰らなくてははいけません。そうではなくて、10年なら10年というルールにして、皆で育てることをしなければならない。なぜかといえ、データで見ると人の減り方がすごく、間違いなく人材の供給が追いつかなくなってしまう。働く人が本当に半分になっていいのかということを見直す必要があります。食品も医療も、全部人口が増えれば景気が良くなりますが、人が減り、消費も減れば、景気は絶対に良くなりません。だから、まず人を雇うということです。

コーディネーター

今は技能実習生制度が3年、もうじき5年に延長されるといいますが、そういう場当たり的なことなく、むしろ日本に働きに来て、そして戦力となっていく人づくりをしていかないと難しいのではないかと御指摘をいただきました。

それでは次は、駒ヶ根市の杉本市長からお話いただきます。

駒ヶ根市 杉本市長

当地域の有効求人倍率は今およそ1.7です。企業の皆さんと話をすると、人を連れて来てもらわないと企業が存続できず、新

しい企業を呼ぼうにも、人がいないからこのままでは呼べないのが現実です。商工会議所の会頭と話す中で、ぜひ市役所に特区で職業紹介の権限を持ち、現在国外から受け入れる取り組みをぜひやっていただきたいと、お願いをされています。

一方で、経営者協会などとも取り組む中で、高校生を卒業した人が進学したい人ばかりではないのではないかと、本来は勤めたいのではないかと、だからここに勤めてもらうようにしよう。現在、大学に進学した者の3割しか戻らず、特に女性は戻ってきません。そこで、この子どもたちを地域に残すために、郷土愛プロジェクトを始めました。高校や中学校の先生たちが必ずしもその地域出身の人ではなく、地域にある企業が何をやっているかわからないし、この地域にどういった企業があるのか全然知りません。進路指導の場面で「いい大学に行っていっていい企業に行け」とだけ言っているから、学生は全然地域に残ってくれません。そこで、大体1回100人くらいの高校の先生に来てもらい、どんな企業があるのか見てもらい、また夏休みには、親子企業訪問で、中学生の親子に各地元の企業を見ていただき、高校にも、普通科とかではなくて、地域を支える科をつくってもらい、地域が望む人材の育成、その高校を出たら企業が必ず採用する道筋をつくっていかないと、本当に深刻な問題になっていくと思っています。地道ですけれども、地域では経営者協会などと組んで、学校任せではない地域に担い手が残るプログラムを始めております。

それからもう一つ、多文化共生、また青少年の国際化として、駒ヶ根市には、青年海外協力隊の訓練所がございます。日本において、駒ヶ根市と二本松市の2か所しかございません。今年で駒ヶ根市は38年になりますが、2万人を超える JICA ボランティアが駒ヶ根市から世界に羽ばたいていって

おります。今も、1年間に800人の若者たちが高い志を持って発展途上国に行っています。実は、その皆さんが帰ってきたときに受け入れをする青年海外協力協会の本部が、来年2月に東京から駒ヶ根市に移転することになりました。それはなぜかと聞いたら、発展途上国に行き、東京にいるよりも地方に行って地方創生をやりたいと、若者たちが帰ってきていただいております。それがこの三遠南信地域内にありますので、高いスキルと高い志を持った2年間、発展途上国に行った若者たちが、またこの地域で受け入れてくれるとなれば、この地域のいい人材にもなり、生かしていければ新しいこの地域の発展につながるので、今後プロジェクトもつくっていったらどうかと思っておりますし、JICA の皆さんもそう強く思っております。

また、国等も生涯活躍のまちづくりを進めていますので、都会で困っている高齢者の皆さんを働き手として受け入れる生涯活躍のまちづくりを、この地域で取り組むことのひとつとして提案をさせていただきます。

コーディネーター

高校生に地元の企業を知ってもらう前に、高校の先生方に知ってもらうのは非常に大事なことです。進学先となる大学を決める際も、高校の3者面談で、先生が「君の成績だとここなんかどうだろう」というと、子どもも「はい、わかりました」と決めてしまうことが多いようです。私どもの大学で、新入生にアンケートなどを取ってみると、最も影響のあるものは高校の先生のアドバイスでした。そこで、高校の先生に私たちの大学を知ってもらうという戦略を取っています。

話を戻すと、地元の企業を高校の先生に知っていただければ、高校の先生は転勤がありますので、よその町にいても、駒ヶ

根市にこういう企業があったと言ってくさるかと思います。ぜひ企業と高校の先生の間で、もちろん生徒もそうですけれども、顔の見える関係をつくっていく地道な努力が大事なかなと思って伺っていました。

また、国際化に関連し、駒ヶ根市には青年海外協力隊の訓練所があり、また青年海外協力協会の本部が東京からやってくるということで、経験、ノウハウを持った若い人たちがまた駒ヶ根市に戻ってきます。先ほどの白鳥町長のお話でしたが、外の人たちの知恵、あるいはネットワークもぜひ組み込んでまちづくりに違った活力を得たいとお話がありましたが、そういったところも響きあっていくのかと思って聞いておりました。

それでは、次は阿智村の熊谷村長にお願いいたします。

阿智村 熊谷村長

まずは、これから新ビジョンがどう進んでいくかという中で、人材の大切さ、これを入れていただいたことがすごくありがたいし、うれしいと思います。例えば、スズキやトヨタのように技術的な面もそうですし、家康公もそうですし、この三遠南信地域は人を育てるには最適な地域だともっと売りだすべきではないかと思います。これから10年の方向としてぜひお願いしたいと思います。

私も常々思っていることは、駒ヶ根市長と似ているのですが、この三遠南信地域は、日本の中心地にあり、これからリニア中央新幹線も走ります。そして、社会人、1回リタイアされた方、高齢者には、もう1回勉強したいと考えている方も山のようにいらっしゃると思います。そういった方々が自然豊かな三遠南信地域で、2泊3日で航空宇宙産業や自動車産業など技術的なことの勉強や、道徳的なことを学ぶことができ、

人材を育成する場だともっと打ち出していくことが技術者を生み、産業振興につながっていくと思います。

それと、私ども阿智村には昼神温泉郷があり、今、星空の関係で取組んでいるのですが、全国から星のことをやりたいと来てくれる若者、特に女性が結構います。三遠南信地域内にも、様々な企業があり、例えば観光業にしても、人材不足が深刻であり、全国から人を集められるPRをSENAでやっていただくとありがたいと思いますので、それも一つ提案だと思っています。雇用の場の確保をし、そういった方が将来、定住してくればありがたいと思っています。

最後に、毎年分科会で議論し、第25回もやっていて言っぱなしになってしまうこともあったのですが、これを実現させていくためにSENAの組織の中に人を配置して、それに特化して取り組む人、事業をしっかりとやる人を配置して、SENAの事業として運営していく体制が必要かと思っています。これは予算的な課題もあるかと思うので、まずは人を配置して、実際どのような事業をやっていくかという検討を進めていければよろしいかと思っています。

コーディネーター

人材育成の拠点としての三遠南信地域でのお話ですね。都会にはない、いろいろな資源がある場所なので、それを逆手に取ってリタイアした人、あるいは生涯学習したい人たちにもう一度勉強してもらう機会を設けること、あるいは、星空のガイド、こういった都会ではなかなかできないことですが、あそこに行けば非常に特化した学びができるといった売り出しも一つではないかというお話がありました。それから、最後は非常に具体的な御提案をいただきました。SENAの中にいわば事業部門をつくり、アイデアを形にしていく人を配置していく

と良いのではないかというお話でした。一つ一つできることから形にしていく、そういう段階に来ているのではないかという御指摘をいただきました。

向こう10年を見たときにこれまでのような企画をする、調整をするところから1歩踏み出すとすると、具体的な事業の展開があり得るようなシナリオかと思って伺っていた次第です。

それでは、和合むらの吉田さん、お願いします。

和合むら 吉田氏

私は阿南町の広大な山間部を占める和合地区に移り住んで18年がたちました。田畑を耕して、なんとか暮らしていければいいと思っているのですが、この10年ほどは、和合地区で受け継がれている伝統食の企画販売も細々と続けています。

私が暮らし始めてから既に尊敬する和合地区の人たちが100人以上も亡くなってきました。その方たちが守ってきた愛おしい山間の風景も、同時に少しずつ荒廃していて、そんな風景を見るのがやるせない、悲しい気持ちになることは多いのが現状です。悲しくて、さみしくてこの先これ以上の方々を亡くすには耐えられないと思ったときもあったのですが、この頃になってすごく自分でも不思議だと思うのですが、その方たちの思い出が私の中で本当に強く生き始めていて、例えばあの方はこのときこうしていた、こんなときはこう言ってくれたということが本当にどんどん募って行って、今はこの山間の和合地区で生き続けていくことに、気持ちの上で揺るぎなくなっています。

私が住み始めて18年間を振り返ったときに、ほかの地域から移り住んできて、そしてまた離れていった人たちも多くいます。その数や理由を考えると、人材育成とか確

保はすごく重要な課題であるのですが、計画してもなかなか計画通りにいかないものだと考えざるを得ません。地域社会に適応する、適応してまた活路を見出して住み続けられるかは、個人的な事情によるのです。私もそうですけれど、各地域からいかに楽しく豊かに暮らしているかという情報発信をできるだけ楽な方法で、あらゆる手段で数多くし続けることがよいと思っています。そして、実際その中で和合地区に来てくれて住み続けようと決心してくれた人たちもいるので、そういう機会を多く持っていきたいと思っています。

また、とりわけ三遠南信地域には、祭り街道という大きなつながりがあるので、もうちょっと連携して情報発信をしていけるといいのかと考えました。例えば、祭り街道クラスターとかいう発想はいかがでしょうか。祭りの歴史的、文化的要素とか、祭りの道具を維持継承するための工芸的要素とか、それからその祭りを支え、食の面で支えている伝統食のあり方、農林漁業なども、みんな切り離しては考えられないので、祭りという切り口から山の暮らしをもう少し情報発信できます。それは、産官民学で取り組んで見るとちょっとおもしろいテーマではないのかなと思いました。四季折々の恵みを最大限に活用する山の暮らしの技の中には、本当に知恵の集積があって、きっちり、きっちり季節ごとに、毎日、毎日こなしていかなければいけない仕事があって、その抜き差しならない厳しい毎日を1人でも多く、みんなで乗り切っているために、祭りという文化が生まれて育まれて、そしてその時代ごとに必要な役割を果たしてきたのではないかと考えています。三遠南信地域の山間に数多く残っている祭りには、それぞれにつましく、たくましく生きてきた日本人像が凝縮されていると感じています。高度経済成長をかつて底辺か

ら支えたのも、この日本列島の谷筋や山ひだから排出されていった人々のすごく強い精神力や叡智によるものではなかったでしょうか。これから先の日本のあるべき姿もそういった山の暮らしから見いだされていくように思えて仕方ありません。

ちょっと抽象的な話で済みませんが、祭りを取り巻く環境も変わってきたし、継承することが厳しい現実も直面しているのですが、できる限り楽に後世に続けていくこと、つなげること、またそういった精神のごく一部でも、多くの都市生活者、外の人に伝えていくことが重要なことと思えてなりません。

山の暮らしはそもそも多文化共生の要素がたくさんあるし、本当に持続発展的な人の道だと思いますので、このような暮らしに共感する人に1人でも多く訪れてもらえるように、三遠南信地域一丸となってその象徴である祭りを中心にともに情報発信ができる場があるといいなと願って、私の発言を終わらせていただきます。

コーディネーター

山での暮らし、特に外部から来た方だからわかるそのよさがお話からにじみ出ていたと思います。この三遠南信地域の祭りは、本当に世界遺産クラスなのですが、それをもとに地域の暮らし、特に山の暮らしを発信していけば、いかに楽しく、豊かで、人々が生きているかを知っていただけると御提言いただきました。

今、確かに人が都会にどんどん出て行っているのですが、都会で非常に疲れてしまって、人と自然が調和する暮らしを求める人たちが増えているのも一方の事実です。そういった人たちに、今はやりの言葉でいうと「刺さる」ような発信を三遠南信地域からしていくといいのではないかと御発言と受け取りました。

幸い、私たちはあと10分ほど時間を持っております。人に関する御発言でも結構ですし、これまでの御発言に対して、こんなことを感じたという方がいらっしゃいましたら、御発言をお願いできればと思いますが、いかがでしょうか。

豊川商工会議所 小野会頭

昨年度のサミットでも少し申し上げたと思うのですが、三遠南信地域で今できることというよりも、次の世代にこの三遠南信地域の交流をつないでいくためにすべきことは、子どもたちに影響を与えることだと思うのです。子どもたちに影響を与えるのは、学校を通じて行うのが一番手っ取り早いと思います。林間学校を交流したり、臨海学校を交流したり、要するに山の子たちが海に出てきたり、海の人たちが山へ行ったりすることを、行政、もしくは SENA が推進し、ほかの地域より回数をふやすことによって、自分たちがこの三遠南信地域の中で育っていることが感じられる機会をつくります。また、先ほど高校の先生の話が出ましたが、高校同士の交流や企業の研修をすることによって、高校の先生の影響が一番強いという自覚を持っていただきたいです。教育面での交流は今から始めてようやくあと20年後にこの話が成り立つぐらい長い話です。先ほど吉田さんが言われたように、文化面、歴史面の交流、文化人類学のような学問的な話でこの三遠南信地域を無理やりくっつけていくのはどうか思うのですが、この歴史的、文化的な背景や地域的なものをもっとアピールする場をつくり、行政、産業というよりも、学術シンポジウムのようなものをもっとしっかりやって、文化面も取り組み、それを子どもたちに伝えることが20年後、30年後に向けた三遠南信地域の話ではないかと思うのです。

この地域は、本日もそれぞれの地域の方

言で話しても、通じ合うところなのです。この地域が分かれたのは、行政の区域で離されたところであって、もともと文化圏とか歴史圏は同じ地域だったことをもう1回認識しあって、ぜひ子どもたちに伝えることをやっていただきたいと思います。

コーディネーター

子どもたちに伝えることの重要性とその具体的な方法について今、臨海学校、林間学校の相互交流であるとか、高校の先生方の交流の提案をいただきました。

また、歴史文化面の交流について、学術シンポジウムのようなものやってみてはどうかとのお話です。

本学も、もうあと2年後ぐらいになりますが、文明観光学コースを立ち上げるようになっております。その文明学という大きな視点から地域の観光資源を掘り起こしていく上では、飯田街道周辺の祭りは非常に重要な意味をもつわけです。

それでは、ほかに御発言いかがでしょうか。

箕輪町 白鳥町長

私たちの町には小学校が五つあるのですが、5校が社会見学で浜名湖へきています。やはり海なし県であり、海に対する感動は、皆さんとは全然別なのですが、そこで単に観光ではなくて、社会見学で地引網などいろいろなことを体験して帰ってくると、今まで山の暮らしだけのものが、大海原を知ることで大変感動して帰ってきています。そういった小さい頃の交流がもっと必要だと思いますので、また受け入れをしていただければありがたいと思います。それには、時間、距離をもう少し短くしないといけないかもしれません。

もう1点、田園回帰のような話は、非常に確かな足取りであるのだと思うのです。

先ほども杉本市長が農業の産業化の話をしていましたが、一方で農的な暮らしをもう一度取り戻すことが必要だと思っています。例えば、どこかの工場や商店に勤めながら農業をしてそれで生活を立てていく、その中で暮らしやすさ、楽しさを感じ、そういった地域の生活がいい生活なのだと意識を取り戻さないと、どうしても都会に出ていってしまいます。農的な暮らしの話をもっと盛んにしていかなければいけないと思っています。それが、例えば長野だけではなくて、地域での生活を考えていく上にどうしても必要だと思っています。

コーディネーター

農業そのもののポジティブな捉え方に、もう1回光を当ててみようということですね。

はい、杉本市長どうぞ。

駒ヶ根市 杉本市長

今、普通の教科書を見ると、地元のことがあまり書かれていないので、私実は、駒ヶ根市の歴史とか伝統文芸だけの副読本をつくり、学校で子どもたちに教えてもらっているのです。そうでなければ、子どもたちが地域のことを学ぶ場所がありません。お年寄りとも一緒に暮らさないのが、お年寄りの皆さんからも地域のことを学べず、地域のことに参加をしろと言っても知らないし、参加ができません。もし、この三遠南信地域についても、祭りのことや昔から同じような伝統文化があったこと、またこんな企業があってこのように頑張っているという情報を、できればこの SENA で共通して情報発信をするものがあれば、お互いの共通認識で同じ話ができて、お年寄りも子どもたちにも伝えていけると、思いましたので、SENA で取り組んだらどうなのかと思いました。

コーディネーター

三遠南信共通の副読本のご提案でした。地域の文化、その多様性と共通性、交流の歴史などを子どもたちが学ぶ、それを長野県、愛知県と静岡県、子どもも学んで、大人もそれを語る形でかかわっていくような副読本をつくってみてはどうかとのお話でした。

中野さん、先ほど前半で「技」についてのお話をいただきましたが、「人」についてはどうでしょうか。

NPO 法人三遠南信アミ 中野副理事長

本日、午前中に行われた住民セッションで学生さん、静岡文化芸術大学の先生、若者たちとの取り組み、それから本当に若い人たちがこの三遠南信地域が好きで、住み続けたい、住みたい、帰りたいとの想いを聞きながら、勇気をいただきました。そのうちの1人の伊藤君は、東栄町出身で名古屋の大学へ行って、今、東栄町で若者地元会議をつくって、大学進学や就職のために地域を離れているけれども、東栄町に思いをはせており、どうしたら帰れるのだろうかと考えています。それは定住やUターンでなくても、定期的に帰ること、家族の面倒を見ることなど、いろいろなことを考えていこうとやり出した若者会議は、すばらしい取り組みだと思っています。そのあと私の知り合いに聞いたら、定住人口とか交流人口、人口の減少問題はあるのですが、もう一つ、関係人口というものをおっしゃる先生がいるのだそうです。それは観光客でもなく、その町や村に定住しているでもなく、でもその町や村が好きで応援している、あるいはその魅力を感じたら、勝手に宣伝するような人を関係人口といっているらしいのですけれども、その人たちもとて地域活性化には大事ではないかとの意見を聞き、なるほどと思いました。三遠南

信アミは、吉田さんの和合むらを応援し、東栄町とか、売木村などを本当に勝手に「いいところだよ」といって人にお知らせしているのです。そういう人も大切なのかなと、それが情報発信、情報の伝達として、三遠南信地域に、そういう人たちがいっぱいいたら、お互いにお互いの魅力を発信するのも大切かなと思うと同時に、そういう人が集まって情報をお互いに交換し、何か刺激をいただいて、新しいことを起こしていく場や仕組み作りが大事なのかなと思っています。

シリコンバレーは、アメリカのIT産業が集積したところですが、ITに限らず、シリコンバレーは人の集積地なのです。人が集まってお互いに刺激をしあい、情報を交換する中から、起業、新しいビジネスが生まれている場だと思うので、その三遠南信版のそれがつくれたらいいと思います。

コーディネーター

定住人口、交流人口ともう一つ関係人口としてみなしうる人たちもかかわってくる場づくり、巻き込みの仕組みをつくってみてはどうかとのお話でした。

では、吉田さん、御発言をお願いします。

和合むら 吉田氏

本日、いろいろと具体的なビジョンに関する御意見を出し合って、それを策定した後には新ビジョンを動かしていくために、阿智村の熊谷村長がおっしゃっていたように実動部隊を創設することは、本当にどうしてもお願いしたいです。

コーディネーター

最後に現場からの熱い声を伺いました。

新ビジョン策定は、10年前のビジョンの改定になりますので、ずいぶんと社会的な環境が変わっています。その中で、多方面

からの視点による非常に貴重な御意見をいただいたことに対して改めて感謝申し上げます。これ以外にも、いろいろな意見があるかと思うのですが、当初予定の時間となりましたので、技及び人に関するセッションを区切りとさせていただきます。

この後の報告会では、皆様からいただいた多様な、また具体的な意見について、時間の都合上、主な意見として整理した上で、私が報告をさせていただきます。

また、本日の御意見を新ビジョンの策定に生かしていくことをお約束いたします。その上で報告の具体的な内容、特に文言等については、本日この分科会のコーディネーターを仰せつかりました、私に一任ということで御理解いただければうれしいのですが、よろしいでしょうか。

それでは、皆様の御協力によって円滑でかつ、非常に内容の濃い、具体的な意見交換をすることができました。改めて御礼を申し上げます。

以上をもちまして、技・人の分科会を閉会いたします。

6 「風土」分科会 「新ビジョンの基本方針～プロジェクト」

出席者一覧

(敬称略)

役割	所属団体	役職名	氏名
コーディネーター	学校法人 法政大学	教授	高柳 俊男
発言者	森町	町長	太田 康雄
発言者	飯田市	市長	牧野 光朗
発言者	伊那市	市長	白鳥 孝
発言者	松川町	町長	深津 徹
発言者	天龍村	村長	永嶺 誠一
発言者	蒲郡商工会議所	会頭	小池 高弘
発言者	田原市商工会	会長	河合 利則
発言者	袋井商工会議所	会頭	水谷 欣志
発言者	大須賀町商工会	会長	服部 政美
発言者	南信州交流の輪	会員	福沢 千恵子
発言者	三遠南信住民ネットワーク協議会	世話人	平川 雄一



コーディネーター

法政大学 高柳教授

本日の「風土」分科会のコーディネーターを務めます高柳と申します。

最初に、なぜ法政大学の人間が、こんなところでこんなことをしているのか、自己紹介的なこととお話してから、本題に入り

たいと思います。

私自身がこの地域のことを研究しているのではなく、法政大学国際文化学部が学部として、南信州、飯田・下伊那地域で、特に留学生を中心に学生研修をしており、その担当者として、近年この地域に係わらせていただいています。法政大学は東京の中心部にありますので、法政大学へやってきた留学生はどうしても東京だけを見て「イコール日本」という認識を持って帰国してしまいます。東京とは違う場所で研修をして、日本を多面的に見せようというのが、この研修の主旨です。たまたま私がそのプログラムの立ち上げや引率、事前学習などを担当し、勉強しながら進めております。飯田・下伊那だけではなくて、なるべく三

遠南信地域を広く見たいと思い、多少時間を使って歩いています。この週末も、土曜日に佐久間の川合花の舞、日曜日は佐久間ダムの竜神祭りがあるということで、「よし、これも見てから会議に参加しよう」と思ったのですが、花の舞は雨でぐちゃぐちゃで靴がびしょ濡れになりましたし、竜神祭りは残念ながら中止となりました。なかなかうまくはいきませんが、自分自身の見聞も広めながら進めております。そんなことで、SENA の会議にも新ビジョンの策定に携わらせていただいております。

本年8月に出席した第1回新ビジョン策定委員会の場において、私は基本的な姿勢として二つ述べました。一つ目は、三遠南信地域の範囲を現時点の範囲が永遠のものと考えず、少し臨機応変に考えていきたいと申し上げました。それは、本年度から上伊那の4市町村が新たに構成員として加わっていますが、今後10年間に三遠南信地域やSENA も形が変わっていく可能性があり、それを柔軟に考えていきたいということです。

もう一つは、この三遠南信地域の中心は、浜松市、豊橋市、飯田市の3都市になるわけですが、同時に広大な中山間地域の現実から発想できるような係わり方をしたいと、その二点を申し上げました。

本日、これからの議論にそんな視点も入れて、短い時間ではありますが、忌憚のない意見交換ができれば幸いに思っております。

はじめに事務局から新ビジョンの「風土」の基本方針、あるいは推進方針の案を説明していただきます。

事務局

それでは、資料集の16ページをお開きください。

先ほど全体会で、新ビジョン策定に向け

た取り組みについて説明がありました。この分科会では、新ビジョンの基本方針「風土」の案について御説明いたします。

この基本方針3「塩の道文化創造圏の形成」とありますが、2020年に開催予定の東京オリンピック・パラリンピックに向けて国全体では外国人観光客の訪日数の増加などが見込まれる中で、この地域が数多く有している伝統芸能などの文化財、食文化や農林水産業、伝統工芸品など、特有の資源をどのように活用し、新たな価値づくりとして取り組み、保存活用を行うことで、塩の道文化創造圏の形成を目指したいとしています。

その下に、推進方針として二つ掲げています。

推進方針1「地域資源を活かした広域観光の推進」では、主要施策①「広域観光プロモーションの推進」、主要施策②「広域観光を推進するネットワークづくり」とし、それぞれの事業として、お手元にある資料に記載したものを想定しながら、取り組みの推進を図っていかうとしているものです。

次に、推進方針2は「地域資源の保存と継承」です。主要施策①では「塩の道文化の啓発と人材の確保・育成」、主要施策②「歴史・文化・自然資源の保全」を掲げています。資料に記載の事業等を想定しながら、現在検討が進められています。

資料集とは別に、A3の資料がございます。これは、これまでの新ビジョン策定委員会を中心とした議論で出た意見などを、今回参考の資料として用意したものです。ただいまご説明した基本方針などは、本日この場で決定するものではありませんが、皆様から、様々な視点で御意見をいただき、今後の検討に活かしていきたいとの趣旨ですので、よろしくお願いいたします。

コーディネーター

それでは、意見交換をしていきたいと思っています。

順番ですが、推進方針1、推進方針2について御意見を伺い、最後に「風土」全体について御意見を頂戴する順で進めていきたいと思っています。

まず、推進方針1「広域観光プロモーションの推進」についてです。

それでは、本年度からこの SENA に加入されました伊那市の白鳥市長、どうぞよろしくお願いいたします。

伊那市 白鳥市長

観光は、単独市町村だけで取り組んでも広がりがないので、飯田下伊那地域、上伊那地域、そして木曽地域が連携をして、観光の広がりを持たせたいと思い、今、伊那市も含め上伊那地域の市町村で DMO の立ち上げを準備しております。

伊那谷には、中央アルプスと南アルプスがあり、この山岳観光を十分に活用すべきと考えております。

現在、北アルプスには韓国からの登山客が非常に多くいます。南アルプスは国立公園とユネスコエコパークに認定されていますので、北アルプスへの観光客が徐々に南に流れて来ることを想定した準備をしています。それから、ジオパークに関しても、現在飯田市と一緒に展開をしておりますので、こうした資源を上手に観光に結びつけていきたいと思っています。

話は限りなくあるのですが、リニア中央新幹線と三遠南信自動車道それぞれの開通を想定していくという点においては、様々な展開があると思っています。

コーディネーター

確かに最近、登山を行う中高年層の方が多いですし、それから韓国を初めとする外

国からの登山客も多いですね。そのなかで山岳観光、あるいは温泉などを位置づけていくというお話がありました。

それでは、今度は、上伊那地域と接している下伊那郡松川町の深津町長よろしくお願ひします。

松川町 深津町長

広域観光ということですが、それぞれの市町村でも観光に力を入れており、それぞれの宝があります。

私どもの町は、果物の町です。果物狩りや、直営の温泉施設へ、年間で30万人ぐらい訪れていただいている地域で、これからさらに観光客を増やし、そして継続的に交流することで地域をつくり、産業を6次産業に結びつけていくことが大事だと思い、力を入れているところです。

ところで、飯田下伊那地域14市町村はそれぞれ観光に取り組んでいるのですが、それらを点と点を結んで一つの連携とし、地域としてお客さんを引っ張るにはまだまだ力が足りないのではないかと感じているところです。観光が地域づくりや産業に非常に波及効果があり、地域の活性化に効果があるということで着地型あるいは滞在型観光を目指して力を入れているのですが、それぞれの市町村の取り組みである点と点を結んだ連携をどうしていくか、これからの広域的な課題になるのではないかと考えています。

私どもの町も、昨年10月に DMO を立ち上げるための準備室を設けて、来年4月の設立を目指しているところです。なぜ DMO の設置を目指しているかというと、これまでも地域の交流人口を増やすために取り組んできたのですが、戦略的に物事を運んでいくことが欠けているのではないかと思います、現在 DMO を立ち上げて民間感覚を取り入れていきたいと考えております。

それから、一つの例ですが、下伊那郡には非常に小さな町村がたくさんあり、松川町は下伊那郡の北部に位置しております。それで、北部5町村で、年に1回ですが、地域内を回って一泊して、それぞれの町村のいいところを訪ねて歩く取り組みを、一つのきっかけ、起爆剤になればいいと思い、取り組んでいます。

コーディネーター

観光の場合でも、あるいは移住者の獲得などにおいても、どうしても自治体同士の競合、あるいは対象者を奪い合う面があると思います。協力することによって一泊の滞在が二泊になったり、地域が連携して広域観光をつくっていくためにも、例えば観光局を立ち上げたり、あるいは近隣の町村と一緒に取り組んでいくというお話が語られました。

近隣の市町村と一緒にあって、広域観光ルートをつくっていくという点では、次の蒲郡商工会議所の小池会頭からお話があるやに聞いておりますが、いかがでしょうか。

蒲郡商工会議所 小池会頭

蒲郡市は、豊橋市の隣にあって、東三河地域の一番西の端にある人口8万のまちですが、温泉地が四つあり、年間60万人程度の人が宿泊しています。

ラグーナテンボスができて300万人ぐらい集めるわけですが、それまで温泉に頼っている観光が中心でした。平成17年に観光交流立市宣言をいたしまして、観光という切り口で、オール市民でまちづくりをしようと観光ビジョン推進委員会ができました。それ以来、私も委員長として、いろいろな施策を行ってきました。

一つは、おもてなしコンシェルジュ検定です。当時はおもてなしやコンシェルジュ

という言葉もあまり盛んではありませんでしたが、現在はおよそ1,000名の検定を受けた方が、おもてなしコンシェルジュ倶楽部をつくって情報発信し、イベントのお手伝いをするものもできてまいりました。

もう一つは、「オンパク in 蒲郡」です。もともとの蒲郡の良さを知ってもらおうと、市民向けに行っていた観光交流ウィークを三河地域の一つのプラットフォームにしたいと考え、「オンパク in 蒲郡」、現在は「みかわ de オンパク」と名を変え、現在90ぐらいあるプログラムのうち、30以上は他市町村のプログラムです。蒲郡市は東三河地域の一員ですが、西三河地域にも接しており、現在、蒲郡市、岡崎市と西尾市が観光の組織を作り、スタンプラリーや「みかわ de オンパク」というプラットフォームに参加するようになりました。さらに本年は、三河地域ではありませんが、知多半島の地域にまで参加してもらい、愛知県の観光ルートとしてセントレアから三河地方へ観光客の誘客を図ろうとしています。愛知県には尾張地方と三河地方があって、三河地方は西三河地域と東三河地域があって、東三河地域は穂の国と呼ばれていて、東三河地域は三遠南信地域の経済圏の中の一つであるという見方をしていけないと、それぞれの地域で一生懸命に取り組んで、広域になればなるほど、日帰り観光から一泊観光、一泊観光から二泊観光と増えていくものですから、対象が広がると思うのです。広域観光ルートづくりにこういったプラットフォームが上手く乗っかっていくといいなと思ってやっております。

コーディネーター

オンパクの意味ですが、温泉博覧会ということでよろしいでしょうか。

蒲郡商工会議所 小池会頭

温泉博覧会ですが、どちらかというと、蒲郡は温泉地だからなのですが、名前を変えてもいいと思っています。もう着地型のプログラムが100個ぐらい集まったプラットフォームになっておりますが、実は、これを1年間通してやってほしいという話もあります。「オンパク in 蒲郡」から「みかわ de オンパク」に変更するときも「なぜ蒲郡のお金を使っているのにもかかわらず、蒲郡の名前を取り除いてしまうのか」と、蒲郡の人は散々言われましたが、僕からしてみたら、オンパクも取り去って、一つの市と市、町と町が、観光で連携するときに、協議会を設立しなくても、このプラットフォームに乗ればプログラムとして参画できるものを目指してやっています。

コーディネーター

豊橋駅の観光案内所に、オンパクの結構厚いパンフレットがいつも置いてあるような気がします。常滑も含めると、三河湾全体で連携しているといった感じでしょうか。

では、続きまして、袋井商工会議所の水谷会頭、よろしくお願いいたします

袋井商工会議所 水谷会頭

私の提案は、古くから三遠南信地域に伝承される花火文化という地域資源を生かした広域観光です。この地域は、花火文化発祥の地としまして、花火のふるさととも言えます。豊橋市の吉田神社の手筒花火が、花火の発祥という説もございます。またこの地域では、そういった伝統的な手筒花火から最新式のコンピューターで制御された打上げ花火まで、非常に多彩な花火行事、花火大会が開催されております。統計的に見ますと、打上げ花火の生産量では、長野県・静岡県・愛知県の3県は、常に上位5県

に入っており、打上げ花火の数も3県ともほぼ上位10県の中に入っております。そういったことを踏まえ、三遠南信地域それぞれの花火文化を地域資源として捉えて、広域連携で周遊観光を視野に入れた観光振興を推進してはいかがかという内容です。このことに関しては、私どもの活動の実績としまして2点ほど御紹介させていただきます。

一点目は、私の前任の豊田前会頭が、この分科会でも三遠南信花火サミットということを提唱しました。これにつきまして、私ども、本年2月21日に第1回三遠南信花火サミット in 袋井というものを開催させていただきました。内容につきましては、経済産業省製造産業局素材産業課長茂木正様に、「花火産業による地方創生と観光」というタイトルで御講演いただきました。こちらの素材産業課は、火薬の管理をされている御縁です。そして、パネルディスカッションとして、東三河、南信州、遠州、それぞれの伝統的な手筒花火等を行っていたい皆様のパネリストとして御参画いただきまして、その地域の歴史、文化のことについて、語っていただきました。

二点目は、本年8月11日に開催しました、私どもの「ふくろい遠州の花火2017」におきまして、新居の手筒花火の皆様に来ていただきまして、花火を実際に御披露いただいたということと、この三遠南信地域のそれぞれの地域から売店を14店出店していただきました。

そして、これらを踏まえたうえで、一つ御提案させていただきます。東京オリンピックまであと1,000日になりました。東京オリンピックは2020年7月24日から8月9日までの開催であり、まさに花火の一番のピークの時期です。三遠南信地域の花火文化の情報発信として、花火街道づくり、これは花火の技術が伝承した道の歴史、文化を

まとめまして、PR をしてはいかがでしょうか。そして、花火の行事、花火大会開催の情報の広域マップを作成し、来ていただいた方に、広域での観光につなげ、あるいは、花火工場の見学会なるものの開催、それからもう一つは、この地域で開催される花火大会と連携しまして、花火大会の共通観覧券の発行、あるいは、花火大会のスタンプラリーなどによる抽選プレゼントなどを企画してはいかがか、ということでございます。いずれにしても、東京オリンピックは、ちょうど花火の一番いい時期の開催ですので、なんとか関連づけられないかと考えています。

コーディネーター

確かに三遠南信地域は、花火が大変有名だと思います。私もこの仕事に携わってから、イベントごとにメールが送られてくるようなサービスにいくつか登録しているのですが、多く届く情報は花火です。ほんとに毎週いろいろなところで花火が打ち上げられており、あるいは自分たちで火薬から花火を作り、打ち上げるところもあるかと思います。花火工場の見学や広域マップの作成、共通券の販売、スタンプラリーの実施等の具体的な御提案もしていただき、ありがとうございました。

では、続きまして、これまでは市町村と商工会議所の立場からのご発言でしたが、これから5番目に住民団体の代表である南信州交流の輪の福沢千恵子さん、お願いします。

南信州交流の輪 福沢氏

私共の団体は、飯田・下伊那地域の自然環境や伝統文化などの地域資源を学び、継承していくことを目的にして活動している団体です。私共の活動の一端をお聞きいただきながら、今回の場を持たしていただき

たいと思っています。

飯田・下伊那地域は、国の重要無形民俗文化財に指定されている坂部の冬祭や新野の雪祭など、伝統芸能の宝庫です。また地域色豊かな食文化が大切にされている地域でもあります。そういった中で、私たちは伝統芸能と食文化の融合を図り、2013年から南信州を代表する祈りの祭りとして伝統食・郷土食を取り入れていた「祭り街道弁当」、祭り弁に取り組んでおります。新春の五穀豊穡を祈願する、また夏にははやり病の退散、盆には祖先の供養、秋には五穀豊穡に感謝する、また冬には新しい生命の復活といういろいろなテーマにしながらお弁当づくりに励んでいるところです。「神楽舞御膳」は、新しい命をいただく生命誕生を表した12月、1月に行われる遠山の霜月祭、坂部の冬祭をテーマにして作り上げた創作膳です。また、1年の豊作と健康を祈願し、1月14日に新野の雪祭が行われております。それから地元では、どんど焼き等が行われるわけですが、五穀豊穡を祈願した「はつはる御膳」を自分たちで創作しながら、今つくり上げているところです。

これらのお膳には、私たちが考えた物語性のある新しい食文化をみんなで作くり出そうと創作しており、地域にある竹の食器を使っております。それからお祭りに即しましたように、坂部の冬祭、霜月祭を表しましたお釜を意味する大きな器の中に御飯を盛りつけ、伝統食のごった煮等も含めて、お膳の中につけさせていただいております。それからはつはる御膳ですが、新野の雪祭に幸法さんの冠の頭の上にお米が入っています。これが五穀米ですが、米・麦・稗・粟・大豆を五穀米として食の中に盛り込んでいます。また、どんど焼きのお餅、それから無病息災、七草粥等をこの御膳の中に配しながらつくり上げています。

私たちが物語性のある食文化をつくり出

すまでには、自分たちの地域を知らなければいけません。地域資源を知るための調査、研修を通じて、私共は学ぶ・体験する・交流する学習等をそのたびに開いております。祭りに供える食を調べ、飯田市美術博物館の先生にお願いして地域のいろいろなお祭りについてのお話をいただいております。それから、研修といたしましては、地元の料理講習家の方たちに講師をお願いし、調理実習等をする中で、自分たちの食文化を自分たちの言葉で語れる活動もしています。

私たちがつくり上げているお弁当は、単なる御膳や弁当ではなく、地域の資源である祭りの意味を盛り込んだ、祭りを理解できる形で、つくる側である私たちが意味を知った上で作れるような弁当を、これからも開発していきたいと考えております。

昨年、長野県のアンテナショップである銀座 NAGANO で祭り街道フェアを行いました。それから、祭り街道弁当のイベント等には、竹の器を活用しており、これは山間地で竹が余っているので、この竹を活用するために、天龍村坂部地区の方たちの協力をいただきながらつくった竹製品でございます。

こういった地域の資源、活力を利用しながら、これからも地域の中でお弁当づくりに励んでいきたいと思っておりますし、また私たちだけでは手の足りない分、今地域で地域おこし協力隊の方たちが力強く活動しておりますので、そういう方たちとも連携しながら、私たち地域なりの発信をしていけたらいいと考えております。

コーディネーター

この地域には、おいしいものがいろいろありますが、単においしいものを食べるだけではなく、それに伝統芸能などの文化等を絡めて、やはり物語性のあるものをつくっていききたいということだったと思います。

あるいはそれによって、邪魔者扱いにされる竹の利活用も図ることができ、あるいは地域おこし協力隊との協力関係などいろいろ広がっていく取り組みだと思って聞きました。

以上、5名の方からの御発言を聞いていて、連携が大事であると非常に強く感じました。素材は、山岳の自然、温泉、あるいは果物、お祭り、花火などいい素材が様々ありますので、それらをうまく広域でつなげていき、一地域だけではなく、三遠南信地域全体で共通して取り組むことの重要性が、多くの方から語られたと思います。

ここまでの議論に補足し、これだけは言っておきたいということはいかがでしょうか。

伊那市 白鳥市長

先ほど花火に関するネットワークの話がありましたが、伝統芸能も、長野県内であれば、坂部の霜月まつりや新野の雪祭、新野の盆踊り、遠山の霜月祭り、泰阜村の樽木（くれき）踊りがあったり、和合の念仏踊りがあったり、大鹿歌舞伎や、伊那市の中尾歌舞伎があり、あと古田人形や、今田人形など、山ほどあります。

このような地域は非常に珍しいので、インバウンドも含めた広域観光としては大変大きな可能性があるのではないのかと考えています。

コーディネーター

私も SENA には本年からの参加で、これまでの議論を十分承知しているわけではありませんが、記録などを読みますと、そういった個々の要素をつなげて日本遺産の申請に向けて取り組んでいくことが、これまでの議論の蓄積でもあるかと思います。

それでは、推進方針1について、ここで一区切りにしたいと思います。

では、続きまして、推進方針2である

「地域資源の保存と継承」について、天龍村の永嶺村長、よろしくお願いします。

天龍村 永嶺村長

私たちの村は、長野県の最南端にあります。天竜川に沿っていきますと、長野県と愛知県と静岡県の三県境にちょうど位置している村です。非常に人口が少なく、小規模な村で、さらに高齢化率も長野県で一番、全国でも二番目に高い村です。

推進方針2にある地域資源の保存と継承のうち、私からは特に主要施策1「塩の道文化の啓発と人材の確保・育成」に関しまして、具体的な提案をさせていただければありがたいと思っております。

先ほど、南信州交流の輪の福沢さんのお話や、伊那市の白鳥市長のお話にもありましたが、天龍村には、国の重要無形民俗文化財に指定されている「天龍村の霜月神楽」という祭りがございます。毎年1月3日から5日にかけて、村内三つの神社でそれぞれ一昼夜をかけて、厳粛に執り行われているお祭りです。

また、私共の霜月神楽と同様に、飯田市の上村・南信濃地区にあります遠山の霜月祭、阿南町の新野の雪祭り、そして同じく阿南町の和合の念仏踊りなど、国の重要無形民俗文化財に指定されているお祭りが、本当にこの地域には数多くあるわけです。

こうしたお祭りは、各地域でそれぞれ大切に守り、受け継がれているわけですが、現在一番大きな問題は、担い手不足です。これは非常に深刻な問題になっており、集落内に継承する若い人たちがいないために、高齢となった皆さんが一生懸命、必死になって、これを伝承しているのが現状です。それぞれ知恵を出し合いながら、小中学生や、あるいは高校生などの後継者の育成に務めていただき、あるいは企業や、住民の皆さんの御理解を得るためのセミナーやシ

ンポジウムを開催し、保存伝承に御尽力、また御苦労されているのが現状です。

その時期になると、地元出身者がお祭りのためだけに帰省して来ます。また、近隣の市町村同士、さきほど申し上げたように似たお祭りがありますので、お互いの近隣同士で助け合うことで、伝統を守り続けています。そもそも地元の出身者という若者自体も少なくなってきており、やっぱりお祭りを守っていくには担い手がどうしても必要だということで、私共の村では地域おこし協力隊に御協力をいただいて、一緒にお祭りを守っていただきたいと取り組んでいるところです。この地域おこし協力隊には、そのお祭りの担い手としてだけでなく、彼らが発信役となり、都会から興味のある人たちを呼び入れていただき、このお祭りに興味を持ってもらう活動も彼らにやっていただいています。

それから、天龍村の霜月神楽につきましては、踊りの所作などを記録したものが全くありませんでした。そこで、いわゆる先人の皆様から身振り手振りで教えていただいた、口頭伝承で受け継がれてきたものを、その地域の指南役がいなくなってしまうことでお祭り自体が継続できなくなってしまうことのないように、平成25年度に天龍村霜月神楽等資産化実行委員会を設立し、平成26年度と平成27年度の2か年にわたり資料を集め、そして最終的には資料集とDVDを作り、そうした貴重な資源や伝統を後世に残すための取り組みを行いました。これと同様に、阿南町の新野の雪祭りも、平成28年度に資料集とDVDが完成しました。

また長野県でも、特に南信州地域振興局が中心となって、平成27年度から南信州広域連合と連携し、南信州民俗芸能継承推進協議会を新たに設立し、保存伝承に力を入れているところです。

このように、天龍村だけでなく、各地の

無形民俗文化財、この三遠南信地域の貴重な資源というか宝、さらに誇りでもあると私は思いますので、当地域特有の伝統文化として、是非後世に伝えていく、そして、今一番困っている担い手不足、人材の育成に力を入れていただき、もっともっと地域内外に広めていくために、お互いの情報を共有しながら、一層連携を深めていかなければならないと考えています。

ぜひ、新しいビジョンの中では、こうした伝統芸能の保存伝承の観点も組み入れていただければありがたいと思います。

コーディネーター

天龍村は比較的小さな村ですが、本当に貴重な芸能がたくさんある一方で、高齢化による担い手の育成が課題になっているとのことでした。

実は、法政大学では飯田・下伊那での研修を遂行するために、ちょっとした文庫を設けているのですが、天龍村の祭りを記録した冊子とDVDは入れさせていただいております。

あるいは、いくつかあるお祭りの中でも大河内池大神社の例祭には、上伊那の田楽座さんが近年助っ人として入っていて、上伊那と下伊那の交流も随分進んでいるように聞いております。

では、次に、大須賀町商工会の服部会長からお話をお願いしたいと思います。

大須賀町商工会 服部会長

大須賀町という地名は、平成17年に掛川市と合併しましたが、商工会の名称としてまだ残っているものです。

地域資源の保存と継承ということで、大須賀地域では、横須賀の城跡・城址と三熊野神社が歴史的な地域資源です。この横須賀城跡は、言い伝えですが、徳川家康が武田家との合戦の際にとられた高天神城を奪回

する中で、大須賀康高公に築城させたといわれています。

また、三熊野神社は1,300年前から続く神社です。その中で、横須賀高等学校の郷土芸能部が、この三熊野神社の三社囃子と三熊野神社大祭の中で使われているお囃子を大切に継承しております。高校生以外にも、地域文化を保存する団体として遠州横須賀倶楽部があります。こちらの団体は、城下町の風情を残す町並みを生かした「ちっちゃな文化展」を本年度までに19回開催し、今、非常に地域に根づいていたものとなっています。

この大須賀地域につきましては、個人はもとより町全体が、1年を通してお祭りに始まり、お祭りに終わるという風土です。

この三熊野神社大祭で曳かれる祢里は、これは二輪車ですが、江戸時代の江戸天下祭から大須賀町に持ち込まれて以来継承されており、この図柄は、江戸中期の天下祭を描きました神田明神祭礼の絵巻にも載っている形と同じということもあり、最近二度ばかり、神田祭に招待をされ、銀座日本橋で2台の祢里を曳きました。1万1,000人、2,000人の地域から、約1,000人の人間が、そちらに応援部隊として参加し、非常に盛り上がりっております。

また横須賀高等学校の芸能部は、全国高等学校総合文化祭（総文祭）の郷土芸能部門において、三社囃子で非常に優秀な成績も修め、認められております。

お祭り文化が非常に発達しておりますが、あともう1点は、遠州横須賀凧というものもあります。これは、徳川軍と武田軍の合戦の際の通信に使われたとの言い伝えがあります。それを今、8種類ほどの形の凧を2月にあげております。これもいろいろな地域の愛好家と一緒にやっているように、大須賀町につきましては、昔からの文化の保存と継承に取り組んでいるところです。

コーディネーター

高校などでも郷土芸能部などをつくって、若者が加わって伝承しようとしているとのことでした。今、総文祭の話がありましたけど、総文祭は来年度長野県で行われるということで、多分本日いらっしゃっている長野の方は非常に興味を持っているかと思います。

法政大学の本年度の研修でも、長野県南部にある阿南高等学校の郷土芸能同好会の皆さんに新野の雪祭りを披露していただきました。

では、この推進方針2の最後になりますが、三遠南信住民ネットワーク協議会から世話人の平川さんをお願いします。

三遠南信住民ネットワーク協議会 平川氏

まず私の肩書きになっている三遠南信住民ネットワーク協議会の紹介をさせていただきます。当協議会は、三遠南信地域において地域づくり活動を行っている NPO や住民団体を会員とした一つの組織として2012年5月に発足し、5年経ちました。この場は、私は、東三河地域の代表として参加しています。本日午前中に住民団体が一堂に会する住民セッションを行い、分科会での発言内容や新連携ビジョンの策定状況について、意見交換をしてみました。その中で出た意見と、それまでに考えてきた住民団体としての意見を、この場で少し述べさせていただきたいと思います。

昨年度、国土交通省と連携して、「三遠南信祭街道いざないマップ」をつくりました。これは、三遠南信地域の祭りや民俗芸能、その沿線の地域資源や魅力を紹介しようとしたもので、「遠州・奥三河版」としてつくり、配布中です。配布は、三遠南信地域内の道の駅や高速道路等のサービスエリアやパーキングエリアをはじめ、三遠南信に関連したイベントなどでも配布してい

ます。様々な方にこのマップを手にとってもらい、活用されることが狙いで、三遠南信地域の伝統芸能などを紹介する試みの一つでもあります。現在は、東三河版と南信州版を制作する準備をしているところです。

住民ネットワーク協議会では、祭りや民俗芸能を地域資源の一つとして捉えることが重要であることを共通の認識としています。新ビジョン案の「主要施策②」の「想定される事業」として、この祭り街道マップを通じた取り組みは、まさに情報発信の一例といえると思います。多くの人たちに、民俗芸能を含めた地域資源に興味や関心を持ってもらい、また様々な角度から三遠南信の取り組みに協力と理解を得てもらうためにも、新連携ビジョンとも結びつけてもらえればと思います。

それから、「基本方針3」（風土）全体に関わることとして、白鳥伊那市長からもお話が出ました「日本ジオパーク」の取り組みも重要な事業の一つではないでしょうか。多くの方がご存じのように、三遠南信地域は、中央構造線の断層帯が通っており、たくさんのジオサイト（景観・地形・地質・歴史文化などで構成される見どころ）が存在します。現在、南信州地域の一部が日本ジオパークに認定されています。東三河地域はジオパーク構想推進準備会が設置されるなど、ジオパーク認定に向けた動きが進められています。遠州地域でも何らかの動きを示すことで、三遠南信地域でのジオパーク連携に向けた取り組みとすることもできそうで、広域観光の可能性も見えてくるのではないかと思います。これもまた新連携ビジョンの事業として提案させていただきます。

コーディネーター

特に、最後のジオパークの件は、白鳥伊那市長のお話とつながる話でおもしろいと

思います。

私が昨日滞在していた佐久間にも道路の脇のところどころに、そこが中央構造線の破砕帯であることを示す看板がありました。大鹿村や伊那市長谷地区にも、安康露頭など露頭が数カ所あります。

以上、お三方からお話を伺っていて、共通の課題がいろいろ浮かび上がってきたように思います。

例えば伝統文化では、それを保持してきた方が高齢になり、いかに若い人に継承していくのかという課題ですが、例えば、高校に郷土芸能部をつくったり、地域おこし協力隊の人に担い手として入ってもらったり、また内外に向けて宣伝することがあります。また、伝統芸能の保存継承のために、今のうちに文書や映像で記録を残すことに取り組んでいく必要がありますし、また、すでに取り組まれているとも思います。

遠州地域の図書館に行きますと、各地のひよんどり、神楽、田楽のDVDが所蔵されていたりもします。そうしたものを三遠南信地域の県境を越えて共有化し、体験なども共有化していくことが必要だと思いました。

もし、推進方針2に関連し、これだけは言い忘れたことがございましたら、どうぞ。

松川町 深津町長

様々な伝統文化や芸能を継承するために、それぞれの地域で大切に一生懸命やっているとお話がありましたが、もう一つの大きな広域的な課題として、伝統文化や芸能をいかに知ってもらう、見てもらう、体験してもらう、触れ合ってもらおうかという大きなテーマがある気がします。

三遠南信地域にある花火、お祭り、山、自然などをどうやって発信し、多くの人たちに知ってもらい、体験してもらい、滞在してもらうかが課題ではないかと思ってお

ります。



コーディネーター

広域的に文化的なものを発信し、多くの人に知ってもらうことも、新ビジョン策定委員会において議論したいと思います。

では、推進方針1及び2を踏まえ、最後に基本方針について御議論をいただきたいと思います。

では、まず森町の太田町長、よろしくお願いします。

森町 太田町長

私どもの森町は、遠州の小京都と名乗らせていただいております。静岡県内で小京都を名乗っているのは森町だけであり、おそらく三遠南信地域の39市町村のうちでも森町だけではないかと思います。

なぜ、遠州の小京都と名乗っているのかにつきましては、平成24年に正式に全国京都会議に加盟をさせていただきました。その加盟の条件が三つあるわけですが、そのうちの一つの要素を御紹介しますと、森町にも舞楽が伝えられております。小國神社、天宮神社、山名神社という町内にある三つの神社に伝わっている舞楽が森町の三大舞楽ということで、国の重要無形民俗文化財に指定をされております。

神楽と舞楽は、少しその由来が異なるかもしれませんが、いずれにしても連綿と守り伝えられてきたものでして、いずれも京都から伝わったものですが、地方だからこ

そ昔の形のままで残っているということが、最近の研究でもいわれています。

基本方針の「塩の道文化創造圏の形成」とありますが、森町を含め、それぞれの市町村が地域資源を十分にお持ちであり、またこれまでそれを守り伝えてこられて、更に発掘し磨きをかけて、発信されていらっしゃると思います。今、伺いまして、継承や発信の点には課題があります。

また、伝統芸能と一口で言いましても神楽や舞楽があり、また、温泉、花火またはジオパークなど様々な地域資源があると思います。それらをもう一度新たな価値つくりのために、新たな視点でジャンルごと組み合わせる必要があると思います。

SENA のウェブサイトで、自然系・人文系・産業系・交通系とカテゴリに分けて、いろいろな情報を検索できるデータベースがありますので、これらを活用しながら、それぞれのジャンルで地域資源を組み合わせ、新たな価値をつくっていく事も、一つの手法ではないかと考えます。

コーディネーター

確かに大事な要素がたくさんありますので、それをうまく組み合わせて、新たな価値づくりする際に、SENA のウェブサイトにある地域資源データベースなどをもっと活用していければとのお話がありました。

森町は、私は一度しか行ったことがないのですが、伝統的な建物などもいろいろあって、確かに小京都の雰囲気がありました。ただ考えてみたら、この地域には、どちらかというと無形の文化財が多くて、例えば重要伝統的建造物群保存地区（重伝建）は地域内にはありません。ないものねだりかもしれませんが、そういったものもあったらいいのかなと思いました。

では、続きまして、田原市商工会の河合会長お願いいたします。

田原市商工会 河合会長

基本方針において、「塩の道文化創造圏」とのテーマが上がっていきまして、その資料を読ませていただく中で、なかなか難しい気がいたしました。

戦国時代以前に、海から離れた地域へ塩を運ぶために必然的に塩の道が生まれてきたとは思いますが、しかし、私が知らないだけかもしれませんが、三遠南信地域内にどれほどのものが塩の道という形の文化遺産として残っているか、また塩の道という切り口で広域観光とどのように結びつけていくのかが、イメージできません。

例えば、私どもは渥美半島にある田原市で、農業の盛んな地域なのですが、ここは豊川上流にあるダムなどのおかげで現在の農業があります。豊川用水が来る前までは、ほとんど芋と麦、大根の生産ぐらいしかなく、農業の産地としては目立つところではなかったのです。しかしながら、豊川用水ができて、日本でも有数の農業の産地となった立場から考えると、「塩」よりも、「水と農」の切り口の方が、かえって想像しやすいと思います。

そして、広域に関する基本方針と、広域観光は接点があると思いますが、田原市はもともと海辺の町で、強い風を生かした凧や伝統的な渥美たくあん、それから、伊勢から人が流れてきて、昔は渥美半島の先端に高貴な身分の文化人が配流され、漁師の中で歌が残されていることがたくさんあるのです。同じことが、この三遠南信地域にあると考えますと、塩の道が悪いわけではなく、イメージとしてはいいと思うのですが、具体的にどういう形で塩をテーマに広域の観光や文化をつなげていくのかイメージが湧かなかったものですから、私はかえって水に限定したほうが、地域をつなぎやすいと思います。

コーディネーター

最後になって、かなり本質的な話が出てきました。お手元に、事前に意見を取りまとめた資料があります。その資料の風土分科会に関連する部分の最初に、ある自治体から「塩の道は南北軸の起源であるが、地域内全ての取り組みが塩の道に関連するとは限らないため、基本方針の表現としてはもう少し幅広に掲げたほうがよい」との意見がありまして、私も同感です。

もともと、天竜川あるいは豊川流域圏との言い方もしていたと思うのですが、この基本方針3では、塩の道とかなり限定しています。では、塩の道とはどこなのかという学術的な議論もあるでしょうし、あるいは塩の道は日本全国のいろいろな地域にあると思いますので、私自身もちょっとひっかかっているところです。

では、いよいよ最後になりますが、飯田市の牧野市長、よろしく願いいたします。

飯田市 牧野市長

「塩の道文化創造圏」という言い方は、違和感がある方が多いかもしれません。もう少し広く捉えて、むしろ「三遠南信流域文化圏」と言い切った方がわかりやすいかもしれません。これを新しいビジョンにどのように盛り込むか、これからの検討課題として考えていってもらえればと思います。

本日の議論を聞いて、やはり伝統文化芸能がこの地域は非常に盛んで、そういったものはこの地域として誇り得るもので、また情報を発信し、観光にも十分活用ができるのではないかと、前向きに捉えられていることが多かったかと思います。

一方で、担い手不足の話も出ておりました。実際、例えば、飯田市の遠山郷の霜月祭でございますが、10年ほど前は、12月1日から始まって、大体冬至のころまで、どこかの神社で霜月祭が行われていました。

霜月祭は、季節の巡りと絡んでいるわけでもあり、本来は冬至のお祭りといってもいいくらいの意味合いもあると思います。今では冬至の日まで祭りが続けられるかといったら、実は15日で終わりです。それ以上は続けられないといった状況になっています。

これはもう、人口減少、少子化、高齢化が進んできていて、伝統文化芸能の保存継承は、本当に待ってられない、喫緊の課題だと感じています。

当然、担い手確保の問題もありますし、保存をするための資金の確保も考えていかなければいけません。もう一つ、本日はあまりはっきりと言及されなかったかもしれませんが、伝統文化芸能の本質的な価値を、どういった形で保存継承していくかも、合わせて考えていく必要があると思っています。

私は、学術的な分野にまで及ぶような議論には行政が積極的に関与しなければならないと思うのですが、南信州広域連合においては、その第一弾として平成27年から28年の2年間に渡りまして、新野の雪祭りを中心にその実態調査、聴き取り調査、それから映像記録を行いました。この新野の雪祭りの記録映像は、DVD化されて、市販もされていますが、これには飯田市美術館が中心的な役割も果たしています。こういった実際の伝統文化の記録という分野におきましては、学術的な意味も含めて、行政の果たす役割が非常に大きくなります。それも、おそらく単独の市町村だけではなくなかなか難しい課題だと捉えていますので、そういったことができるリソースを有するところと協力して取り組み、これを三遠南信地域全体にどのように広めていくかが課題だと思います。阿南町の雪祭りの学術的な調査報告を行うことができたのは、南信州広域連合という事業体があったためでは

ないかと思っていまして、これを三遠南信地域全体に波及させるためには、行政間での議論がもう少し必要だと思います。ちなみに、現在、第二弾の調査を進めておりまして、平成29年度、30年度の2年間で、清内路の花火文化に関する調査に、取り組んでいるところです。

もう一点、こういった伝統文化芸能については、観光面での活用は非常に重要ですが、毎年霜月祭に行ってしまうことは、観光客がやって来ないところではもっと来てほしいという考え方を持つところがある一方で、観光客がこれ以上やってきたら祭りの存続、維持が困難と考えるところもあります。見物にやってきてくれる人がいることはいいのですが、その地域に残る伝統芸能の保存継承のためにお金を落としてくれる仕組みにはなっていません。これは伝統文化芸能が残る地域では全国的によくある話で、地元の皆さんがお金を出し合って保存しているのだが、観光でやってくる皆さんは、それにただ乗りしているという状況がどうしても起こりがちで、そうならないようにどうしていくかを考えていくことが重要であり、是非こうした伝統文化芸能の保存を三遠南信全体でやっていければと思っています。

なお、日本遺産の取り組みは、この「風土」分科会でずっとやってきているのですが、現在の文化庁の日本遺産の登録方針は、高柳先生がおっしゃったとおり、有形の文化財が中心です。三遠南信地域において不利であると思うのは、この地域は無形民俗文化財が非常に盛んなものですから、この地域を日本遺産に登録するためには、こういった形で無形のものと有形のものとを組み合わせるやっていくかが課題だと思っています。知恵を絞りながら果敢にチャレンジしているところです。

コーディネーター

飯田市長には、伝統芸能などの本質的な価値、学術的な研究に行政として、特に南信州広域連合としてどう係わっていくのかということも含めて、行政の立場からおまとめいただいたというふうに思います。

これまでの議論に追加して御意見はございませんか。

蒲郡商工会議所 小池会頭

分科会の議論を伺いながら、この三遠南信地域の風土とは何だろうかと、分科会に参加しながらいつも思います。例えば、ブルゴーニュのワインを見たとき、ニューサンジョルジュのワインを飲んだら、その風景が臉に浮かぶとある解説者が言っていましたが、要するに三遠南信地域のお祭りなどを訪れた人が、この地域の風土をどういうふうに感じられるのかと考えることが、とても大切だと思います。それは、言葉やいろいろなもので説明して感じられるものではないと思うのです。

だから、よくワインだとテロワールといいますが、その土壌の特徴や気候などがワインの特徴として出てくるように、一生懸命、ワインづくりをしています。三遠南信地域の風土をブランド化するためには、お祭り等からどういうふうに吸い上げていくかを真剣に考えなければならないし、それをやるのが誰なのかと主体づくりをしっかりやらないと難しいと思っています。

ぜひ「風土」の分科会なので、そういったテロワール、地域のものが思い浮かんでくるようなことを検討したらどうでしょうか。世界中にはいろんな観光地があって、受け入れる側は自分たちが一番だと思っていますが、やって来る人たちはいろいろと比較し、順位付けし、選択します。だから、この三遠南信地域がどんな地域として、どの辺の観光地とどういった特徴で競うのか

もきちんと整理しなければ、自己満足に終わってしまう感じがします。誰かがしっかり中心になってその整理を進めて行って、三遠南信地域をきちんとブランド化することが必要です。蒲郡が一番困っているのは、例えば三河でオンパクやると、様々なプログラムが100程度出てきます。しかしながら、このプログラム数では「三河 de オンパク」というプラットフォームをブランド化することは、非常に難しいのです。それでも、プラットフォームになり得ると思い、一生懸命やっています。

だから、三遠南信地域の風土のブランド化を推進する組織や、中心になる人が必要だと思います。

コーディネーター

貴重な御指摘として伺っておきたいと思っています。

皆様から非常に貴重な御意見をいただきまして、おかげさまで無事に終わることができました。

この後、報告会があります。短い時間であるため、とても言い尽くせないと思いますが、整理した形で報告させていただきます。その取りまとめは、事務局並びに私に御一任いただけたら幸いです。

これをもって閉会いたします。

7 「山・住」分科会「新ビジョンの基本方針～プロジェクト」

出席者一覧

(敬称略)

役割	所属団体	役職名	氏名
コーディネーター	国立大学法人 豊橋技術科学大学	理事・副学長	大貝 彰
発言者	豊橋市	市長	佐原 光一
発言者	中川村	村長	宮下 健彦
発言者	平谷村	村長	小池 正充
発言者	根羽村	村長	大久保 憲一
発言者	下條村	村長	金田 憲治
発言者	売木村	村長	清水 秀樹
発言者	泰阜村	村長	松島 貞治
発言者	喬木村	村長	市瀬 直史
発言者	豊丘村	村長	下平 喜隆
発言者	志多ら (NPO 法人てほへ)	代表	大脇 聡
発言者	公立大学法人静岡文化芸術大学 文化政策学部文化政策学科	准教授	船戸 修一
発言者	公立大学法人静岡文化芸術大学 文化政策学部文化政策学科	学生 (1 年)	中野 七海



コーディネーター

豊橋技術科学大学 大貝理事・副学長

「山・住」分科会のコーディネーターを務めさせていただきます豊橋技術科学大学の大貝と申します。よろしくお願いいたします。

先ほどの全体会から既に御承知と思いますが、今回のサミットにおいては、第2次三遠南信地域連携ビジョン策定に向けての

議論がテーマとなっております。この分科会でも、まず、「山・住」に関する第2次ビジョンの基本方針や推進方針について事務局から説明をお願いして、その後、皆様から御意見をいただきたいと考えております。

早速ですが、事務局から第2次ビジョンの概要について、説明をお願いします。

事務局

「山・住」の基本方針等について、説明をさせていただきます。

本日配付しました資料集の17ページを御覧ください。

現行のビジョンでは「山」と「住」、二つに分かれていたものを新ビジョンでは「山・住」として一体とすることをお示しています。

これまで「山」と「住」に関する取り組みは、三遠南信災害時相互応援協定の締結や豊川水系総合開発促進期成同盟会などの水源林保全に加え、転入人口増のため、都市部から中山間地域への移住・定住促進など、安心安全で住み続けたい地域を目指し、広域的な取り組みを進めてまいりました。

新しいビジョンでは、こうした流れを踏まえた上で、まず、圏域全体の生活環境の維持・向上、それから、自然資源の利活用、さらには圏域内外での補完、これらが本地域で暮らしていくために必要であると考え、「安全安心な広域生活圏の形成」を基本方針の案といたしました。

そして、推進方針案として、一つ目は、「流域定住推進モデルの形成」とし、主要施策として、「移住・定住事業の広域的連携の推進」、「広域的な健康づくり事業の推進」、「広域的な防災体制の充実化」、「公共施設等の有効的な広域利用」、以上、四つの施策を掲げ、上流域と下流域がそれぞれ特徴を活かし、足りない部分を補うこ

とで生活環境を整備する、これを流域定住モデルとしていきたいというものとなります。

また、二つ目の推進方針の案は「自然環境の循環利用の推進」とし、主要施策として「流域自然資源の広域的な有効活用」、「環境保全活動の推進」の二つを掲げ、地域の森林資源の積極的な活用や再生エネルギーへの活用など、圏域全体で自然資源を循環利用することを推進していくものです。

これらの基本方針や推進方針は、あくまで案であり、主要施策や想定される事業につきましても、事務局が今回議論を深めるために事例として提示させていただいているものですので、本日の議論などを踏まえ、今後、見直していくことを御理解ください。

コーディネーター

これから意見交換に移ります。

以後の進め方についてですが、事務局からの説明にもありましたように、まず、推進方針1「流域定住推進モデルの形成」、続いて推進方針2「自然資源の循環利用の推進」について、それぞれ順番に御意見をいただきたいと思います。そして最後に「山・住」の基本方針について、御意見を伺いたいと考えておりますので、よろしくお願いします。

それでは、まず、推進方針1について、「流域定住推進モデルの形成」です。

私から簡単に説明させていただきます。この「流域定住推進モデル」という言葉ですが、生活環境の維持や向上を図って、この流域内で補完し合うとともに、流域外からの交流人口を増やす仕組みであると考えています。

例えば、移住・定住や健康づくりの促進、防災体制の充実、それから、公共施設の相互利用といった取り組みをエリア内で一体的に進めていきます。そうすることによっ

て安心して住み続けられる地域を形成していこうという考え方だと思います。

そこで、まず第1巡目として、推進方針のこの「流域定住推進モデルの形成」の事業として、どのような取り組みが考えられるのか、皆様から御意見をいただければと思っています。

今回、学識経験者及び学生の立場から、静岡文化芸術大学の准教授である船戸先生と、静岡文化芸術大学に通う学生である中野様に参加していただいております。

まずはお二人から御発言をお願いしたいと思いますので、よろしくお願いします。

静岡文化芸術大学文化政策学部

文化政策学科 船戸准教授

今、御紹介にあずかりました静岡文化芸術大学文化政策学部文化政策学科で教員をしています船戸といいます。

私は、社会学、その中でも「農村社会学」を専攻しています。現在、ゼミの学生と共に、フィールドワークとして浜松市の中山間地域である天竜区佐久間町の集落調査を行っています。佐久間町は、本日来られた長野県の方々にとっても、JR 飯田線を通じて、非常に親近感のある場所ではないかと思います。本日、発表いたします天竜区佐久間町の調査結果が本日の分科会に寄与することができれば、この上ない喜びに存じます。

静岡文化芸術大学文化政策学部

文化政策学科 中野氏

静岡文化芸術大学文化政策学部文化政策学科1年の中野七海です。

昨今、頻繁に耳にする「限界集落」という言葉の定義は「集落人口の半分以上を65歳以上が占め、社会的共同生活の維持が困難になる集落」を意味しています。この限界集落という言葉が使われる際、「限界

集落＝いずれ消滅する集落」というイメージが先行しがちです。しかし、人口が少なくなると本当に集落は維持できないのでしょうか。高齢化率が高くなると本当に集落は消滅してしまうのでしょうか。

そこで架空のX集落という例を用いて説明いたします。X集落は、集落の住民全員が65歳以上、高齢化率100%の限界集落とします。しかし、この集落を出た子供たちが近隣に住み、頻繁に集落に通い集落を支えているとしたら、今後も集落維持の可能性が大いにあると考えられないでしょうか。

限界集落論は、集落の年齢構成を重視しています。しかし、集落の存続性は、その年齢構成のみで判断せず、集落を出た子供たちがどのくらい存在し、どこに住んでおり、どのくらいの頻度で実家や集落に通い、どのような支援を実家や集落に行っているかという点から考えるべきではないでしょうか。私たちは、この考え方に基づいて、浜松市天竜区佐久間町で調査を行っています。

佐久間町は、2005年7月に浜松市と合併し、浜松市天竜区佐久間町になりました。佐久間町の人口は、1950年代半ばの佐久間ダムの開発に伴う外部からの労働者の流入によって突出した増加がありました。開発終了後、人口は急激に減少を続け、平成29年10月1日現在、約3,560人になっています。

私たちが調査を行ったのは、佐久間町 A 集落です。標高500メートルから600メートルに9世帯、17人が暮らしています。まず、この A 集落の全世帯を対象に聞き取り調査を実施しました。集落を出た子供・孫・ひ孫について「どのくらい存在するか?」「居住場所はどこか?」「実家や集落に通う頻度は?」以上の三点に着目し、調査をしました。集落を出た子供の数は12人、孫が17人、ひ孫が3人の合計32人です。この

32人が頻繁に実家や集落に戻ってくる「準村人」的な存在であると仮定すると、今後、A 集落を支えていく人は合計で49人いると考えられます。また、この49人の年齢構成は、現在住んでいる住民は50代から80代、集落を出た子供は10代から50代です。孫は10代から40代、ひ孫は全員10歳未満でした。この4世代を合計すると、働き世代の多い構成になると考えられます。

次に、集落を出た子供たちの居住場所、帰省回数について見ていきます。今回、発表時間が限られているため、孫やひ孫のデータは、割愛させていただきます。A 集落を出た子供の居住場所についてですが、子供12人のうち、佐久間町内2人、天竜区以外の浜松市4人、浜松市以外の静岡県西部1人、愛知県東三河地域2人です。愛知県東三河地域までを「車で2時間以内に佐久間町へ移動可能な場所」とすると、約8割がそのような地域に暮らしています。愛知県東三河地域に2人いることからわかるように、この JR 飯田線沿いに居住場所が広がっていると考えられます。

次に、この子供たちが実家に通う頻度についてです。合計12人のうち、年3回から4回までが1人、年5回から6回までが4人、年11回以上が7人という結果になりました。約6割の子供が年に11回以上、月1回以上の頻度で実家に帰っていました。

聞き取り調査の結果についてまとめると、集落を出た子供や孫は多数存在しており、集落を出た子供の約80%が車で2時間以内に佐久間町へ移動可能な場所に居住しています。年に1回も集落に通わない子供はいませんでした。このことから、集落を越えて家族関係が維持されていると思います。

終わりに、今後の集落維持に向けて、私たちは集落を出た子供や孫の存在が非常に重要になってくると考えています。現在、この集落を出た子供や孫は、帰省してもほ

とんど実家とのかかわりしか持っていないせん。この子供や孫が実家だけでなく、集落ともかかわっていく必要があると考えています。具体的には、集落行事とかかわること、共同作業や祭礼に参加することで、人手不足の解消、活気づくり、文化の継承がなされます。また、近くに住んでいる交通手段のない高齢者のため、実家だけでなく、近所に住んでいる高齢者のために、例えば、病院へ送迎支援をする、買い物の支援をするなど地縁・血縁に基づく相互扶助、助け合う関係性の創出がなされると思っています。

これらの実現のためには、集落に子供や孫が帰省する回数を増やすこと、集落住民と集落を出た子供や孫との人間関係をより濃く深いものにしていく必要があります。これらの達成が今後の集落維持の鍵になるのではないのでしょうか。

急ぎ足になってしまいましたが、以上です。御清聴ありがとうございました。

コーディネーター

単なる年齢構成や人口の数で考えるのではなくて、家族とのつながりという視点から集落の維持を考える大変興味深く新しい考え方に、私としても初めて接しました。

続きまして、今の「定住推進モデルの形成」について、下條村の金田村長から御発言をよろしくお願いします。

下條村 金田村長

私からは、県境域を越えた婚活事業の推進を提案したいと思っています。

我が村も少子化、高齢化、それから、人口減少に対応すべく、移住・定住を積極的に展開しているところでございます。このような状況の中で、広域的に取り組むことによって、より効果が上がる事業の一つとして、婚活事業の推進を提案させていただきます。

まず、下條村の現況をお話させていただきます。人口は、平成20年に4,200人程度だったのですが、平成29年4月1日では3,850人程度と減っております。特に0歳児から9歳児の減少が目立っております。例を挙げますと、中学生が141人、1学年だと47人になります。保育園が90人で、1学年30人、平成28年度の出生数は19人で、減り方が非常に大きいです。

その一つの原因といたしまして、独身者が非常に増えていることが挙げられると思います。未婚者に関する調査を平成29年4月1日時点で行いました。30代から50代は1,227人おり、そのうち275人が未婚者です。男性の未婚者は165人で男性全員の26.6%に当たります。この若者たちが結婚すれば、大分違ってくるのではないかと感じております。

国立社会保障・人口問題研究所が、第15回出生動向基本調査の結果概要をおよそ2年前に発表しました。その中の18歳から

34歳までの未婚者に対する調査で、結婚の意志がある者の割合は男女とも約9割はあるのです。泰阜村の社会福祉協議会が行った「突撃！田舎にお嫁に来ませんか？」という越境して取り組んだ事業に私どもも加わらせていただき、こういう交流が非常にいい結果を生み、独身者をなくしていくのではないかと考えております。

コーディネーター

県境を越えて、自治体の枠を超えて婚活の事業に取り組んだらどうかということだと思います。

それでは、次に、売木村の清水村長さんから、取り組みの事例をお願いします。

売木村 清水村長

売木村では、本年度から移住交流支援対策室を立ち上げました。移住ガイド制作や空き家情報・求人情報の発信のほか、10年以上続いている「うるぎ米育て隊」やLOHAS 体験 Stay を通じて、皆さんに「うるぎファン」になっていただく取り組みをしています。現在は、昭和50年代につくられ、もう使われなくなっている岩倉キャンプ場を「うるぎファン」の皆さんの力を借りて再生していこうという事業を始めています。この事業は、村は口を出さずにお金を出すことにより、キャンプ場を再生してもらい、今度は拠点として次の展開を期待しながら、村の再生に取り組んでいます。

また、愛知大学、愛知東邦大学及び産業能率大学と交流しており、特に愛知大学には村へ入って研究し、発表していただいておりますので、それを村づくりに活かしていきたいと取り組んでおります。

また、平成26年に「愛に県境はない！田舎 de 本気のムコヨメ探し」という婚活イベントを、愛知県と長野県の5町村が構成する愛知・長野県境域開発協議会で開催

しました。各町村10名募集したところ70名の応募があり、抽選で50名に絞らせてもらい、イベントを行いました。5町村で取り組むことは、非常にインパクトもあり、発信力がありますので、広域的な取り組みをしていくことがいいのではないかと考えております。

また、当時、地域おこし協力隊の皆さんが作った新聞が今でも続いており、毎月15日に「南信州 LIVES」という名称で発行しています。こういった地域おこし協力隊同士のつながりも、これからの連携には必要になってくるのではないかと考えております。

コーディネーター

続いて、豊丘村の下平村長、よろしくお願いします。

豊丘村 下平村長

南信州広域連合の全体で取り組んでいるお話をさせていただきたいと思います。

皆さんは聞いたことがないかもしれませんが、ダーチャという菜園つきの、いわゆる郊外型住宅がロシアにございます。これは、旧ソ連の国民全員がいわゆるサラリーマンだったわけですが、お金が配れないので、モスクワあたりなどの都市部の住民を中心に、車で1時間や2時間のところに1アールから6アールの土地を与え、自分で食べるものは自分でつくることから始まったシステムだということです。背に腹は変えられずに始めたこのシステムが、現在、ロシアで機能し始めまして、家族が休日になるとそこへ耕しに通いながら、自分たちのつくったコテージに泊まり次の日に帰る、あるいは夏休みの長い期間滞在しています。そのことによって、家族のコミュニケーションや都市部の、いわゆる自然が少ないことによって疲弊する心をうまくクリアして

いる点に南信州広域連合として目をつけまして、今年7月に、私が代表して樺太に現実のダーチャを見に行ってきました。

日清オイリオグループ株式会社のマーケティングフォースジャパンという会社が中心になってその開発をやっているわけですが、既にそのマーケティングフォースジャパンでは、山梨県北杜市に会社のダーチャをつくり、月に1回、社員はそこに耕しに行ってくるということで、最初のころ、みんな本当に嫌がったらしいですが、始めてみるとすごくおもしろい。みんなと一緒に耕し、宿泊し、酒を飲んで騒いできますから、帰ってくると目が生き生きとしているということだそうです。

南信州広域連合では、一村一企業ダーチャをまずやるぞという流れで動き出しているわけですが、私が現地へ視察に行ってきたために、ダーチャ1号店を豊丘村で取り組むようにとみんなに発破をかけられています。今後、三遠南信自動車道やリニア中央新幹線の開通により都市部と非常に近くなります。都市部のIT関連企業などを中心にダーチャを通して、都市部の会社や働いている方々との連携をとっていきたいと考えています。

一説によると、かなり多くの会社、特にIT関連などは、7、8%の方が心を痛めているということを聞いております。かつては、偏差値が高い学校に入れば将来有望と言われてきましたが、最近では、自然とともに生活しないと本当に強くて優秀な子供はできないという流れになっています。ダーチャを何とか具現化しながら、交流人口を増やし、地域への定住そのものにつなげられたらいいのではないかと思います。南信州広域連合が窓口となっておりますので、いよいよ具体的に動き出した折には、ぜひ会社を紹介していただき、しっかりと連携をとりながら具現化できたらと考えており

ます。

コーディネーター

企業版のダーチャをこれからやっていきたいということでした。

それでは、喬木村の市瀬村長から、お願いします。

喬木村 市瀬村長

地図を御覧いただくとお分かりのとおり、喬木村は三方を飯田市に囲まれた中で一生懸命頑張っている村です。リニア中央新幹線は、ほとんど地下を走るのですが、この喬木村と飯田市の区間が明かり区間となり、リニア中央新幹線を地上で見られる貴重な場所となります。村の中心地までリニア中央新幹線の長野県駅から車で5分という直近の地にございますので、ぜひ皆さんにお越しいただければありがたいと思っております。

私からは、豊丘村と同様に、喬木村の課題というよりも、中山間地域の担える役割についてお話をさせていただきます。少子高齢化や人口減少の中で、どこの中山間地域も遊休耕作地が増加し、また、学校の統廃合等により公共施設の遊休施設が増加している状況の中で、流域定住推進モデルの基本方針に沿って何ができるか考えてみますと、どこにいても高速で情報のやりとりができる社会において、空いた施設、あるいは空いた土地を利用してコワーキングスペースの提供やサテライトオフィスの誘致、テレワークの働き方等々は、この地域でも都会と遜色なく仕事ができる環境が用意できるのではないかと考えております。平時には、遊休施設は週末リゾートや二地域居住の拠点とし、遊休耕作地はストレス解消の農作業、あるいは自然と親しむ場としてお使いいただければ、地元の風景の維持にもつながってくると思っているところです。

都会の皆さんができるだけ心配なく移住をしていただけるように、ICTを活用した先端教育の取り組みをしており、喬木村でもオーストラリアの学校とテレビ会議システムを通じて交流を行ったり、あるいは沿岸、海辺の町と交流ができたり、子供たちができるだけグローバルな環境の中で人間形成ができるように努めているところです。

また、こうした施設を整えることにより、特に、この東三河、遠州といった大規模工業集積地における南海トラフ地震などの大きな災害が、万が一発生したときには、三遠南信自動車道を活用していただくことによって、危険にさらされる沿岸部の皆様の安心安全な避難地として場所が提供できるインフラ整備を行っていくことが、我々中山間地域として最も自信を持って担うことができる部分だと思っております。

コーディネーター

ここで、推進方針1「流域定住推進モデルの形成」に関する御意見については、一区切りとさせていただきます。

今回、この分科会に参加されている自治体は、豊橋市を除いて、南信州の自治体ということが気になるころではありますが、感想を申し上げます。

私は、本学、豊橋技術科学大学と愛知大学、そして、三遠南信地域の豊橋、浜松、飯田を中心にした自治体等と一緒に、平成18年から平成22年までの5年間、県境をまたいだこの地域の活性化のための戦略プロジェクトづくりを行いました。中山間地域の活性化を大きなテーマとして、いろいろ考え、いろいろなことをやりました。その時代から、もう10年近くなりますが、中山間地域の将来が、その当時から比べると、かなり先が見えてきているというのが印象です。

先ほど婚活事業の取り組みもありました

し、最近の ICT、いわゆる情報通信技術の飛躍的な発展によって、テレワーキングなどどこにいても仕事ができる状況が生まれつつあります。我々の大学でも、大学の学長が東京に集まらずに、それぞれの大学にいて会議をするなどということも日常的に既に行われています。そうした中、自然環境が豊かで、子供の教育環境という意味でもプラスになるであろう中山間地域の可能性は大きいのではないかと思います。今、それぞれの自治体で非常に活発な取り組みがなされていると伺いました。推進方針1は、流域定住推進モデルということで、流域ということを考えると、今、どちらかというと上流域の話ばかりでしたが、上流と下流がどう連携するかという視点も重要な観点かと思っています。



コーディネーター

それでは、続いて、推進方針2「自然資源の循環利用の推進」について、御発言をお願いしたいと思います。

それでは、最初、志多らの代表の大脇様より御発言をお願いいたします。

和太鼓集団志多ら 大脇氏

私、東栄町で活動していますプロの和太鼓集団志多らの者です。

本日は、三遠南信住民ネットワーク協議会の住民団体の代表として、ここへ来させていただいております。志多らが立ち上げ

た NPO 法人てほへが地域おこしを行っております。

なぜ和太鼓集団が地域おこしをするかというと、私は、芸能文化は人と自然、また、人が暮らしていく中で過去と現在と未来を結ぶものであり、人が人らしく生きるために、とても大事なものだと思っています。そういった芸能文化をしっかりと伝えながら地域づくりをすることが大事だと思い、NPO 法人を立ち上げました。

本日午前中に開催された住民セッションにおいて、学生さんたちの活動の報告や中山間地で起きている風、若い人たちの新しい活動などの報告がありました。そういう新しい風を今後どのように調整し、人、組織、機能、プロセスを潤滑に進めていくかという点が、これから大事なことであった話がありましたので、御報告させていただきます。

それから、自然資源の循環利用の推進ということで、私も舞台に立ってばちをずっと持っていましたが、チェンソーで山の木を切って作っています。田舎で暮らしていると、特に東栄町だけなのかもしれませんが、町外に出られている方の土地が山のようでありまして、それが誰の土地かわからない、持主は自分の土地があることも知らない、そのために木を切りたくても手がつけられない、といった現状があります。こうなると新しい人たちが中山間地に暮らすためにやってきても、豊かな暮らしや自分たちの思いを進めていくのに、目に見えない障壁が出てきてどうしようもなくなってしまいます。特に土地のことだと住民だけでやるのも難しいし、行政が間に入るのも難しいのです。

空き家の問題も誰と話をしたらいいのか、どういう受け皿でやればいいのかということをやっていかないと新しい流れができません。

あと一言言わせていただくと、私たちもIターンで東栄町に住んでいますが、何に愛着を持って、その土地に暮らすのかという点が重要です。田舎暮らしに愛着を持っている人は、田舎暮らしが目的なので田舎ならどこでもいいのです。そうではなく、その土地の祭り、人、暮らしなどもう一個の愛着がないと、その土地に残って、そこで暮らし続けてくれないと思っています。愛着を持って暮らしてもらうためには、人のつながりを深める芸能や文化がすごく大事な要素だと思います。

コーディネーター

この森林の管理の問題も、この先どうなるのか大分心配していましたが、今、高齢化が激しいということで、それが現実になりつつあるという気がしています。

それでは、続きまして、根羽村の大久保村長からお願いします。

根羽村 大久保村長

昨日、NHK 大河ドラマの「おんな城主直虎」で井伊の山に松を植えるという治山事業の場面が出ておりました。どの地域にも人が住み続けるためには、特に日本は森林国ですので、きちんと山を管理していく必要があるのだと思います。

そういった中で、今までのような人工林一辺倒ではなく、きちんと森林をゾーン分けし、それぞれの地域が管理する必要があると思います。我々が住む家の近くの里山林、それから、木材を生産する機能を持つ生産林、そして、木材を生産するには少し経費がかかり、また、奥山だとか水源涵養林などがあるところを環境林として、きちんとゾーン分けし、それぞれの地域が山をつくっていくことによって、魅力ある地域、そして、安全な国土が形成されるのではないかなというのが一つの提案です。

もう一点は、その木をしっかりと使っていただくことが、その地域で経済が成り立ちながら、そして、山で森林管理、健全な山の管理につながります。公共建築は当然ですが、できるだけ民間でも木を使った建築やそういった機会をたくさんつくっていただくことが大事になろうかと思います。日本全国どこの国産材でも使えばいいという問題ではなく、この三遠南信地域の材木をお互いに使い合うことによって全体の地域ができていくということもあります。そこで重要になるのは、できるだけ木材を分離発注して地域材が使える仕組みをぜひつくっていただきたいです。それから、建築用材として使う以外のほとんどが山の中へ捨てている状況なので、それをいかにして付加価値をつけるかが重要です。例えば、木のおもちゃをつくって、子供たちを対象とした木育事業のきっかけをつくる、あるいは、エネルギーとして付加価値を若干でもつけて、村民の皆さんに通貨を支払ってもらい、地域でお金を回す仕組みも必要だと思っています。今回は森林のゾーニングの構築と、木材のカスケード利用を含めてしっかりと使うという話をさせていただきます。

コーディネーター

続きまして、泰阜村の松島村長から、よろしくお願いします。

泰阜村 松島村長

ここ7、8年くらい、里山も含めながら、村の木を景観も含めてきれいにするために、木を燃やすバイオマス発電を村でやろうと考えているのです。泰阜村だけの規模では無理だと言われておりますので、そのような話をさせていただきたいと思います。

今年の九州北部の豪雨のときに、朝倉市や東峰村の流木が砂防ダムにたまった写真

が公開され、大変衝撃的でした。切り捨てられた間伐材や戦後に植林した木が伐期を迎えており、売れなくて切っていないという木が流れ出して、我が泰阜村でも同じことが起こるだろうと思っております。

根羽村のように立派な造林にして使えばいいのですが、そうでないところは自伐林業で、いわゆるC材といわれる軽トラック1杯何千円という、使い道もあまりない材木になります。長野県塩尻市に信州 F-POWER プロジェクトという大きなバイオマス発電所でC材を活用する計画が進められており、そこへ運べばいいと思っていましたが、そこまで運ぶのに約100キロメートルも距離がある状況です。

自伐林業でC材を燃やして、電気でバイオマス発電するような施設がこの三遠南信地域の山の多い県境地域のどこかにできれば、間伐した使い道のない木も活用できるし、山そのものもきれいになっていくのではないかと考えております。そういったものがこの県境地域でできないかというのが本日の意見です。

コーディネーター

使えない木を活用するということですね。先ほど言いましたが、私は、大学のプロジェクトでも、バイオマス、要するに汚泥とか動物のふん尿を利用して、この三遠南信地域でバイオマス発電をするとうまくいくのかどうかという検討はしたことはあります。でもなかなかシビアなところがあったような結果でしたが、可能性は追求すべきかとは思います。

次は平谷村の小池村長、よろしく願います。

平谷村 小池村長

平谷村は長野県の西南部に位置し、標高が平均で900メートル以上、年間の雨量が

2,800ミリメートル、非常に高冷で多雨地帯です。村の売りである夏の涼しさを利用して、観光による振興に取り組んでいる村です。

平谷村は、かつて基幹産業は農林業でしたが、山林の低迷と高齢化により他産業との兼業により生計を立ててまいりました。村では観光事業に活路を求め、昭和60年からスキー場、温泉等を整備し、高原の自然条件を活かした観光事業を核として、長期滞在型周年観光地として現在も事業の展開をしているところです。

また、村の施設を利用した合宿等の誘致も行いまして、各大学の吹奏楽部、日本相撲協会のある部屋による夏季の合宿等もやっているのが現状です。愛知三河方面からの利用客が90%以上を超える道路ですので、国道の整備等をお願いしているところです。

財源については、非常に高冷地であり、水田等ではなかなか採算がとれない状況で、現在では高冷地に適したトウモロコシ、トマト等をブランド化しており、そういったものを利用してのスープ等の特産品を開発しているところです。また、休耕田を利用して酒米をつくり、村の特産の酒といたしまして、最近では割と脚光を浴びています。今年からはスキー場等の平地を利用いたしましてドローンを活用する練習場等の誘致をいたしました。これが将来、村の災害並びに観光事業につながればということで、今、力を入れて進めています。

人口500人弱で高齢化率が39%前後の村です。三遠南信地域全体にこの地域のPRを行い、人口増加等を図っていききたいという願望を持って、今、進めているところでございます。

コーディネーター

推進方針2の「自然資源の循環利用の推

進」については一区切りとさせていただきます。

この三遠南信地域、面積で見れば、圧倒的にこの森林面積が占めるわけですし、当然ながら、その資源をどう活用するかということが重要な課題ですが、これは長年の課題であって、そう簡単にいかないものでもあります。ただ、一方で根羽村のような取り組みも行われていますし、他方で重要な問題としては、高齢化が進むことによって不在地主の方が増えて森林の管理がままならないという状況もあるかと思います。そういった中で、木をどうやって活用するかということがこれからの大きな課題だと思います。

皆様の御協力のおかげで、予定よりも早目に進行させていただいておりますので、最後、また御意見があれば伺いたいと思います。それでは、全体の基本方針について、御意見をいただきたいと思います。

最初に、中川村の宮下村長、よろしくお願いたします。

中川村 宮下村長

中川村は南信州地域の真ん中あたりに位置し、中川という名称のとおり、中央に天竜川が流れております。農業が中心の人口4,900人の村です。村には幾つかの働く場所や事業所はあるのですが、若い人は、多くが隣接の飯島町や松川町、駒ヶ根市等に働きに出ているという中山間地域です。

基本方針の地域資源を活用した定住対策についてですが、南信州の中でも、中川村は上伊那郡の南端で下伊那郡との境にあります。上伊那郡の多くの市町村は中京圏に近いと言えますが、北に位置する町村は東京圏にも近いこともありまして、中川村は遠州や東三河との関係を前提にした上で、東京や中京圏に向けて、上伊那広域連合の一員として、移住・定住促進など活動して

います。

上伊那地域では、経済界と協働し、若者の人材育成とか人材確保のための就職活動の準備合宿というものをやっています。

また、村に農業をやりたいという若者が結構やって来ます。こういった人たちは自分たちのことをよく研究していますので、行政があまり介在しなくても、移住先については自分で探してくる傾向にあると思います。私どものところでも、地域がなくなってしまう危機感を持っている集落がありますので、この集落と連携をして、これから地域の存続のためにどうにかしなければいけないと思っております。

次に、災害を想定した具体的な支援内容等について、お話をさせていただきたいと思います。東海地震、南海トラフの地震、並びに県内では伊那谷断層というものが走っておりまして、この地震を想定して、長野県では10ブロックに分けて、隣接するブロックを相互応援するという計画ができております。問題は南海トラフの巨大地震が起きたときには、この計画でいきますと、130人から180人は伊那地域でも亡くなるだろうと言われております。沿岸に近い東三河地域や遠州地域ではもっと大きな被害が出るでしょうし、お互いに被害が出たときに、想像は難しいですが、自分のことで手一杯で実際連携して応援をすることは難しいのではないかと考えています。東日本大震災のときに関西広域連合が応援に入ったような例が出ておりました。これは参考になるし、よく研究をしていく必要があると思います。

コーディネーター

それでは、この基本方針の全体について、豊橋市の佐原市長より御発言をお願いしたいと思います。

豊橋市 佐原市長

1人だけ海沿いの町、豊橋市からやってきました。私自身が山に暮らしたことがないので、ここで話せるのか心配しながら来ています。

まず、全体を通してと、そんな高尚なことをお話はできないので、まずは流域という概念で一体何ができるのか、そして、山に暮らす人たちに何が必要なのかということを考えてみました。暮らしに必要なものとして、衣食住がありますが、食べることと住むところには困らないだろうと思います。一番不安な点は働くところ、生きがいのある仕事を見つけ出せるかどうか、さらに、医療がどうなるのだろうか、そして、子供を産んで子育てする環境がどうか、いずれ子供も都会の高校へ行って、都会の大学へ行くのではないかとといったところが、心配なところかと思っています。ただ、今までのお話をお伺いして、私たちから見れば、喉から手が出るほど欲しい資源を皆さんはたくさん持っています。

豊橋市は、性格的に言うと、工業都市というより農業都市です。農家の後継者問題がある一方で、年収1,000万円以上の農家が多くいます。そういう人たちからしてみると、農地が欲しいという問題を抱えています。豊橋市のマーケティング戦略から言えば、気候の差を生かし、1年中いいものをつくりたいという目標もあります。もしかしたら、山でつくっているものを里でつくったら別の季節に出荷できるものがあるかもしれません。いろいろなことを考えていくと、非常に魅力ある農地と魅力ある雇用が中山間地域で確保できたら、とてもおもしろい農業ができると考えています。

それから、林業に関しては、あまり大きいことが言えるほどのことはしていないのですが、今、豊橋市の施設園芸、温室農家が、冬の暖房用にペレットストーブを使っ

ています。豊根村でつくっているペレットを使用していますが、もし重油が1リットル当たり80円、90円以上になればペレットのほうが安いです。しかも、CO₂の排出規制に引っかけられないエネルギーを使えることになります。もし中山間地域で温室をやるならば、地産地消のエネルギーを使って施設園芸ができ、しかも、我々と一緒になって先端技術を導入させていただき、東京市場、大阪市場はもとより、世界の市場に打って出る未来像を描けたらいいと思っています。

お互いが持っている、実は気づいていない資源を出し合って、プロジェクト、プログラムをつくって、これからネットワークの活用などを通じて不便が解消されるようになれば、中山間地域で暮らすことが、必ずしも不自由で我慢しなくてはならない生活ではなく、自分の好きな環境の中で自分の好きな仕事ができ、しかも生計が成り立つ生活ができと思っています。

道路がつながり、鉄道と結ぶとなってくれば、これからやりやすい時代がやってきます。混み合った人だらけの東京で暮らすことが好きな人はいいですが、そうでない人は、東京に1時間や2時間で遊びに行ける。そして、普段はとてもいい空気の中で自分の大好きなことをやって暮らせる環境をそれぞれの地域がつくっていくことを広域連携の中で一緒になって支援し、マーケティングしていける仕組みを、ぜひこの三遠南信地域の枠組みの中でつくっていきたいと思っています。

コーディネーター

すばらしいまとめをしていただきました。ありがとうございました。

SENA が10年たって、新しいビジョンを策定するに当たって、この分科会でもいろいろな御意見をいただいたと思います。

もし御発言が足りなかったという方、あるいはどなたかの発言に対してコメントしたい方はいらっしゃいますか。

泰阜村 松島村長

最初の中野さんの発表について、全くそのとおりだと思います。父母のどちらかが1人になっても生きているうちは、子も帰ってきて道路作業に協力してくれるものの、亡くなった途端に来なくなるケースがあります。発表の中でも、個人だけではなく集落とのつながりをということでした。子供たちがリタイア後、仕事をやめた後に、集落へ帰る気持ちがあるのかという点を調査することは検討されたのかお聞きしたいです。

コーディネーター

静岡文化芸術大学の船戸先生、よろしくお願いします。

静岡文化芸術大学 文化政策学部 文化政策学科 船戸准教授

今、松島村長が言われたのはすごく大事なことで、集落到う子供さんの数は、集落到に住む人たちもある程度分かっています。大事なのは、出ていった子供たちが将来的に故郷に帰ってくる、要するに帰郷意識を持っているか持っていないかという点は大きいということです。

先ほど挙げた集落の方々に「子供さん、帰ってきますか？」と聞いたら、ほとんど全員が「帰ってこない」とおっしゃったのです。「それについて聞きましたか？」と聞いたら、「聞いてない」と言うのです。つまり、帰ってこないに決まっている、あるいは親の願望として、こんなところには住むところではないと思うから帰ってきてほしくないと思っているのです。本人に直接聞いていないにもかかわらず、本人の意

志が分かるのは不思議に感じたため「やはり聞くべきではないですか？」と言うと、「それは聞けない」と言われました。そこで、平成29年8月、このA集落から転出した子供さんと中学生以上のお孫さんにアンケートを配って「将来的にA集落に帰って来て住む意志がありますか？」と尋ねました。このアンケート調査の結果については、12月にA集落の人たちに集まってもらい、そこで発表する予定です。

このアンケート調査の結果、10人中2人は「将来的にA集落に帰ってきて住む」と言っています。ただし「親に言いましたか？」という質問に対しては、2人とも「言っていない」という回答でした。このような回答をした子供は、親に帰ってくるとは言っていないが、いずれ実家に帰りたいたいと考えているのです。一方、親に尋ねると「子供は帰ってこないと言っている」と回答します。確かに、インフラの未整備あるいは公共交通の縮小など、そのような点に過疎問題の原因を求める意見もあります。しかし、中山間地域に住んでいる人たちの親と子供の会話、親と子供の関係がねじれているところに過疎を深刻化させる要因があるのではないかと考えています。

さらに「帰ってこない」に回答した人でも「どのような条件がクリアされたら帰ってきますか？」という質問をしました。

「このような課題が解決されたらA集落に帰ってくる可能性は十分あります」と答えてくれた人もいます。中山間地域に帰郷したいと思っている子供さんたち、あるいはお孫さんたちは確実にいます。特に孫の帰郷は、最近、「孫ターン」と呼ばれていますが、そういった可能性も佐久間町には十分あります。また、その直系ではなく傍系の兄弟姉妹の子供さんがいて、実はその子供さんが帰ってきている事例もありました。自分には子供がいないが、兄弟姉妹の

子供が実家を継ぐというのであれば問題ないと回答する家もありました。

よって、集落や実家に通う、農山村の家族関係は、私たちが考えている以上にかなり拡大しているのではないかと思います。本人の意志を今後確認したうえで、来年は、その人たちと現在集落に住む人たちとの交流に限定した取り組みをしようと考えています。そのような人たちを対象とした「交流人口」の活かし方もあると思っています。例えば、愛知県東栄町に住んでいるA集落出身の子供が佐久間に帰ってくる。これも三遠南信地域が有している「交流人口」の一側面であると思っています。

今回の話は、ある小さい集落のことかもしれないませんが、うまくいけば他の佐久間町の集落にも影響を与えていると考えています。今後は、このような取り組みを地道に取り組んでいきたいと思っています。

コーディネーター

全体会のパネルディスカッションの中で、愛知大学の戸田先生から、これから人口は減っていくが、長寿命化が進んでいく中で、ライフステージが多層化していくとの話がありました。要するに、人々の考える価値観が多様化しているわけですから、山にこれから住みたいという人も、2割もいれば、中山間地域にとっては相当の割合になると思うので、そういう意味では未来があるかと思っています。そのために、中山間地域の自治体、あるいはそこで働いている方たちがどう頑張るか、さらに言えば、下流域の都市部の方と上流域がどう連携をし合うかということになるのかと思います。

その大前提に、本日のパネルディスカッションの発言にもありましたように、全ての根幹が道路だという御発言がありました。それがないと、中山間地域へのアクセスは非常に大きな問題で、中山間地域の魅力を

高めるためにも、ICT技術の進歩とともに、移動のしやすさをどう確保するかが、中山間地域にとって極めて重要なことであると考えています。

時間になりましたので、この分科会については終了とさせていただきたいと思います。

この後、報告会において、分科会の議論の内容を報告することになっております。本日皆様からいただいた意見については、新しいビジョンの策定に活かしていくということをお約束した上で、報告会での私からの発言の内容は一任させていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

それでは、どうも御協力、ありがとうございました。お礼を申し上げます。

これをもって「山・住」分科会、閉会とさせていただきます。

8 報告会 要旨



■「道」分科会コーディネーター 浜松市 鈴木市長

「道」分科会につきましては、二つある推進方針に基づき御意見をいただいた後に、3番目に全体としての御意見をいただきました。

まず、推進方針1「人とのものの交流促進」には、三遠南信自動車道は災害時における太平洋沿岸部と内陸部を結ぶ命の道、支援の道であり、非常時を意識した交流機会設定の重要性や、三遠南信自動車道と国道151号のダブルネットワーク化推進の必要性、また三遠南信地域の南北軸の南端を渥美半島で終点とすべきではなく、紀伊半島から四国方面へのアクセスは国土全体から見ても必要なことであり、三遠伊勢連絡道路についても考慮すべきであるとの御意見がございました。

次に、推進方針2ですが、「情報の交流促進」につきましては、特に中山間地域においては、光ファイバーに代表される高度情報通信基盤の整備は必至であり、大規模災害時における各地域の役割分担を明確にし、その情報を圏域内で共有しなければならない、あるいは、情報拠点として期待される道の駅の連携を重点プロジェクト化したい等の御意見がございました。

最後に、基本方針である「中部圏の中核

的都市圏となる地域基盤の形成」につきまして、戦略的に道路をつなぐグランドデザインやマスメディアの県境を越えた連携の重要性が指摘されました。

また、地域の特徴や強みを生かした産業づくりとともに、地域の産業競争力を高める戦略的な企業誘致や地域連携による産業振興も必要である。それから、中部圏の中核的都市圏となる地域基盤の形成は、産業の国際競争力を高め、三遠南信地域間の交流促進など、地域振興に与える効果が大きく、重要である。さらには、道の付加価値化が必要であり、特に動く商店街ともなる軽トラ市は、三遠南信地域に集積が大きく、ネットワーク化が有効であるとの御意見もありました。そして、自動車産業の先を見越し、三遠南信地域内への充電インフラの戦略的な設置を検討すべきとの意見等がございました。



■「技・人」分科会コーディネーター 静岡文化芸術大学 池上副学長

この分科会では、「技」と「人」という二つのテーマについて、議論を行いました。「技」については、基本方針として「革新を取り込む産業創造圏の形成」、推進方針として「既存産業の活力増進」、「産業創造力の強化」という二つの柱がございまし

た。

「人」については、基本方針として「地域の持続的発展に向けた人材集積地の形成」があり、推進方針として「次代を担う人材の育成・確保」、そして「多文化共生社会の形成」という二つの柱について議論をしました。

この二つのテーマについて、前半、後半で分けたのですが、結果的にはその二つが有機的に結びついた議論となりました。例えば「技」につきましては、一つだけ産業を絞り込んで、選択と集中を図り、その産業が既存産業を引っ張っていくような仕組みがつかれないだろうかとの御意見がありました。

また、三遠南信地域は、現実問題として人が流出している地域であることを前提とした対応が必要であるとの御意見があり、とりわけ女性の働く場をきちんと求めていくことが大事ではないかとの御意見がありました。ただ、それは単に20世紀的な方法で工場を誘致するという話ではなくて、女性たちが生き生きとその地域での暮らしを満喫して生きていける、そういった新しい働き場の形成が大事だとの御意見がございました。

また、まちづくりの人材として、外の知恵をどんどん入れていく、あるいは外のネットワークとつながっていく、地域を外に開いていく視点も大事だとの御意見がございました。住民団体の方からは、100年後も幸せな暮らしができるような視点が重要で、自然、風景をきちんと残していく、またコミュニティがつながっていく必要があるとの御指摘をいただきました。その延長線上で、どうしてもこの三遠南信地域は、道路が第一の関心になって、二次産業の発展に力点が置かれるのですが、実は農林水産業に新たな価値を見出すことも大事ではないかとの発言が多々ございました。工業

やサービス業の視点を入れた6次産業化の方向と同時に、農的な暮らしのよさを改めて見出すような視点を打ち出していけば、そこに例えば都会の人たち、あるいは女性たちが新たな活躍の場を求めて地域に残り、あるいは外から入ってくるのではないかとの御指摘をいただいたわけです。

人材育成の大切さについても、議論が盛り上がりました。具体的などころでは、高校の先生方に地域の企業を知ってもらう、親子の企業訪問など具体的な顔の見える関係で、地域の人々と地域の産業をつないでいく工夫が大事ではないかとの御意見がありました。とりわけ次世代を担う子どもたちにこの地域のことをどうやって知ってもらうかという点が、もう一つ大きなポイントになったわけです。具体的などころでは、林間学校、臨海学校の交流を図ることや、三遠南信地域共通の副読本を作り、この地域の価値を次の世代に伝えていこうとの提案もいただきました。

何よりも強く皆さんから求められたのは、SENAの中に事業部門を立ち上げて、実動部隊として職員を配置することでした。そうして新たな施策の展開をやっていかないと、次の10年間も同じことを繰り返すのではないかとの御指摘を住民団体の方からいただいて、私ももっともだと感心した次第です。



■「風土」分科会コーディネーター
法政大学 高柳教授

まず推進方針1「地域資源を活かした広域観光の推進」という点で、この地域には、大変豊かな地域資源がある。例えば山のような自然、地形、温泉、あるいは食べ物、そして伝統的な祭りや花火、こういった人を呼ぶに値する豊富な資源があるという点で、いろいろな紹介がございました。そういった地域資源を単一の自治体ではなく、広域でどのように発信、連携していけるのかという課題に対し、例えば広域観光ルートの開発やその広域マップの作成、スタンプラリーの実施といった具体的な提案もなされました。その一例として、三河地域の「みかわ de オンパク」が紹介され、この仕組みはもっと広げられるのではないかと御意見がありました。

次に、推進方針2「地域資源の保存と継承」ですが、伝統文化が高齢者によって担われていて、これからどのようにそれを継承、維持できるのかという点について、例えば高校生を初めとした若者に伝えていく、そういう若者の人材を養成していくことが語られました。

それから、この地域は、形のある、例えば重要伝統的建造物群保存地区ではなくて、形のない伝統文化の継承になります。それを今のうち、例えば文書や映像で記録する取り組みについても、いろいろ御紹介がありました。後世にいかに残していけるかということで話し合いがなされました。

その二つを踏まえて、基本方針は「塩の道文化創造圏の形成」ですが、地域資源をどのように組み合わせて新たな価値をつくっていくのか、本質的な価値を見出していくのかという点で、行政の参画のあり方、あるいはその担い手となる部署なり人材をきちんと置いていくことについても語られました。

最後に、これは本質的なことかもしれませんが、この風土の分科会では、基本方針として、「塩の道文化創造圏」という言葉がうたわれていますが、果たしてその塩の道という言葉が三遠南信地域全体に共通した言葉になりうるのかどうか、「塩の道」という言葉で全体を括るには少し無理があるのではないかと意見もありました。



■「山・住」分科会コーディネーター
豊橋技術科学大学 大貝理事・副学長

最初に、推進方針1として、「流域定住推進モデルの形成」について意見をいただきました。その冒頭に、静岡文化芸術大学の先生、そして学生から、浜松市天竜区のある集落を対象にした調査結果を報告いただきました。非常に興味深い報告でして、これまで限界集落は、いわゆる高齢化率が50%以上で、人口がどんどん減っていく、いずれ消滅するだろうといわれていました。その捉え方を少し変えて、家族とのつながりという視点から、その集落の維持を考えてはどうかとの具体的な提案がありました。

つまり、集落に住まれている方の子どもがどこに住んでいるかという点を調査すると、ほとんどの人が2時間以内の地域に住んでおり、毎月親元に戻られているそうです。そういった点を踏まえると、今後集落問題を考えたときに、この家族のつながりが非常に重要であると提案をいただきました。

続きまして、行政の方から御発言をいただきました。一つが、県境を越えた婚活事業の提案です。最近、未婚者が非常に増えており、こういった方の婚活を進めるイベントを、県境を越えて開催したらどうかというものです。

また、南信州広域連合で進んでいる具体的な取り組みとして、ロシアにある菜園付きのセカンドハウス「ダーチャ」の企業版を当地域で取り組むのはどうかとの提案もありました。

それから、中山間地域での遊休施設の有効活用策として、平時は週末リゾートや二地域居住の拠点にし、非常時に緊急避難地として活用できる施設に転換していったらどうかとの具体的な提案をいただいております。

次に、推進方針2「自然資源の循環利用の推進」について意見をいただいております。

この議論は、ずっと以前からある議論ですが、森林の持つ魅力を最大限に発揮する取り組みとして、里山林、生産林、環境林といったエリア分けを行う森林のゾーニングの構築の提案、またドローンを活用した地域活性化事業などについて提案をいただきました。

最後になりますが、この「山・住」の基本方針について、中川村と豊橋市から御意見をいただいております。特に、安全安心な広域生活圏を形成するためには、南海トラフなどの来たるべき大災害の備えとして、いわゆる上流域と下流域、上流域による沿

岸域の支援内容を、今後具体的に検討していくことが極めて重要であると意見をいただいております。

平成 19 年度の第 15 回サミットで合意した「三遠南信地域連携ビジョン」が、策定以来 10 年の節目を迎えます。

SENA を平成 20 年に設立して以降、このビジョンを柱として、内閣府の「地域社会創造事業」におけるインキュベーション事業やインターンシップ事業、国土交通省の「広域地方計画先導事業」における三遠南信ガイドブックの発行や「官民連携主体による地域づくり推進事業」として産学官人財育成円卓会議等を開催したほか、地域資源情報の発信、航空消防に関する応援協定や災害時の相互応援協定の締結などに取り組んでまいりました。

この間、三遠南信自動車道や新東名高速道路といった高規格道路整備の進展、リニア中央新幹線整備における飯田市への長野県駅（仮称）設置の決定、東日本大震災を契機とした防災体制の強化、見直しといった数多くの社会環境の変化がありました。

また、今後の人口減少や少子高齢化の進行、リニア中央新幹線東京－名古屋間の開業、第 4 次産業革命など三遠南信地域を取り巻く大きな環境の変化を捉え、新たな 10 年を展望する第 2 次三遠南信地域連携ビジョンの策定に向けて、本日、議論をいたしました。

まず、新ビジョン策定に当たり、以下を目的として掲げました。

- 1 交通基盤整備の進展に伴う交流・連携活動の深化
- 2 産業構造の転換期を先取りする産業創造力の強化
- 3 三遠南信地域特有の地域資源の活用による交流人口の拡大
- 4 流域住民が共生する県境を越えた広域生活圏の形成
- 5 三遠南信地域の持続的発展を支える人づくり

そして、この新ビジョンのテーマを

「三遠南信流域都市圏の創生～日本の県境連携先進モデル～」とし、

次の 3 つの視点から地域像を描いてまいります。

- ① リニア中央新幹線や東海道新幹線、高速道路、港湾、空港などの交通基盤を活かし、「大都市圏・世界と結ばれる広域連携都市圏の形成」を進めます。
- ② 高次都市機能の集積が進む名古屋大都市圏との機能連携を図り、「中部圏での中核的な都市圏の形成」を進めます。
- ③ 上下流域が広範な分野で有機的な連携を図り、「流域循環圏の形成」を進めます。

今後は、本日のサミットでの議論を踏まえ、具体的な施策や事業などの検討を進め、来年度のサミットにおいて第 2 次三遠南信地域連携ビジョンの合意を目指します。

これらの成果をここに集うすべての主体が共有し、第 25 回三遠南信サミット 2017 in 遠州のサミット宣言といたします。

SENA 構成自治体に係る連携体制の強化については、一つ一つの市町村の主体性を尊重しつつ、広域連合設置を見据えた第一歩として、平成 30 年度中に連携中枢都市圏などの制度活用を検討してまいります。

平成 29 年 10 月 30 日

三遠南信地域連携ビジョン推進会議

三遠南信サミット 2017 in 遠州



■ 次回開催地域代表挨拶

豊橋市 佐原市長

皆様、こんばんは。次期開催地の豊橋市長の佐原でございます。

本日の「第25回三遠南信サミット2017in 遠州」には、たくさんの皆様に御参加いただきました。そして素晴らしいサミットを実施していただき、浜松市の関係者の皆様、商工会議所をはじめとする経済界の皆様、大学関係者の皆様に心から感謝を申し上げたく存じます。

さて今回は、25回という四半世紀の節目を迎えた今回のサミットに続く26回目のサミットということで、新しい四半世紀の1歩目を踏み出すサミットになりますし、新ビジョン策定の提案をさせていただくという、非常に難しくもあり、わくわくするような部分も秘めたサミットになると考えています。浜松市のように素晴らしい施設ですばらしいおもてなしができるかどうかは、はっきり言って自信のないところですが、しっかりと皆様方の記憶に残るサミットにしていかなくはないと覚悟を決めているところです。

これから10年の新ビジョンを考えるに当たって、たくさんのことが思い浮かびます。おそらく、10年後にはリニア中央新幹線ができていでしょうし、三遠南信自動車道もミッシングリンクがなくなり、我々のこの地域がしっかりとつながっていると思います。そして、もしかしたら浜松三ヶ日・

豊橋道路もつながっているかもしれませんし、三河港の蒲郡地区には、毎週のように客船が入ってにぎわっているかもしれません。そのような、わくわくするようなこれからの10年を思い描いていますが、もう一方では社会も大きく変わろうとしています。IoT や AI などの様々な技術の進歩によって、私たちの社会の構造や働く場の姿が大きく変わろうとしています。また、ラグビーワールドカップや東京オリンピック・パラリンピック、我々の地域においてはアジア大会など、国を挙げての大きなイベントもたくさんあります。そのような、すばらしくもあり、難しくもある10年に対して、この三遠南信地域が、三遠南信地域らしい魅力あふれる新ビジョンを打ち出していくために、これから1年間、関係する皆さんと必死に汗を流し、知恵を絞り、頭を熱くして考えて議論しながら進めていきたいというように強く思っています。

すばらしい第26回三遠南信サミットにしていきたい、そのために精いっぱい努力をしてみますので、ぜひ関係者の皆様には、御指導、御支援を賜りますよう、そして、当日たくさんの方に御参加いただきますように、心からお願い申し上げまして、私からの挨拶とさせていただきます。来年も頑張ります。よろしくお願いいたします。

9 交流会



10 三遠南信住民セッション 要旨

■挨拶

三遠南信住民ネットワーク協議会

代表世話人 山内秀彦氏

三遠南信サミットの開催も5巡目に入り、行政・経済団体・住民団体の三位一体の形でやってくることが定着したが、若干参加者の顔ぶれも変わってきた。



本年は、三遠南信地域連携ビジョンの策定後10年を迎え、見直し作業を進めている。今後の10年間を考えて、地域で連携し、活動している方の生の声を三遠南信地域連携ビジョンに活かしていくことが必要である。

そんな視点で、これまでの取り組みに加えて今後の三遠南信地域の連携について、若い人たちなど新たな人たちが入り込み、新しい風、流れを起こしている事例を紹介するなど様々な話題を提供していただきながら、意見交換を進めていきたい。

■これまでの連携ビジョンの評価と新ビジョンの説明

1) 新ビジョンの策定状況について

- ・本年度から、学識経験者や経済団体などが新ビジョン策定委員会に参画し、策定作業を進めている。SENAが中心になり、ビジョン策定委員会にて意見をとりまとめている中で住民団体も参加していく。
- ・平成30年度の三遠南信サミットで、新ビジョンの承認を得るべく、現行のビジョンを総括し、見直ししている段階である。

2) 連携ビジョンの評価

- ・現行のビジョンの評価について、重点プロジェクト別進捗状況カルテ（道・技・風土

山・住で評価したもの）を基に、説明した。

3) 新ビジョンの基本方針

- ・人口減少が続く中で、三遠南信地域をどのように活性化させるかが課題である。基本方針（案）では五つの目的を掲げている。
 - 交通基盤、
 - 産業構造
 - 地域資源の活用
 - 広域生活圏 流域文化
 - 人づくり
- ・現時点では、地域の目指す将来像（三つの柱）及び基本方針（案）までが策定委員会において決まった。重点プロジェクトに関しては、今回のサミットと今後の策定委員会の議論を通じて作り込んでいくことになっている。
- ・三遠南信サミットの分科会では、どのような重点プロジェクトに取り組んだらいいかという点を議論する。本日の意見交換会において、「こんなことをやりたい！」という具体的な提案をしていただきたい。



■新しい風・流れの事例紹介

静岡文化芸術大学 文化政策学部
准教授 船戸修一氏

- ・自己紹介：
農村社会学を研究している。
商業活性化ネットワークをつくる研究も行っている。



- ・私が話すのはミクロな話であるが、これが忘れてはいけないことで、大事なことはないかと認識してほしい。
- ・中山間地域の問題は、三圏域ともに共通するテーマを抱えている。
- ・一般的に人口が減ると集落が消滅するという議論がある。自治体や国家も消滅すると言われている。
- ・私は、「人が減るとまちはなくなる」という議論は根拠がないと考え、調査している。
- ・私のゼミで考えているのは、人口はこれまではむしろ増えすぎたのだから、各自治体で減っても対応できる、高齢化・人口減少を過疎問題に結びつけるのはどんなものか、減少することを冷静に考えた地域づくりを考えるべきだと思う。

■東日本の災害で

- ・東北地方では、190 の集落の消滅や村の統合があった。既存の集落数ではなく、集落数が減った。住民自らが自発的に集落を出るというよりは、住みたかったけれども奪われてしまったことに起因している。
- ・人口減少は集落消滅に直結しない。過敏に反応してはならない。悲観的な将来像を描くことはよくないのではないと思う。
- ・人々は「住むことができないのだから」と思い始め、中山間地域から出ていく。住むことに対する誇りを持てば、集落は残

り続けるであろう。冷静に対応することが必要ではないかと思う。

■限界集落についての誤解

- ・限界集落とは、農村社会学の大野晃先生が高知の山村を調査してつくった言葉で、本来は 65 歳以上の人口が半分以上を占め、社会的共同生活の維持が困難である集落を指すが、今は消滅集落だと誤解を招いている。

■高齢化率が高くなると集落は消滅してしまうのか？

- ・近隣に住んでいる子どもが、集落へ頻繁に通い、近隣住民に対しても作業や買い物の手伝いなどをすることで、住民の数が減っても集落は残る。

■佐久間町

- ・佐久間ダムを造っている時に人口が増え栄えたが、1955 年をピークに、人口が減少している。
- ・佐久間町のとある集落の人口は 17 人とされていた。行政は集落を出て行った人がどこに住んでいるかデータを持っていないので、1 軒ごとに聴き取りを行ったところ、子供と孫などが 32 人いることが分かった。この人たちは、集落外に出て行っても、それまでの経験があり、集落に対する責任感が違う。こういった人たちがいるから、まだまだ期待できる。
- ・集落を出て行った人の大半が 2 時間で移動できる範囲に住んでいる。道路事情が良くなった現在、年に 11 回、月 1 回は帰っている人が 58%いる。もっと通わせるようにしませんか？
- ・集落にいる人たちだけでなく、集落から出て行った人を含めて集落の将来図を考えていく方針である。

■担い手は、移住者よりも家族

- ・かつては三世代四世代が同居していた。現在は地域外に住んでいて、集落を超えた家族の考え方が広がったのではないか。

- ・地域に残る親は「こんなところに帰って来ない。」と言うが、地域を出ていった子どもには直接聞いていない。子どもたちの帰郷意思を調査したら、2割くらいが帰りたいたいの思いがあった。しかし、子どもはその思いを親に伝えていない。
- ・住まない選択の人たちが、どうしたらその地域で暮らすのかも考えるべきである。

■運動会やまつりをする

- ・帰ってくる時に隣の人と人間関係ができていない。隣近所とのつきあいをつくりたい。私たちがそのコーディネートをやりますと言っている。
- ・来年、運動会まつりをして、出て行った人たちのネットワークをつくることを働きかけるように計画している。



■三つの圏域から「新しい風・流れ」の報告

1) 東栄町 若者地元会議「りん」

伊藤拓真氏【東三河】

- ・東栄町に住んでいたが、大学に進学したのに伴い名古屋に出た。その経験から感じたことは、地元から離れていくと地元とのつながりをなかなか持てないということ。地元に戻りたいとの思いはあったが、どう帰ったらよいかかわからなかった。そして、周りに自分と同じ思いを抱いている人が多いことを知った。



- ・それならば、都市部に住んでいても地元に戻ることができるコミュニティをつくろうと考えたことが活動のきっかけである。

<これまでの活動を紹介>

■東栄どりんくす

- ・2ヶ月に1回ほど東栄出身者やゆかりのある人が集まり、新たなコミュニティを醸成する。

■まち冒険

- ・学生が長期休みに集落を訪問する。
- ・地域の人と話すことで、知らなかった地元を知り、新たな企画を考えることができる活動となっている。

■地元巡りん

- ・イベントとして、帰省の時期に開催。
- ・地元のことを学び直す。各メンバーの学んだ内容を活かして、森林について考えたり、町のイベントでブース出店したりしている。たとえばオリジナルTシャツをつくる体験ブースの出展などを通じて、地元イベントに行きにくい若者が主体的に参画するきっかけづくりをしている。

■山暮らしカンパニーとの合同企画

- ・南信の団体である「山暮らしカンパニー」と知り合い、コラボして地域づくりに関わる若者の交流の場やコミュニティづくりを行っている。
- ・それぞれが抱える問題も似ているので、若手が問題に対してそれぞれの団体で人材育成に取り組み、シェアすることで問題解決できるのではないかと考え、活動している。

■情報発信

- ・LINE、Facebook、インスタグラム、ツイッターなど様々なSNSで出身者向けに地元の情報を発信している。

■今後は、活動を広げたい

- ・イベントに関わるきっかけを提供したい。
- ・新しい帰省の形を発信する。
- ・若者地元会議と称して地元の課題解決方法

を議論して提案する。地元との新しい関わり方として、都市部にいながらこの地域に関われる仕組みをつくりたい。

2) NPO 法人てほへ副理事長・志多ら総合統括プロデューサー 大脇聡氏【東三河】

- ・自分自身が I ターンしてきた。自分の子どもは東栄町に生まれ育っている。地元生まれの人が一番地域に愛着があるので、I ターン者よりも帰ってきたい想いを持っている。地元出身者が地元と関われるコミュニティ場づくりをする「りん」を支援するため、当 NPO が管理運営する「のき山学校」を活用して活動できるように協力及び支援し、連携をすすめている。

3) やまびこチャレンジ 代表 鈴木崇斗氏（浜松学院大学 学生団体）【遠州】

- ・平成 28（2016）年 4 月に浜松学院大学の学生が主体となり設立した市民団体である。中山間地域の活性化や都市部とつなぐことを目的に活動している。文部科学省から認可された「長期学外学修プログラム」により、春野の勝坂集落に 1 ヶ月住み込んで「勝坂かぐら」の練習をして活動している。
- ・プログラム終了後も継続的に中山間地域で活動できるよう、大学のサークルではなく市民団体とした。



■活動内容

①伝統芸能継承

- ・勝坂神楽：浜松市天竜区春野町勝坂に伝わる伝統芸能
- ・川名のひよんどり：浜松市北区引佐町川名に伝わる国指定重要無形民俗文化財
- ・大学生と民俗芸能協働の取組事例として、勝坂神楽の学習と参加、川名のひよんど

りの学習と参加を紹介した。これらの民俗芸能のお祭りに参加した学生たちが中山間地域の魅力を発信し、現在では学生が自主的に活動を行っている。

②マーケットへの出店

…中山間地域の魅力を都市部へ発信！！

- ・アクト通りふれあいデイ：毎月第 3 日曜日にアクト通りにて開催されるイベント
- ・ザ・山フェス：10 月 14 日、15 日に浜松駅前ソラモで開催された山の魅力体験イベント

③シンポジウムへの参加

④やまびこスクール

- ・自然と触れる機会を作り、スクールを通して自分の地域の魅力を再認識・再発見してもらうことを目的とする。

⑤市民農園…耕作放棄地を住民と再生

- ・現在は、そば・白菜・人参などを栽培。
- ・平成 29 年の春にはジャガイモを約 100kg 収穫！

⑥茶屋運営…営業してないお店の再生

- ・平成 29 年 8 月より 1 年生が主体となり、毎週日曜日 12:00～営業している。
- ・茶屋では、そば、かりんとう、クッキーなどを販売している。

⑦水車復活 Project

…動かなくなった水車の復活

- ・ランドマークの復活と日本人の原風景を再生するため、水源とため池の修繕・掃除をし、水を送り込むことを始めた。

■今後の活動

- ・民俗芸能の魅力を多くの人たちに発信していく「ポータルサイト」の開設をしたい。個人レベルでは参加できない、相談できない人が中山間地域に来るきっかけをつくりたい。ただ、移住して人が増えることはいいが、学生にできることは限られる。
- ・大学の「長期学外学修」に参加する学生は、前年度に得た知識や技術を学生間で

継承していくことを考えている。

4) 南信州交流の輪 矢澤律子氏【南信州】

- ・今までにない活動が生まれている。例えば、飯田下伊那地域出身の歌手が、全国に南信州地域をアピールしてくれている。
- ・地域おこし協力隊などの若い人たちが地域に入り込んで、自分たちの知恵、アイデア、仲間作りをして基盤を築いている。
- ・南信州交流の輪は「まつり街道弁当」の取り組みを行っている。
- ・三遠南信地域には、時季ごとの伝統芸能があるが、地元の人でさえ、見たことがない人も多い。それらの祭りをイベント的に紹介して、祭りの時に出す伝統食を「祭りと食文化」として紹介している。
- ・平成 29 年 11 月 18 日、五穀豊穰に感謝するイベント（体感講習会）を飯田市で開催する予定である。昼食交流会の中で五穀豊穰祝い弁当を提供する。
- ・今田人形浄瑠璃など伝統芸能をきちっと伝えたいと考えている。祭り文化を保存している人に学び、地域の文化を学習し、それを新しい風とつなぎ、文化を継承していく活動を行っている。



5) 合唱劇「カネト」をうたう合唱団

清水良文氏

【東三河】

- ・中山間地域の移住や地域おこし協力隊など外か



ら来た人がどのように町にかかわれるか。

- ・新城市では、5～6 年前から社団法人をつくらせている。組織作りが重要である。
- ・公的な支援も受けられる。
- ・今後、地域おこしがどうなるかが非常に楽しみである。地域おこし協力隊とのネットワークをつくれたらいいと思っている。
- ・若者が活躍しているようなら、東栄町も地元若者会議「りん」などとネットワークを組むことができると面白い。

■グループディスカッション

3 グループに分かれて、意見交換を行った。
各グループの意見は、各グループのファシリテーターが以下のとおり報告した。

A グループ：ファシリテーター

NP0 法人地域づくりサポートネット山内秀彦氏

- ・地域にいかに入り込むか。地縁血縁で守ってもらいたい気持ちもあるが、まちを見に来て、地域の中に入り、地域のファンになる新しい志縁の形もある。
- ・地域側は志の縁をいかに受け入れていくか。
- ・気をつけなくてはならないのが肩ひじはらず、ただし、地域に入るには覚悟も必要である。
- ・この地域をなんとかしたい人が覚悟して移住するなり、通うためには、地域側との仲介が必要になる。
- ・セカンドキャリアを生かして働ける場所づくりも重要である。インターネットや自動車道などのインフラが発達したので、都市部に住まなくても生業・生計も立つようになれば、もっと移住者が増えることが期待できる。
- ・地域にゆかりのある人の関わりを求めている。呼びかける人の存在が大切である。くっつける人、フォローアップする人、中間支援組織・機能をつくる必要がある。

- ・時間はかかっても、“つなぐ機能”は実現しなくてはならないということがポイントである。



B グループ：ファシリテーター

愛知大学総合郷土研究所 平川雄一氏

- ・地元にはゆかりのある人を含め、交流するには、情報をきちんと発信し、情報を受け取る必要がある。
- ・その一つのやり方として、様々な情報を一つにまとめて発信した方がよい。どこでもやっている手法ではあるが、三遠南信広域の「フリーペーパー」を発行することができないか。
- ・また、バラバラになっている三遠南信地域の観光イベントなどの情報を集約して三遠南信地域のポータルサイトとして情報発信していくことが必要である。
- ・ここ一年くらいは、NHK 大河ドラマの影響で直虎ゆかりの地である奥浜名湖周辺や高森町からの交流も増えている。しかし、情報がバラバラなので、観光行事・イベントなどの情報を集約してもらいたい。



C グループ：ファシリテーター

NPO 法人三遠南信アミ 中野眞氏

- ・三遠南信地域は、魅力あふれる素晴らしい地域であることをベースに、「ここに住み続け、訪れ、帰ってくるためのいろいろな仕組みをつくることが大事である。
- ・何よりも人が大事で、本日の住民セッションのように情報交換する場がほしい。そして、場を形にして、継続するための仕組みづくりが必要である。
- ・集落が継続するためには、Uターン、Iターンを促進することも不可欠である。
- ・地縁、血縁の人が帰って来やすい場、受け入れやすい風土をどうつくるかが課題である。
- ・山に暮らすとなれば仕事も肝心で、仕事をどう提供するのか。また、人づくりがとても大事である。
- ・伝える、つなげる、支えることが大事である。
- ・三遠南信地域の魅力は中山間地域であり、海拔 0～1000 メートルを移動できる地域は珍しい。山と海があり、それを天竜川がつなぐ。その流域の暮らしの魅力やつながりを大切にしていけるべきである。
- ・地域内に大企業が多く、CSR として社会貢献活動ができ、実際にやっている企業もある。都市とのつながりや大企業とのつながりもテーマにあげる必要がある。



■全体討議

1) 総括

三つのグループの意見を総括した。

①地域と地域、人と人をつなぐ機能の構築

- ・中山間地域の DNA を有する人（出身者など）や、交流する人を誘導・支援する施策を三遠南信地域連携ビジョン推進会議に提案する。
- ・地域と地域、人と人を“つなぐ機能”（中間支援）の構築が必要である。
- ・そのコーディネート役としては、若者や学生を呼び込むためにも大学に期待できるのではないかな。

②三遠南信の情報発信

- ・広域におよぶフリーペーパーの発行や学生が運営するポータルサイトや SNS を構築したい。

③Uターン・Iターンの人が帰って来やすい仕組みづくり

- ・受け入れられやすい風土づくり
- ・セカンドキャリアを促進する施策
- ・大企業の CSR を活用して、Uターン者・Iターン者を呼び込む。

2) 新しい提案

NP0 法人地域づくりサポートネット

代表理事 山内秀彦氏

- ・住民セッションでは議論しなかったが、三遠南信地域に新しい層の交流人口を呼び込み地域を活性化させるため、重点プロジェクトの一つとして、太平洋と日本海をつなぐ「塩の道」自転車旅の取組提案を紹介した。三遠南信地域の圏域からもう少し広くとらえて、塩尻・諏訪湖、そして新潟までをつなぎ、訪日外国人観光客も呼び込んでいきたい。
- ・国が自転車活用推進法を制定し、本年から施行されている。サイクルツーリズムも人気で、東京オリンピック・パラリンピックの自転車競技が静岡県で開催となってい

ることもあり、サイクルツーリズムの聖地を目指す静岡県側から信州に向けた官民連携・地域連携の提案である。

- ・三遠南信自動車道や中部横断自動車道の高速道路が整備されていく中で、下道（現道）と沿線地域の活性化という課題に対しても提案したい。
- ・南北をつなげる鉄道を輪行として活用することで JR 飯田線の活用・活性化にも寄与できる。
- ・この提案は、午後のシンポジウム及び道分科会でも発表していくが、住民セッションで紹介し、新ビジョンの重点プロジェクトとして呼び掛けていきたい。

